SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol.108／ 2015 April
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

＜ 目 次 ＞

新入生638名が第一歩を踏み出す―仙台大学入学式	1
平成27年度 新任者紹介 挨拶	2
大河原小学校で仙台大学連携校指定式を開催	5
現役学生初「日本体育協会公認アスレティックトレーナー」検定試験に合格	6
フィンランド・台湾からの留学生が「茶道」を通して日本文化を学ぶ	7
学生の競技結果等	10

新入生638名が第一歩を踏み出す―仙台大学入学式

新入生を代表して宣誓文を読み上げる齊藤源生さん＝仙台大学第五体育館

4月4日（土）、本学第五体育館で「平成27年度 第49回体育学部第18回大学院入学式」が執り行なわれました。新入生638人（体育学科329人・健康福祉学科107人・運動栄養学科88人・スポーツ情報マスメディア学科49人・現代武道学科49人・編入学生4人・大学院スポーツ科学研究科12人）が、大学生活の第一歩を踏み出しました。

阿部芳吉学長は、新入生に対し「志を持ち続け、仲間と支え合い、夢や目標を達成するために努力の炎を燃やしてほしい」と激励。続いて、朴澤泰治理事長が「小学校から高校までの12年間の集大成が大学である。この立ち位置を意識しつつ、主体的に学び、有意義な大学生活を送ってほしい」と期待を込めて挨拶されました。入学者を代表して、齊藤源生（さいとうげんき）さん（体育学科1年―栃木・黒磯高校出身）が「私たちは、体育・スポーツ、健康に関わる諸科学を探求し、これからの時代の担い手となるよう、身体を鍛え、教養を深め、心を磨き、豊かな学生生活をおくれるよう努力して参ります」と力強く宣誓文を読み上げた後、来賓の滝口茂柴田町長からご祝辞を頂きました。在学生を代表して、2014仁川アジアパラ陸上女子砲丸投げで世界新記録を樹立した加藤由希子（かとうゆきこ）さん（健康福祉学科4年―宮城・気仙沼女子高校出身）も「仙台大学はスポーツを科学的に研究する大学です。日本有数の施設

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY
Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

と情熱的な先生方、さらに心優しい柴田町の方々がいらっしゃいます。私も2020年の東京パラリンピックに向けて、健常者の大会に出場しながら、さらに努力して参ります。新入生の皆さん、一緒に頑張っていきましょう」と歓迎の言葉を述べました。

式終了後は、式場の外で先輩たちがサークルや研究会などの勧誘を行っており、新入生を歓迎していました。新入生一人一人の大学生活が豊かで充実したものになることを教職員一同、心よりご祈念申し上げます。

平成27年度 新任者紹介 挨拶（平成27年4月1日付）

－教員17名・事務職員2名・嘱託研究員1名・新助手7名・臨時職員10名の計37名が着任－

齋藤　幸男　教授
（国語・防災学）

震災の教訓から、防災を切り口にした命と向き合う教育を実践してきました。仙台大学の学生諸君のような実践的・行動的な人材が、これからの日本には必要です。宜しくお願いします。

郡山　孝幸　教授
（保体教育法）

これまでの教職生活、主に小学生への指導に携わってきました。仙台大学の一員となり大変光栄です。新たな気持ちで学生とアクティブな毎日を過ごしたいと思います。

牛　　志奎　教授
（教育制度・中国語）

2005年兵庫教育大学連合大学院博士号取得、2006年中国に帰国して、北京師範大学、内モンゴル民族大学、アメリカのUniversity of Daytonの客員研究員を経て、今年度から本学の中国語と教育の制度の担当になりました。これから本学留学生の研究、生活および大学の国際化に尽力して参りたいと思いますので、宜しくお願いします。

金　　賢植　講師
（幼児体育）

大学は、教えてもらう場ではなく、自ら学ぶ場です。
スポーツマンらしい振る舞いを大切にしながら、本気で遊び、本気で学んでください。

ｼﾞｪﾘｰ・ﾊﾟﾗﾝｷﾞ講師
（英語・ﾗｸﾞﾋﾞｰ）

“Nothing ventured, nothing gained.” – Benjamin Franklin
Dear teachers and staff. I am honored to work alongside you.
一緒に頑張りましょう。

黒澤　　尚　助教
（サッカー）

昨年までの8年間、新助手として勤務させていただいておりました。
新たな気持ちで、学生と共に夢を追いかけ、感動を味わい、青春します。
よろしくお願い致します。

井上　雅勝　教授
（運動学・保体教育法）

学生・教職員の皆さんとともに数多くの夢実現を目指し、爽やかに汗を流したいと思います。よろしくご指導ご支援をお願いいたします。

針生　　弘　教授
（教育学）

今年度から体育学科でお世話になっております針生です。
チャレンジの気持ちを持ちながら，学生に負けないよう頑張っていきたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

高橋　亮　准教授
（教育学・社会福祉）

子供から高齢者までが障がいがあってもなくても、元気に生きがいを持って生き抜くためのジェロントロジー教（共）育を学んで来ました。よろしくお願いします。

堀江　竜弥　講師
（看護学）

健康福祉学科の講師に着任した堀江竜弥と申します。高齢者看護学領域の教育・研究に携わってきた経験を、本学に還元できるよう努める所存です。どうぞよろしくお願いします。

三谷　高史　講師
（社会学）

近畿、四国、関東と暮らし、この東北・宮城にやってまいりました。初めての土地で少々不安もありますが、仙台大学に貢献できるよう力を尽くしてまいります。

白幡　恭子　助教
（ＡＴ）

仙台生まれ仙台育ち、少しアメリカかぶれの仙台人です。グローバルな人材育成と、学生トレーナーの実力向上、そしてATの学内普及に向けて尽力していきたいと思います。

福田　伸雄　助教 **（看護学）** 	10年前に本大学の健康福祉学科を卒業した福田伸雄です。卒業後、看護師免許を取得し、救急看護の現場で勤務しておりました。精一杯頑張りますのでよろしくお願いいたします。	**佐藤　周平　助教** **（テニス）** 	スポーツへの情熱とチャレンジ精神あふれる本学で、学生と共に歩み、自分も楽しみながら、誠心誠意努力していこうと思います。何卒よろしくお願い致します。
坪井　俊樹　助教 **（ｽﾎﾟｰﾂ情報戦略）** 	情報戦略を担当します。専門競技は野球ですがそれぞれの競技においてどうような戦略活動がなされているのかといったことを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。	**溝口絵里加　助教** **（体操）** 	体育学科でお世話になります溝口絵里加です。一日も早く仙台大学の一員として、活躍できるよう精一杯努力していきたいと思います。よろしくお願いいたします。
平良　拓也　助教 **（栄養学）** 	私は仙台大学・大学院を修了し、山形県の栄養士/管理栄養士養成校に勤務しておりました。微力ではありますが、母校に貢献できるよう尽力して参ります。宜しくお願い致します。	**芳賀　茂　さん** **（教職支援課長）** 	教職支援課でお世話になります。船岡に単身で赴任しました。意欲をもって職務に励んでまいりますので、よろしくお願いいたします。
野村　早紀　さん **（庶務課）** 	今年度より事務職員として学術会事務局を担当することになりました、野村早紀と申します。仙台大学の発展に少しでも貢献できるよう、日々努力を続けて参りたいと思います。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願い致します。	**吉田 寿美恵さん** **（嘱託研究員）** 	今年度から嘱託研究員として働かせていただくことになりました吉田寿美恵です。主に実験や実習の補助をさせていただきます。早く新しい環境になれるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
日下部 悟 新助手 **（ボート）** 	今年度からGTとして働かせていただく日下部悟です。主に漕艇部の指導を担当します。 よろしくお願いします！	**吉田 洋志 新助手** **（ハンドボール）** 	吉田洋志と申します。仙台大学を卒業し、仙台大学大学院を修了しました。種目はハンドボールです。仙台大学に貢献が出来るよう、日々精進していきたいと思います。
中村祐太郎新助手 **（バレーボール）** 	今年度新助手として働かせて頂くことになりました。男子バレーボール部の強化はもちろん、仙台大学の一員として宮城県内のバレーボール競技の発展にも貢献できるよう力を尽くして参ります。よろしくお願いします。	**村上　昴　新助手** **（運動栄養）** 	今年度から運動栄養学科の新助手としてお世話になります。村上昴です。物事を素直に受け止め、謙虚さ忘れずに社会人として仙台大学で勤務したいと思います。ご指導よろしくお願いします。
只野 瑞恵 新助手 **（運動栄養）** 	今年度から運動栄養学科新助手として働かせていただきます只野瑞恵です。一日でも早く業務を覚えて積極的に動いていけるよう努力して参りますのでご指導の程、よろしくお願い致します。	**溝上 拓志 新助手** **（ｽﾎﾟｰﾂ情報）** 	本年度より、新助手としてお世話になります溝上拓志です。スポーツ情報の分野から、大学や地域に少しでも貢献できるよう精進いたします。よろしくお願いいたします。
進藤 亮祐 新助手 **（ＢＬＳ）** 	本年度より、新助手として働かせていただくことになりました進藤です。コーチとして創意工夫を忘れずにBLS部の競技力向上、仙台大学に貢献できるように努めていきますのでよろしくお願いします。	**新開紫織臨時職員** **（学生支援センター）** 	今年度から臨時職員として働かせていただきます、新開紫織です。これまでの経験を生かし、何事にも進んで取り組んでいきたいと思います。よろしくお願いします。

松永吾賢臨時職員 **（学生支援センター）** 	この度、学生支援室で働くことになりました松永吾賢（あがし）です。学生の生活がより良いものになるようサポートし、自分が感じ、経験したボランティアの素晴らしさを伝えていけたらと思います。よろしくお願い致します。	**永井大貴臨時職員** **（学生支援センター）** 	今年度から臨時職員として学生支援室で働かせていただく永井大貴です。将来の目標の実現のために感謝の気持ちを忘れず職務に励んでいきます。ご指導よろしくお願いします。
四釜千尋臨時職員 **（学生支援センター）** 	今年度より学生支援室で働かせていただく四釜千尋と申します。一人でも多くの学生にボランティアの重要性、そして学生生活の楽しさを感じてもらえるようなサポートがしたいと思います。ご指導の程よろしくお願い致します。	**石橋雪乃臨時職員** **（学生支援センター）** 	今年度から学生支援室でお世話になります、石橋雪乃です。 主に留学生の語学支援を担当します。 不慣れではありますが、一生懸命頑張りますので、ご指導の程よろしくお願い致します。
村松敦大臨時職員 **（学生支援センター）** 	本年度から臨時職員として学生支援センターに配属になりました村松敦大です。多くのことを勉強、吸収し成長をしていきたいと思います。よろしくお願いします。	**遠藤皓樹臨時職員** **（実践機構）** 	今年度から臨時職員として働かせていただきます、遠藤皓樹です。人間として、アスレティックトレーナーとして成長できるよう、頑張りたいと思います。よろしくお願いします。
一瀬瑞樹臨時職員 **（実践機構）** 	本年度から機構でお世話になる一瀬です。学生生活で学んだことを活かして、少しでも活躍できればと思います。よろしくお願いします。	**石川美香臨時職員** **（実践機構）** 	今年度よりスポーツ健康科学研究実践機構でお世話になります、石川美香です。1つでも多くのことを学び成長していきたいと思います。ご指導よろしくお願いいたします。
浅野勝成臨時職員 **（ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ）** 	昨年の11月からトレーニングセンターで勤務しています。米国での経験を生かし、仙台大学に貢献できるよう精進していきますので、ご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。 ＜平成26年11月1日付採用＞		

大河原小学校で仙台大学連携校指定式を開催

仙台大学連携校の看板を掲げる丸山校長（左）と阿部学長＝大河原小学校

3月30日（月）、大河原町立大河原小学校で「仙台大学連携校指定式」が執り行われました。同指定式には、本学からは阿部芳吉学長・青沼一民教授（教職支援センター長）・久能和夫教授が、大河原町からは大河原町教育委員会の齋一志教育長・大河原小学校の丸山千佳子校長らが出席されました。阿部学長から丸山校長へ「仙台大学連携校」の指定証が交付され、大河原小学校の正面玄関入口に看板が掲示されました。

本学と大河原小学校との連携により、本学から講師を同小に派遣し、同小教職員の教科等の指導力向上や児童へのきめ細やかな指導を行うと共に、教師を目指す本学の学生を支援員として派遣し、実践経験の場とすること。また、本学と同小が専門的研究を同小で実践することにより、児童の体力と学力向上を図ることが狙いです。

阿部学長は「大河原小学校との絆を深めていきたい。知・徳・体の三拍子揃った子どもたちを育成するために、大きな成果を生み出したい。本学と大河原小学校が一体となり、学習面・運動面で懸命に努力することが、子どもたちの徳育につながると考えている。本学の学生も大河原小学校の先生方にご指導して頂きながら、成長してほしいと願っている」と話し、齋教育長は「仙台大学の知的財産を積極的に活用させて頂きたい。仙台大学と大河原小学校が垣根を無くし、教育研究活動に取り組むことが、子どもたちの学力・体育・徳育を総合的に育てることになると期待している。仙台大学の支援を受けながら、成果を得られるようにしていきたい」と述べられました。

なお、本学における「連携校の指定」は、大河原小学校が初めての取組みになります。

仙台大学方式「元気体操の楽しみ方」を実演

気軽に楽しくできる「足踏み」を実演する齋藤（左）・柳澤の両助手＝仙台国際センター

4月5日（日）、仙台国際センター（仙台市青葉区）で「第7回元気！健康！フェアinとうほく」（主催：東北大学・河北新報社・東北放送／共催：仙台大学他）が開催されました。同フェアは、東北大学を中心とした講師陣が、最新・最先端の健康情報について幅広い視点でわかりやすく紹介する講演やセミナー・その他の体操プログラムもある健康フェアです。

本学からは、柳澤麻里子・齋藤まり・松浦里紗の各助手が「元気体操の楽しみ方」について、家庭でも気軽に楽しくできる「足踏み運動」・「つま先立ち運動」の実演を交えながら紹介しました。この運動は、安定した歩行・転ばない歩き方を維持できるようにすることがねらいです。仙台大学方式の「元気体操の楽しみ方」（会場：同センター第三会場「桜」）には、約30名の皆さまがご参加くださいました。

本学スポーツ健康科学研究実践機構の柳澤助手は「デモンストレーションを交えながら丁寧に解説し、運動を行ないました。その運動の意味が解ると、参加者の皆さまはとても納得されている様子でした。熱心に聞き入り、細かくメモを取られている方もいらっしゃいました。短い時間ではありましたが、楽しんでいただけた様子が伺え安心しました」と話しました。

なお、4月4日（土）は、同フェアで本学体育学部健康福祉学科の笠原岳人准教授が「筋肉に引退なし！百歳まで歩くための筋肉づくり運動」について講演を行ないました。

現役学生初「日本体育協会公認アスレティックトレーナー」検定試験に合格

ATの合格証を手にする遠藤さん
＝仙台大学ATルーム

4月8日（水）、本学アスレティックトレーナー部に所属していた遠藤皓樹（えんどうこうき）さん（平成27年3月体育学科卒―山形・米沢中央高校出身）が、本学の**現役学生で初**の「日本体育協会公認アスレティックトレーナー」検定試験に合格しました。

「日本体育協会公認アスレティックトレーナー」（以下、ＡＴ）検定試験は、合格率25％の超難関資格で、過去に本学を卒業後、同資格を取得した方々はいても現役学生の合格は初めての快挙です。見事、現役合格を果たした遠藤さんに、ＡＴを目指したきっかけや今後の抱負などについてお話を伺いました。

ＡＴを目指すきっかけは―

高校時代からケガや痛みに悩むスポーツ選手をサポートしたいと思っていました。体の構造や仕組みを知り、ケガをさせない指導方法を学びたいと思い、仙台大学体育学部体育学科スポーツトレーナー・コースを志望しました。高校生の時は、トレーナーと言えばマッサージとテーピングの仕事しか思い浮かびませんでした。今は、スポーツ選手の傷害から競技復帰までのアスレティックリハビリテーションや傷害予防のトレーニングなど幅広い分野に携われることに魅力を感じています。

合格までの道のりは―

ＡＴの勉強は、大学１年生の時から始めていましたが、本格的に始めたのは大学３年生の春頃からです。勉強方法は、ＡＴ教本の反復暗記を繰り返し行ない、過去問も何回も繰り返し解きました。大学の図書館を利用し、一日平均約５時間勉強に励みました。12月中旬に「理論試験」の合格が発表され、実技試験までの約2ヵ月間は、可能な限り毎日行ないました。

実技試験は、本学アスレティックトレーナー部での現場経験があったので、落ち着いて対応することができました。また、大学２年と３年時に、仙台大学が提携しているハワイ大学（米国・ハワイ州）でのＡＴ研修に参加し、アスレティックトレーナーがいかに選手達から信頼され、ケガの予防やリハビリテーション・精神的な支えなどの広い分野で不可欠な存在であるかということに深い感銘を受けました。

今後の抱負は―

ＡＴ資格を取得しましたが、まだまだ学ぶことはたくさんあります。常に向上心を持って頑張っていきたいです。CSCS（認定ストレングス＆コンディショニングスペシャリスト）や鍼灸師・柔道整復師の資格取得も視野に入れています。選手の期待と信頼に応え得る知識と技術を身に付け、さらには、人間性と感性を磨き、選手と共に成長していきたいと思っています。プロ・アマ問わず、スポーツ現場での就職先を見つけたいと思います。

仙台大学ＡＴルームトレーナーの村上教授、小田講師、山口講師、高橋陽介講師、白幡助教、鈴木のぞみ助手、大垣助手をはじめ関係各位の皆様には、人としてもトレーナーとしても成長させて頂きました。これからも感謝の気持ちを忘れず、活動していきたいと思います。

日本体育協会公認アスレティックトレーナーとは？

競技者の健康管理、傷害予防、スポーツ外傷・障害の救急処置、アスレティックリハビリテーション及びトレーニング、コンディショニングの知識を身につけた、日本体育協会が公認するトレーナーの資格。

資格試験は、「理論試験」・「実技試験」があり、理論に合格すると実技試験が受験できます。理論試験はマークシートで200問。実技は選手に対するケガの評価やテーピング、アスレティックリハビリテーションを実際に試験官の前で指導するという内容です。

難関を突破し、阿部学長から祝福される遠藤さん＝学長室

フィンランド・台湾からの留学生が「茶道」を通して日本文化を学ぶ

茶筅を使ってお茶を点てる留学生たち＝碧水園（宮城県白石市）

4月22日（水）、古典芸能伝承の館「碧水園」（宮城県白石市）で、フィンランド（2名）・台湾（5名）からの留学生7名が、日本の季節感・感性を理解することやおもてなしの心を学ぶため、日本の代表的な伝統文化である「茶道」を体験しました。留学生全員が初めての茶道体験となりました。

講師は、白石茶道会の矢ノ目浩考会長。留学生たちは、茶道が持つ魅力や奥深さ、床の間の茶花・掛け軸の書道、お茶を点てる際の作法や所作などの説明を受けながら、矢ノ目会長の点てた和菓子とお茶を実際にいただきました。

留学生たちも、茶筅を使って自分で点てたお茶をいただきました。

フィンランド・カヤーニ応用科学大学短期留学生のカミラ・ピュオラクロントさん（写真：右から2人目）は「フィンランドにもグリーンティーはありますが、日本の抹茶のようにほのかな苦みと濃厚な味わいはありません。健康的な感じで美味しかったです」。台湾・台東大学留学生の林旻昊（りんみんはう）さん（写真：左から2人目）は「今まで味わったことのない抹茶と和菓子の味が新鮮でした。床の間の畳の香りに癒され、心が落ち着きました」と感想を述べました。

JICAシニアボランティアを終え、スリランカから帰国―横川元仙台大学教授

写真提供：横川元教授

4月23日（木）、任国スリランカでJICA（国際協力機構）のシニアボランティアとして活動され、9ヵ月間（2014年7月3日～2015年4月2日まで）の任務を終えられた横川和幸元仙台大学教授が、帰国の挨拶のため朴澤泰治理事長・学事顧問を訪れました。

横川元教授に、苦労したことや今後の抱負などについてお話を伺いました。

Q1.活動内容や応募したきっかけは―

スリランカでの活動内容は、学校教育における体育・スポーツを推進し、子ども達の運動不足を解消する運動プログラムの提供、将来の陸上選手を育成するための選抜テストの実施、専門的な基礎技術やトレーニング方法の指導を行なってきました。応募したきっかけは、自分を育ててくれた陸上競技を「他国でも教えたい」という熱い思いからです。

横川和幸元仙台大学教授

Q2.苦労したことは―

食事で苦労し、味付けが口に合わず、毎日パンばかり食べていました。コミュニケーション言語は、基本的に英語でした。現地は、電気・ガス・ガラス戸もなく、いかに私たち日本人が恵まれた環境にいたかを痛感させられました。

Q3.今後の抱負は―

現地の子ども達とたくさん触れ合うことができ、本当に充実した9ヵ月間でした。チャンスがあれば、再びシニアボランティアに挑戦したいと思っています。また、スリランカの教育事情などを仙台大学や明成高校でお話させて頂きたいと思っています。

J1ベガルタ仙台・OB奥埜博亮選手とOB蜂須賀孝治選手との思い出―トレーナー冥利に尽きる瞬間

左からOB奥埜選手・白幡助教・OB蜂須賀選手
＝泉サッカー場（仙台市泉区）

先日、仙台大学男子サッカー部がベガルタ仙台と練習試合を行いました。その試合に帯同した際、本学OBであり現ベガルタ仙台選手の奥埜博亮（おくのひろあき）選手と蜂須賀孝治（はちすかこうじ）選手に再会しました。私は昨年度まで第四体育館にあるアスレティックトレーニングルーム（ATルーム）で管理運営を担当しており、彼らも在学中に怪我を治すために利用していました。在学中のあどけなさは無くなり、会うたびにプロサッカー選手らしい風貌になっていきます。

奥埜選手が初めてATルームに来室した時、すでにベガルタ仙台の特別指定選手として練習参加していた事もありプロの「オーラ」があり、私も緊張した事を覚えています。しかし、いざ怪我の評価をしてみると、少しシャイな普通の大学生で、常にプレイでチームを引っ張っていく姿が印象的でした。

蜂須賀選手は、彼が四年生で出場したインカレの数日前に全治２か月の怪我を負ってしまい、大学最後の大会で何とか数分でも出場したいという本人の意思を汲み必死にケアを行ったというエピソードがあります。全力で戦える状況ではない中、彼は途中出場をしたのですが、ピッチに出る直前にベンチにいた私に「白幡さん、ありがとうございます！」と言って勢い良くピッチに駆け出していきました。出場前にはっきりと感謝の気持ちを言葉で言ってくれたのは蜂須賀選手が初めてで彼の素直さとサッカーに対する強い気持ちが感じられました。アスレティックトレーナーとして働き今年で１０年目となりますが、その経験の中でも一、二を争うほど嬉しい出来事でした。

ATルームで関わらせてもらった様々な競技の選手が活躍する姿を見ると本当に感慨深い気持ちになります。現在ベガルタ仙台で大活躍している両選手以外にも、サッカー、柔道、体操競技、バスケットボール、野球、バレーボールなど様々な競技で活躍している卒業生がいます。そのような選手たちをサポートできる職業のアスレティックトレーナーとなり本当に良かったと日々思います。4月から私も助教になりましたが、今後も彼らのような選手たちの活躍のニュースを期待すると同時に本学の選手たちのサポートを継続し、アスレティックトレーナーを目指す学生を指導していければと思っております。最後に、このような経験ができたのも男子サッカー部吉井監督・瀬川コーチ・スタッフ陣をはじめ、AT関連教職員の方々、そして何より努力する選手あっての事だと思います。この場を借りて、御礼申し上げたいと思います。

＜寄　稿：助教　白幡恭子＞

＊＊＊＊＊両選手から怪我で悩んでいる選手へ向けてメッセージ＊＊＊＊＊

奥埜博亮選手から～

「怪我したときだからこそできる事や、気付く事があると思います。いろいろと考える時間もできるので、できるだけポジティブに考える事が大事なんじゃないかなと思います。」

蜂須賀孝治選手から～

「地道こそ近道。昨日より今日、今日より明日って少しでもほんの少しでも良くなっていけば、それは最高な事で、全てがそう上手く進むわけじゃない。毎日、症状が変わらなかったり、今日より昨日、昨日より一昨日って戻る時の方が多い。でも決して焦らず、今やらなきゃいけないことを真面目にコツコツとこなしていけば、いつか大きく復帰に近づく日が来る。それが今日なのか明日なのか、それとも一か月後なのかは、全て自分次第。」

一人暮らし高齢者の交流会

写真も四釜職員

3月25日（水）、村田中央公民館にて「一人暮らし高齢者の交流会」（主催：村田町社会福祉協議会）が開催されました。高崎義輝教授が「笑う門には福来る」をテーマに健康講話やアイスブレイキングを行い、その後「手や腕の動きだけではなく表情を使うことも重要」と話され手話を活用し、手話ソング「ふるさと」を参加者全員で行いました。学生の参加もあった為「若い者からパワーをもらった」「こんなに笑ったのは久しぶり」と多くの参加者からの喜びの声も聞かれましたが、ボランティアに行ったスタッフも参加者の笑顔や優しさに出会い、幸せな気持ちになる会であったと１日を振り返りました。

また参加者の中に、私が高校時代にそば作りを教えていただいた渡邊千治さんがおり「我が母校の高校生だった四釜さんに声をかけられた時はうれしかった」とのお言葉をいただいた他、後日「“そば”は食べるものだけではなく人と人を“そば”に引き寄せる」との想いをつづったお手紙と写真を送ってくださいました。私自身、渡邊さんにお会いするのは７年ぶりではあったものの、その変わらぬ笑顔や温かみあふれる手紙に胸が熱くなりました。

配偶者の死をきっかけに、高齢者の自殺の多発や認知症患者も急増している現代社会。今後一人でも多くの高齢者が孤独を感じることなく、自ら新たな楽しみを見出し、主体的に笑顔で幸せな生活を送ることはもちろん、積極的な社会活動への参加が可能な社会づくりのお手伝いをしたいと改めて感じさせられる会となりました。

＜報　告：学生支援室臨時職員　四釜千尋＞

ウエイトリフティング部、未経験からの挑戦―渡部詩乃選手（体育学科１年）

渡部選手の試技＝羽黒体育館

4月8日（土）、羽黒体育館（山形県鶴岡市）で開催された「第1回ウェイトリフティングフェスティバル in SHONAI」で、ウェイトリフティング未経験の渡部詩乃（わたなべしの）選手（体育学科1年ー山形･鶴岡北高校出身）が、スナッチ35キロ・ジャーク50キロ・トータル85kgで女子53kg級の2位となりました。

渡部選手に、ウェイトリフティングを始めたきっかけや今後の抱負などについてお話を聞きました。

渡部詩乃選手

Q1.ウェイトリフティングを始めたきっかけは―

高校時代は、陸上の円盤投げの選手として、東北大会に出場しました。高校の恩師から脚力と瞬発力がウェイト向きと勧められ、大学から新しいことに挑戦することにしました。

Q2.課題は―

試合会場には独特の緊張感があり、今大会では場の雰囲気に呑まれてしまい、本来の自分の持っている力を発揮することができませんでした。自分の持ち味である脚力と瞬発力を意識しながら、練習に取り組んでいきたいと思います。

Q3.今後の抱負は―

記録的には、スナッチ60kg・ジャーク80kg・トータル140kgを目標に頑張っていきたいと思います。初心者を言い訳にしたくありません。やるからには常に上を目指して頑張ります。

硬式野球部、馬場皐輔投手（体育学科2年）が自己最速152kmを計測

4月25日（土）、東北福祉大学野球場で仙台六大学野球春季リーグ第三節1回戦「仙台大学―東北工業大学」が行なわれました。

先発・馬場皐輔（ばばこうすけ）投手【写真】（体育学科2年―仙台育英学園高校出身）が自己最速152kmを計測。6回を投げて東北工業大学打線を4安打7奪三振無失点に抑え、今季初勝利を挙げました。

試合は、仙台大学がリーグ３度目、２位に並ぶ１イニング１５点をマーク。７回に２本塁打を含む１１安打の猛攻で１７－０の７回コールド勝ちを収めました。

引き続き、馬場投手並びに本学硬式野球部への温かい声援をよろしくお願い致します。

仙台大学名誉教授の阿部武彦先生がご逝去されました

平成27年4月9日午後10時6分、仙台大学名誉教授の阿部武彦先生が大腸がんのため71歳の生涯を閉じられました。先生は東北大学文学部国文科をご卒業になり、同大学院博士課程満期退学後、東北大学文学部助手、山形女子短期大学助教授を経て、昭和57年に仙台大学に赴任されました。昭和60年には教授となられ、平成23年に定年退職なさるまで、29年間の長きに亘って本学で教育・研究に尽力されました。この間、図書館長、各種委員会委員長などの要職を務められました。また、ソフトテニス部や応援団・チアリーディング部の部長を務められ、学友会活動の発展に寄与され、優しく温かみのあるお人柄で学生たちからも慕われました。阿部武彦先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol.109／ 2015 May
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

硬式野球部、春連覇達成―全員野球で掴んだ栄光

春連覇の瞬間＝東北福祉大学野球場

5月18日（月）、東北福祉大学野球場で行なわれた仙台六大学野球春季リーグ第六節は、仙台大学の1勝で迎えた「仙台大学－東北学院大学」の2回戦。本学が東北学院大学を９―４で下し、春連覇（2季ぶり4度目の優勝）を達成しました。本学は80年秋以来、69季ぶり２度目となるすべての大学から勝ち点を挙げ、完全優勝を果たしました。通算成績は、１０勝２敗。本学硬式野球部は、6月8日（月）から14日（月）までの7日間行なわれる「全日本大学野球選手権大会」に２年連続２度目の出場を決めました。

今季リーグでは、エース熊原健人（くまばらけんと）投手（U21野球日本代表／体育学科4年－宮城･柴田高校出身）が東北福祉大学に２試合連続完封勝利するなど、４勝０敗の活躍を見せました。また、影浦雅人（かげうらまさと）投手（体育学科4年－北海道・旭川実業高校出身）が東北学院大学に２勝をマークし、優勝投手に輝きました。攻撃陣は、３番・松本桃太郎（まつももたろう）三塁手（体育学科3年－北海道・北海高校出身）、４番・大坂智哉（おおさかともや）一塁手（体育学科3年－青森山田高校出身）が勝負所での一打で流れを引き寄せる打撃を見せました。走攻守 にまとまりがあり、投打の軸がしっかりしており、応援スタンドも一体感ある応援で選手を後押ししました。

＜ 目 次 ＞

硬式野球部、春連覇達成―全員野球で掴んだ栄光	1
柔道における仙台大学と船岡中学校との連携事業がスタート	2
仙台大学LC（ラーニングコモンズ）棟起工式を開催	4
近隣の方より本学漕艇部の学生たちへお褒めの言葉を頂戴しました	4
“東京オリンピック･パラリンピック”…都心から見える三つの光景	5
学生の競技結果等	8

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見･ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

まさに全員野球で掴んだ栄光。本学硬式野球部は、「第６４回全日本大学野球選手権大会」の初戦で、九州産業大学（福岡六大学野球連盟）と対戦＜6月8日（月）・東京ドーム・ 第１試合9時～＞します。

引き続き、仙台大学硬式野球部への熱い応援をよろしくお願い致します。

＜阿部芳吉学長のコメント＞

走攻守揃ったチームで優勝できました。夢を追い続ければ目標になる。目標は努力すれば達成できる。次の夢は全国制覇。目標は初戦突破。

応援席に向かって喜びを爆発させる仙台大ナイン

２季ぶり４度目の優勝を喜ぶ仙台大ナイン＝東北福祉大学野球場【閉会式：５月２４日（日）】

柔道における仙台大学と船岡中学校との連携事業がスタート

開校式で挨拶を行なう阿部学長＝船岡中学校武道場

5月7日（木）、船岡中学校武道場で「柔道における仙台大学と船岡中学校との連携事業」の開講式が開催されました。開校式には、本学からは阿部芳吉学長・男子柔道部の南條充寿監督（全日本女子柔道監督）・女子柔道部の南條和恵監督・井上雅勝教授・郡山孝幸教授・高橋亮准教授が、船岡中学校からは青田穣校長・柔道部の船迫美和子監督らが出席されました。

柔道における本学と船岡中学校との連携により、中学生には、競技力向上を目指すと共に日本で生まれた「柔道」という文化の特性（人間力の向上）を十分理解させ、その普及に努めること。また、大学生には、コーチング現場の実際を通じて、コーチングのスキル向上を目指します。

開講式で阿部学長は「全日本女子柔道監督である南條先生の指導を受け、競技力を高めながら精神面も鍛えてほしい」と挨拶。青田校長は「恵まれた環境で稽古ができるという感謝の気持ちを忘れず、精一杯努力して頑張ってほしい」と述べました。

開校式終了後、船岡中学校柔道部の船迫監督は「全日本女子柔道監督の南條先生に指導して頂けるのは光栄なことであり、大変嬉しく思います。仙台大学との連携事業を通して、魅力と活気ある部活動を発信していきたいと思います」と話されました。

なお、船岡中学校柔道部員18名（男子17名・女子1名）に対して、今後、週2日、船岡中学校での稽古時に本学柔道部員が出向き、その稽古に参加してコーチングを行ないます。さらに週2日は、船岡中学校柔道部員が本学柔道場で女子柔道部員との稽古に参加することになります。

仙台89ERS 2014-2015シーズン　スポンサー感謝の集い

ＯＢ佐藤文哉選手（右）と櫻井理事＝勝山館

5月11日、勝山館にて開催された「仙台89ERS 2014-2015シーズン　スポンサー感謝の集い」に櫻井理事と法人事務局の品田さんと共に出席させていただきました。当日は、株式会社ボディプラスインターナショナル・株式会社河北新報社・株式会社カメイ・七十七銀行などをはじめとした50社以上のオフィシャルスポンサー企業の方々約60名が地元のプロチームのシーズン終了を労うため集まりました。仙台大学明仙バスケラボは、仙台89ERSがアウェー戦に出発する当日のシューティング会場となっていて、レギュラーシーズン中は戦地へ行くチームを見送っていました。

感謝の集いは球団代表中村彰久さんのあいさつで始まり、今年度の反省（東地区1位になれなかったこと、平均観客数が目標に届かなかったこと）、新リーグ（2016-2017シーズンよりJPBL）への参加表明の報告とその課題、スポンサー企業に御礼の言葉がありました。

懇談の時間には、OB佐藤文哉選手（平成25年体育学科卒ー宮城・明成高校出身）が櫻井理事にシーズン終了の報告とお礼の言葉を伝え、「最後は負けて悔しい」と言うと「来年はもっと頑張れ」と櫻井理事が激励なさいました。また、中村社長が櫻井理事にご挨拶にいらした際、櫻井理事は「できるサポートは全部しますよ」と心強いお言葉を差し上げ、また、櫻井理事は株式会社ボディプラスインターナショナル、株式会社タイヤワールド館ベスト、株式会社トスネットなど数社とも交流を持たれていました。

今シーズンの89ERSは東地区3位という素晴らしい成績と過去最高勝率を記録しました。また、プレーオフをホーム開催するという目標も達成しました。明仙バスケラボとしても決勝戦の地である有明コロシアムへ向かうチームの見送りを夢見ていましたし、誰もがまだポストシーズンが続くと信じていましたが、悔しい敗戦でシーズン終了が早まってしまいました。負けをすぐには受け止められないほどの悔しさでコートから出ることができなかった選手、涙が止まらず試合後のインタビューができなかった選手など心打たれる場面を思い出しながら、この会を通して選手やチームスタッフと交流し、チームの悔しい思いや無念さを直接感じることができました。仙台89ERSを離れて2シーズン、今なおチームとこのような交流を持たせていただける環境と、このような会に出席させて頂く機会をくださいました朴澤理事長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

＜報　告：アスレティックトレーニングルーム
川平分室　GM　白坂　広子＞

桜丘中学・高等学校防災講演会

子ども達の笑顔に励まされたモザイクアート

平成２７年４月３０日（木）　、『生かされて生きる』～東日本大震災と特活教育の力～」という演題で実施した。昨年の５月には、修学旅行隊の２年生を対象に、石巻専修大学の森口記念講堂で実施した。

今回は、前年度の流れを受けて、東京北区にある私立中学・高等学校に招聘されて修学旅行の事前研修として行ったものである。防災教育を切り口にした「学び合い」のあり方についてもふれ、学習環境が低下した被災地の子ども達の学力向上には、「教え合い・励まし合い・学び合い」がどれだけ大切だったかについても話した。石巻西高校の場合は、国公立大学進学者が昨年度１名にまで減少したが、今年度は７名まで増やすことができたのも、「学び合い」と最後まであきらめ合い指導が実を結んだ結果であると報告しながら、目的と手段が逆転しない進路指導のあり方についての提言を行った。

＜報　告：教授　斎藤幸男＞

仙台大学LC（ラーニングコモンズ）棟起工式を開催

LC棟完成イメージ＝鹿島建設（株）提供

5月19日（火）、小雨の降る中、本学附属図書館東側のテニスコート跡地で、仙台大学ＬＣ（ラーニングコモンズ）棟の起工式が執り行なわれました。

同式には、本学からは朴澤泰治理事長・阿部芳吉学長ら17名が、来賓として柴田町の水戸敏見副町長・柴田町教育委員会の船迫邦則教育長、大河原町教育委員会の齋一志教育長、施工者である鹿島建設株式会社東北支店の太田貴博副支店長らが参列され、完成に向けての安全祈願を行いました。

安全祈願終了後、朴澤理事長がＬＣ棟建設の趣旨を話され、学生同士が知的に成長するための「共有空間」を整備し、将来に向けた人材育成に役立てる建物であることを説明されました。

仙台大学ＬＣ（ラーニングコモンズ）棟は、平成28年1月31日完成を目指して整備を進めていきます。

ＬＣ棟は、概要として以下のようになります。用途：教育施設。構造階数：鉄骨造地上2階建。建築面積927.01㎡。延床面積：1,688.40㎡。最高高：9.30 m。軒高さ：8.78 m。工期：平成27年6月1日 着工予定、平成28年1月31日 完成予定。

＜報　告：管理課長　遠藤近志＞

近隣の方より本学漕艇部の学生たちへお褒めの言葉を頂戴しました

ありがとうございます

～　近隣の方より本学漕艇部の学生たちへお褒めの言葉を頂戴しました　～

仙台大学　学長　阿部　芳吉

過日、亘理町在住の方から、心温まるお礼状と本学漕艇部の学生たちへのお褒めの言葉及びご芳志を頂戴しました。

お手紙によりますと、その方はご夫婦でカヤックが趣味だそうで、毎年、桜満開時には白石川の川下りを実施しているそうです。ある早朝、エアータブルカヤックを車に積み、本学漕艇部付近まで来たところ、前日の雨のせいか地面がぬかるみ車が動かず、立ち往生してしまったとのことでした。困り果てたその方が助けを頼みに行こうと下った河原で漕艇部の７名に逢い、事情を話したところ、すぐに全員揃って車を押してくれ、無事脱出できたそうです。感激して学生達にお礼を言うと「カヌーが好きな同好の士ですから」と、自分にとって子供や孫の年代の若者から同好の士と言われたことが大変嬉しかったそうです。

これも仙台大学の学長をはじめ関係者のご指導の賜物でしょうと結ばれたお手紙とご芳志は、漕艇部員に手渡し致しました。

亘理町在住のカヤッカーさま、このたびは誠にありがとうございました。

仙台大学は今後とも地域に根差した健全な学生の育成に尽力して参りますのでどうぞよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

阿部学長（前列左端）と本学漕艇部の阿部監督（後列右端）及び漕艇部員ら＝学長室

“東京オリンピック・パラリンピック”…都心から見える三つの光景

「未来（あした）をつかもう」の合言葉で開催される2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けての準備にも、いよいよ本格的なエンジンがかかり始めてきている。

この大会は、ロンドン大会同様に東京という成熟都市で開催することから、既に整備されているインフラや安定した社会から生まれるあらゆる恩恵を示すこと、具体的には、晴海ふ頭の選手村を中心とした半径8km圏内に85%の競技会場を設けたコンパクトな会場配置で質の高い綿密な計画と安全な大会の開催を実現することを大きな特徴としている。

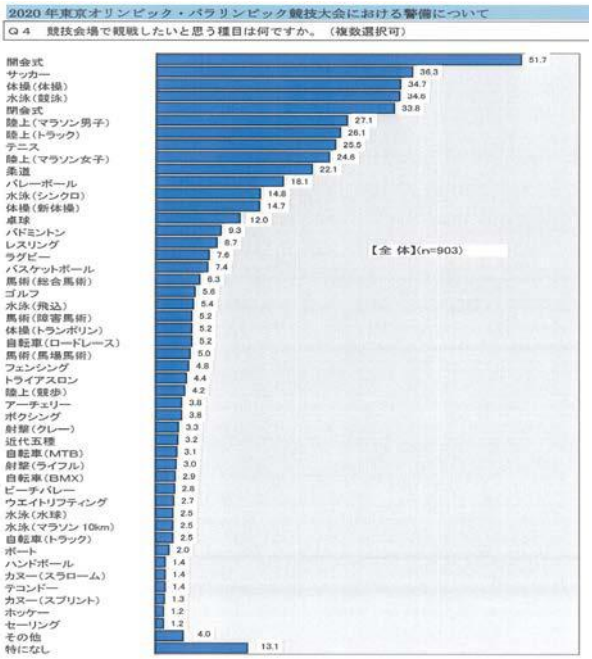
また、被災地支援も柱の一つだ。被災地住民が参加しての三陸沿岸の聖火リレー、宮城スタジアムのサッカー予選会場としての使用、被災地の中高校の式典イベントへの参加などが織り込まれようとしている。

今後、開催時期が近づくにつれ国民の関心も高まり開催気分の盛り上がりが見られること・・・必定である。

そんな中、警視庁が今年1月に“東京オリンピック・パラリンピックにおける警備”に焦点を当て、興味深いアンケート調査を実施した。体育・スポーツ健康科学を教育・研究する本学としても、東京都民がこの大会の開催をどう見ているかは、大いに参考にすべき点があると思うので、簡単に紹介しよう。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催については79.3%の人が待ち望むと回答し、この大会に期待することとしては、6割前後が、自宅での観戦、日本人選手の活躍、競技会場での観戦、経済活動の活性化をあげ、5割の人が日本文化の外国への情報発信をあげている。日本のスポーツ能力の底上げについては、36%の人が期待するに留まっている。

更に、競技会場で観戦したい種目を挙げてもらったところ、開会式が断然トップで、これについで、サッカー、体操、水泳、閉会式が3割台と上位を占めている。いずれにせよ、その他の種目を含めたアンケート結果は別図のとおりであり、体育・スポーツ関係者として興味深い結果が示されている。



先日、総理官邸にドローンが不時着した事件があった。この事件は、東京の都心もその治安の維持には、新しい手段での脅威を含め、警戒が求められる段階に入ったことを示すものだ。アンケートで、競技大会の開催で不安を感じることについて質問したところ、第一位に、テロの発生と答えた人が、実に78.8%の人に上った。ついで、来日外国人によるトラブル（66.4%）、交通渋滞・公共機関の混雑（65.1%）、犯罪の増加（51.7%）、サイバー攻撃（35.5%）となっている。オリンピックの開催に大きく期待する一方で、予期せぬ不測の事態へも不安を抱いている現実がそこには投影されている。

これに関連し、頼もしい結果が得られている。それは、大会期間中の警備の措置としての車両検問、交通規制、職務質問等に対して95.3%の人が行うこと止む無しとしていることである。そして、「日本で絶対にテロ等を起こしてはならない」と85.7%の人が答え、67.3%の人が「『世界一安全な都市、東京』の実現のためには行うべきである」としていることである。

今回の大会期間中の警備は大きな課題だ。今回のアンケート結果を見れば、国民は、オリンピック・パラリンピック競技と並び、大会期間中の安全の確保自体を日本が示しうるかというもう一つのオリンピックを見ようとしているともいえる。現に、警備当局とオリンピック組織委員会が連携し、警備専門の対応措置を準備する体制が整備された。総数約5万人の警備体制、うち警察官2万1千名、警備員1万4千名、残りはボランティアで手当てするという構想も出されている。それに併せ期待されているのは警備のためのハイテク機器の活用だ。警視庁はオリンピックの警備をも視野に入れ、小型無人ヘリコプター・ドローン100台の配備を決め、対応を準備しつつある。警備業界も、本当に人手が確保するかという基本命題に加え、ドローンの活用や会場に入る人々を把握するための顔認証システムの活用、ベテラン警備員の動員による観客の荷物等のX線検査体制整備など機械を活用した対応の導入を検討し始めている。言い換えれば、もう一つのオリンピックが静かに始まっている。

いずれにせよ、体育・スポーツ健康科学にとっての祭典、オリンピック・パラリンピックは、（1）現役・OB/OGを含め、本学からアスリートとしての参加が実現し得るのかということへの関心に加え、（2）東日本大震災の復興を進める被災地の方々の参画をいかに自然体でともに歩みつつ進めていくか、（3）それにもう一つのオリンピックとも言うべき世界で一番安全なオリンピック・パラリンピックの開催が実現し得るのか？…これらの三つの光景に複眼思考で対処し考えていくこと…これが、教育研究機関として本学の学生・教職員に求められているのかもしれない。

＜寄　稿：教授兼東京事務所長　遠藤保雄＞

青梅慶友病院・大塚太郎理事長らが来校

5月14日（木）、青梅慶友病院（東京都青梅市）の大塚太郎理事長【写真前列中央】とOB福田卓民部長（昭和63年体育学科卒）【写真前列左端】が、朴澤泰治理事長・阿部芳吉学長にご挨拶に来られました。

青梅慶友病院は、本学の卒業生を多く採用して頂き、現在も多くのOB・OGが在職している病院です。

ユニバ女子サッカー日本代表選出の学生、コーチに激励金を授与

左から黒澤監督・須永選手・加賀選手・鈴木会長＝仙台大学

5月11日（月）、今年7月に韓国・光州で開催される「第28回ユニバーシアード競技大会」に出場するユニバーシアード日本女子サッカー代表メンバー20人が発表され、本学女子サッカー部からは加賀孝子（かがこうこ）選手（スポーツ情報マスメディア学科4年－ジェフユナイテッド市原・千葉レディース出身－宮城・聖和学園高校出身）と須永愛海（すながまなみ）選手（体育学科3年－JFAアカデミー福島出身）の2名が選出されました。ユニバ日本代表の２名同時選出は、東北地区大学サッカー界（男子含む）初の快挙。本学女子サッカー部の黒澤尚監督（平成12年体育学科卒）も、コーチとしてユニバ代表チームに帯同することが決定しました。

15日（金）、仙台大学同窓会の鈴木省三会長（仙台大学副学長／昭和60年体育学科卒）より、加賀選手・須永選手・黒澤監督の3名に激励金が手渡され、「代表チームの一人として活躍され、仙台大学の名を高めてきてほしい」と力強いエールが送られました。

＜報　告：仙台大学同窓会広報部　渡辺誠司＞

吉田京看護師、着任挨拶（5月１日付）

5月から健康管理センターで勤務させていただくことになった吉田京です。
先月まで総合病院で病棟勤務をしていました。
病院とは全く違う環境となり少し不安な気持ちもありましたが、スポーツに励む声が響き渡る、校内のはつらつとした雰囲気、学生の皆さんの若さあふれる活発な姿をみて、毎日元気をもらっています。
慣れない業務に右往左往し迷惑ばかりかけてしまいますが、一日でも早く仕事を覚えて、学生さんや教職員の皆さんの、健康管理をサポートできるよう努力していこうと思っています。また、スポーツ全般の知識も浅いので、皆さんとのかかわりの中で知識をつけていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会第1回理事会･総会などが開催される

全国体育スポーツ系大学協議会は、体育学及び関係分野を専門とする大学、短期大学及び学部・学科・コース等の教育、研究、経営等に関する調査研究を行い、我が国の体育・スポーツ等の充実発展に寄与することを目的として、昭和56年9月に設立されました。

現在は３２の大学・短大が加盟しておりますが、本学は、設立当初からの加盟校です。（会長および事務局：日本体育大学）

これまでは、任意団体として、体育・スポーツ等に関する研究、調査、情報収集等の事業を行ってきましたが、これらの活動をさらに充実発展させるとともに、他の機関や諸団体との連携を強化し組織の拡大を図るため、一般社団法人に移行することになりました。

5月28日に名古屋東急ホテルにおいて、一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会の第1回理事会と第1回総会が開催され、松浪健四郎会長の挨拶の後、一般社団法人の登記が4月30日付で完了したことが報告されたほか、今年度の事業計画と予算、今後の協議会の拡大策などが承認されて、一般社団法人として新たにスタートしました。

なお、翌日の５月２９日には同会場において「全国体育系大学学長・学部長会」総会が開催され、加盟する全２７大学のうち２６大学から会員をはじめ、事務関係者など含む５６名もの参加がありました。（会長および事務局：順天堂大学）

９月１３日（日）１３：００～　順天堂大学本郷・お茶の水キャンパス有山登記念館・講堂において、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携し、「全国体育系大学学長・学部長会主催シンポジウム（案）」が開催される予定で、同会が同オリンピック・パラリンピックを一つの契機として、日本の体育・スポーツの発展にどのような寄与・貢献ができるか？　について、話し合われる予定です。オリンピック・パラリンピックという国家的行事の開催国として、体育系大学が果たす役割がますます重要となって参ります。

＜報　告：法人事務局 常務理事　藤田　努＞

硬式野球部、春連覇へ一歩前進／熊原健人投手（体育学科4年）が熱投

エース熊原投手が東北福祉大学打線を２試合連続完封
＝東北福祉大学野球場

5月11日（月）、仙台六大学野球春季リーグ第五節は、１勝１敗で迎えた「仙台大学－東北福祉大学」の３回戦が行なわれ、本学が東北福祉大学を１－０で下して勝ち点を「４」に伸ばし、春連覇へ一歩前進しました。

試合は、本学が６回裏一死一三塁、5番DH薄井新（うすいしん）主将（体育学科4年－栃木・矢板中央高校出身）の内野ゴロの間に白川拓海（しらかわたくみ）選手（体育学科2年－茨城・霞ヶ浦高校出身）が生還して先制。これが決勝点となりました。投げては、エース熊原健人（くまばらけんと）投手（U21野球日本代表／体育学科4年－宮城・柴田高校出身）が東北福祉大学打線を4安打8奪三振で完封。149キロを計測（MAX152キロ）。熊原投手は、東北福祉大学相手に２試合連続完封勝利と今季リーグ４試合連続３６イニング無失点（防御率0.00）の熱投を見せました。

＜平成27年度仙台六大学野球春季リーグ表彰選手＞
【最優秀選手賞】熊原 健人投手（同）
【ベストナイン】
投　手　影浦 雅人投手
（体育学科4年－北海道・旭川実業高校出身）初
三塁手　松本 桃太郎選手
（体育学科3年－北海道・北海高校出身）3回目
外野手　鳥井 凌選手
（体育学科1年－香川・尽誠学園高校出身）初

東北学生柔道優勝大会・悲願の「男女アベック優勝」
―男子は初V・女子は9連覇

男女アベック優勝を喜ぶ仙台大学柔道部員ら＝宮城県武道館

5月24日（日）、宮城県武道館（仙台市太白区）で「東北学生柔道優勝大会」が行なわれました。男子はトーナメント戦で争われ、昨年の覇者・東北学院大学を準決勝で３－１、決勝では秋田大学を４－３で下し、見事初優勝に輝きました。女子はリーグ戦で争われ、富士大学を４－０、東日本国際大学を４－１で下し、２勝。大会９連覇の快挙を達成しました。本学柔道部は、悲願の男女アベック優勝を果たしました。

大会優秀選手には、男子は長村航太（ながむらこうた）選手（現代武道学科1年－神奈川・桐蔭学園高校出身）と馬場亮河（ばばりょうが）選手（体育学科3年－北海道・北海高校出身）が、女子は市川香代子（いちかわかよこ）選手（現代武道学科2年－宮城・東北高校出身）が選ばれました。

大会終了後、女子柔道部の南條和恵監督は「男子の初優勝は、自分たちの力を出し切り、やり切った結果。男子の南條充寿監督（全日本女子柔道監督）が海外遠征中のため不在ながらも、最高の結果を残し、よく戦ってくれた」「女子の９連覇は感無量。大学や教職員、保護者、同窓生、周囲の皆さんのお陰です」と大会を振り返り、感謝の言葉を述べられました。

本学男女柔道部は、6月27日（土）・28日（日）に東京・日本武道館で開催される「全日本学生柔道優勝大会」に出場します。

引き続き、仙台大学男女柔道部への温かいご声援をよろしくお願い致します。

男子決勝・大将戦で馬場選手が一本勝ち。歓喜の渦に包まれた。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol.110／ 2015 June
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

東京おもちゃショーに本学から「ボブスレー・スケルトン」を出展―子どもも大人もワクワク体験

ボブスレー・スケルトンの試乗体験の様子＝東京国際展示場（東京ビッグサイト）

6月20日（土）・21日（日）、東京国際展示場（東京ビックサイト）で「東京おもちゃショー2015（INTERNATIONAL TOKYO TOY SHOW）」（主催：一般社団法人日本玩具協会）が開催されました。今年で54回目を迎える日本最大級の玩具の見本市である“東京おもちゃショー”。今回は、149社・35,000点のおもちゃが展示されました。来場者数は、初日(6/20)が70,350人・二日目(6/21)が70,939人、2日間合計141,289人と大盛況。その中で、子ども文化の発展に賛同する企業や団体を集めた「キッズライフゾーン」に、本学から「ボブスレー・スケルトン」を出展しました。

本学からの“東京おもちゃショー”への出展は、今年で連続4度目（1度目は「発電床」・2度目は「認知動作型トレーニングマシン」・3度目は「足こぎ車椅子」）。本学ブースには、2日間で約1,500人の子どもたち（本学ブースへの2日間の総来場者数約5,000人）が訪れ、「ボブスレー」と「スケルトン」の試乗を体験しました。2日間共、本学の千葉勝彦コンサルタント・西塚重良学生支援室長・溝上拓志新助手及びソチ五輪ボブスレー日本代表の黒岩俊喜さん（運動栄養学科4年ー神奈川・橘高校出身）が「ボブスレー・スケルトン」の試乗体験を実施。他にも、ボブスレーとスケルトンの写真や映像などを用いて競技の魅力を発信しました。

＜ 目 次 ＞

東京おもちゃショーに本学から「ボブスレー・スケルトン」を出展―子どもも大人もワクワク体験	1
仙台大学開放講座「パソコンでオリジナルカレンダーを作ろう」を開催	2
青葉区桜ヶ丘学区連合町内会において仙台大学方式健康運動指導を実施	2
AEDを使い学生たちが連係プレーで救命救急の初期対応	5
仙台大学柔道塾生から初の宮城県チャンピオン誕生	8
学生の競技結果等	11

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

子どもたちは、初めて実物を見るボブスレーとスケルトンに試乗し、「気持ちいい・怖い・また乗りたい」などと歓声を上げながら楽しそうに体験していました。大人もボブスレーに試乗し、「凄い・かっこいい」などと言いながら写真撮影を行なう様子などが見られました。同試乗体験は、子どもだけでなく大人もワクワクできる充実した内容となり、首都圏で仙台大学の知名度を上げるための絶好の機会になったようです。

【本学が東京おもちゃショーに出展するようになった経緯】

２０１１年の東日本大震災を期に(一社)日本玩具協会（以下「日玩協」という。）が震災からの復旧復興を目的に「東北こども博」を企画し、本学を会場として開催する機会を得ることができた。その翌年に日玩協から毎年開催している「東京おもちゃショー」への出展依頼がなされ、２０１２年より出展し、現在に至っている。

全国私立大学教職課程研究連絡協議会第35回定期総会･研究大会及び分科会を終えて

分科会の様子＝仙台大学

平成27年5月30日（土）・31日（日）の2日間、仙台市民会館及び仙台大学を会場に（全私教協）本学の教職員及び教職を目指す学生の全面的な協力を得て開催することができました。

全私教協は1980年に私立大学における教師教育の社会的責務とその重要性に鑑み、教師教育の充実発展に寄与すべく設立されました。今年で35年を迎え、全国８地区団体に加盟する正準会員校398校によって組織されています。

今年度は、東北地区が担当で当番幹事校として仙台大学が大会関係の運営計画等を実施することになり、大学挙げて開催する運びとなりました。

東日本大震災発生から4年余り、この間全国から多数の支援を得て、これまでの復旧の様子を見ていただく絶好の機会にもなった大会初日には、仙台を代表する新緑の定禅寺通に面した仙台市民会館において、全国から600余名の参加者により盛大に定期総会・研究大会が開催されました。また、二日目には、仙台大学を会場に12分科会に分かれ、教員養成に関する諸問題を熱心に討論するなど、有意義な研究大会となりました。特にこの日は、本学が陸上記録会、柴田郡中総体会場ということで、体育系大学活動を紹介する場としての地域貢献が参加者の胸に強く響いたことでしょう。

最後になりますが、大会期間中大きな混乱もなく実施でき、大学関係者の全面的なご理解とご協力に厚く御礼申し上げます。

＜報　告：教職支援センター長兼教授
青沼　一民＞

気仙沼の海岸にて集中捜索活動のボランティアに参加

6月13日(土)気仙沼市岩月千岩田の海岸にて警察、ボランティア合同の集中捜索活動を行いました。

本学からは学長、学生6名（3年体育林佳宜、佐藤修平、3年健康福祉皆川由香、3年現代武道秋葉悠哉、1年体育佐藤恒一、1年健康福祉永岡佳樹）、職員2名が参加しました。スコップで砂浜を掘ったり、津波で壊れた防潮堤を覗き込んだりして手がかりを探しました。途中、気仙沼在住の本学卒業生、柳川正博先生(11回生、宮城県本吉響高等学校教諭)が、差し入れを持ってかけつけてくださいました。

今回の捜索活動では、人骨の可能性のある骨25本が見つかり、本学学生も数本見つけて、参加の意義を感じているようでした。現状を目の当たりにして参加学生は「大事な活動、今後も継続的に支援ができるように、学校に帰ってからも、こうしたボランティア活動を広めたい」と話していました。

＜報　告：学生課　平井孝秀＞

仙台大学開放講座「パソコンでオリジナルカレンダーを作ろう」を開催

Wordの基本的な操作を教える藤本講師（中央）
＝仙台大学情報処理実習室

6月4日（木）、本学KMCH大会議室で『平成27年度 みやぎ県民大学 仙台大学開放講座「パソコンでオリジナルカレンダーを作ろう」』の開講式が行なわれ、県南の地域住民約60名の受講生が集いました。

今回の開放講座では、パソコンを使用してオリジナルカレンダーを作成します。パソコンの基本操作や写真の加工方法などについて知り、オリジナルカレンダーをきれいに作る「コツ」を学ぶ内容となっています。

はじめに、仲野隆士副学長が「自分流に自由な発想でカレンダー作りを楽しんでほしい」と挨拶。続いて、岡田成弘講師（開放講座責任者）が開放講座の概要を説明され、同開放講座の講師である藤本晋也講師を紹介しました。藤本講師は「カレンダーに運動を行なう予定を記入しやすく工夫するなど健康的な要素を組み入れることで、体育大学（仙台大学）でカレンダーを作成する意味を持たせいたい。力まず楽な感じで参加してほしい」と話されました。

開講式終了後、受講生たちは、本学情報処理実習室に移動し、Word（ワード）でカレンダーを作成するときの基本的な操作を学びました。受講生の冨樫千津子さん（65歳）は、「パソコン操作は難しくて、自分には出来ないと思っていましたが、先生が丁寧に教えて下さるので安心しました。これからどれだけ自分が上達できるか楽しみ」と感想を話されました。

青葉区桜ヶ丘学区連合町内会において仙台大学方式健康運動指導を実施

平成27年6月4日（木）14：00から仙台市青葉区桜ヶ丘コミュニティセンターにおいて、健康づくり運動サポート活動を実施しました。今回は同法人の明成高等学校の所在地であり、日頃から地域でお世話になっている桜ヶ丘学区連合町内会からのご要望により実現したもので、桜ヶ丘学区内にある15の町内会からすべての代表者が集まり総勢33名の方々に参加いただきました。

はじめに医師の橋本 実教授による「100歳まで元気に生きるコツ」と題した健康講話が行われ、健康寿命を延ばすためには、血管を健康に保つことが重要で、それには「運動」と「食事の質」が大切であること、適度な運動を行うことで何歳になっても筋肉量を増やせることなどが話されました。

参加された連合町内会会員の皆さんは頷きながら聞き入り、本学の健康講座に参加する80歳代男性が、運動指導の前と後でどう変化したか比較映像を観ると明らかに良い変化があることに驚かれ、適度な運動がもたらす効果を実感された様子でした。

続いて、スポーツ健康科学研究実践機構の齋藤まり新助手と、本学独自の資格である健康づくり運動サポーター中級取得者の佐藤達也さん（体育学科４年）、宍戸香菜子さん（健康福祉学科３年）による運動指導が行われました。また明成高等学校内川平分室にアスレティックトレーナーとして勤務する白坂広子新助手と小野勇太新助手も参加し自己紹介をしました。じっくりと準備運動をした後は、頭の体操を交えたレクリエーションや椅子を使って足の筋肉を鍛える運動などがいくつか紹介され、随所に大きな笑い声が響く楽しい運動教室となりました。

桜ヶ丘学区連合町内会の酒井典雄会長は、「オリンピック選手も輩出する仙台大学の先生方や学生の皆さんに楽しい運動指導をしていただき今日は感謝で一杯です。桜ヶ丘団地は現在32パーセントが高齢世帯の現状です。今日のような教室に参加したことで、より健康に対する意識も高まりました。本当にありがとうございました。」と話されました。

参加された会員の方々は皆一様に頬の筋肉もほぐれた様子で、今日は笑って運動でき楽しかったと笑顔で感謝の言葉を話されていたのが印象的でした。

女子サッカー部と女子ハンドボール部合同で野外トレーニングを実施

平成２７年６月１３日（土）山形県西置賜郡源流の森にて、本学の岡田講師および岡田ゼミ生の指導の下、女子サッカー部と女子ハンドボール部の合同で野外トレーニングを行いました。

通称ＡＳＥ（Action Socialization Experience）と呼ばれる野外トレーニングは、仲間達とアイデアや意見を出し合って、与えられた課題を１つ１つクリアしていくグループ活動のことです。

近年、ＪリーグのチームやサッカーＳ級ライセンス講習会、競泳日本代表など多くの競技団体がこのＡＳＥを実践しており、グループやチームワークを高めるのに大変有効な活動として、今、日本スポーツ界で注目されています。

今回の女子サッカー部とハンドボール部の合同ＡＳＥ体験では、

１）対人相互理解（自己および他者理解）を深める
２）コミュニケーション能力を高める
３）部員同士および同じ仙台大学の学生同士の絆を深める

を目的として行われましたが、競技の枠を超えた仲間意識と本学の学生らしい溌剌とした笑顔が印象的な大変有意義な活動でした。

女子サッカー部黒澤監督は、「このような活動を通じてチームビルディングを図ると共に学生同士が切磋琢磨してアスリートとしての資質を高め、学生自らが仙台大学を盛り上げていくきっかけになれば」と話しておりました。

＜報　告：岡田成弘講師＆黒澤尚助教＞

NSCAジャパン最優秀指導者賞ストレングス&コンディショニングコーチ・オブ・ザイヤー授賞：加賀洋平氏

6月21日日曜日に、日本教育会館一ツ橋ホールにて2014年NSCAジャパン最優秀指導者賞ストレングス&コンディショニングコーチ・オブ・ザ・イヤーの授賞式があり、その受賞者として参加してまいりました。

この賞は、ストレングス&コンディショニングコーチとして、会員の手本となる功績をあげたと認められるNSCA会員に対して、その功績を讃えて授与される賞として昨年新設され、私はその最初の受賞者となりました。

この賞の受賞対象年は2014年のみですが、今回の受賞は、2008年に朴澤理事長に日本では非常に稀有な大学S&Cプログラムを展開する職務を頂いてから2014年までの7年間に積み重ねてきた全ての指導に加え、私が指導担当した学生運動選手達の努力や、私の下でS&C指導者になるべく懸命に勉強した全ての教え子達のサポートの賜物と理解し、その全てのプライドを持って賞を受け取ってまいりました。

今年度からは職も立場も変えてその仙台大学S&Cプログラムをサポートしていますが、今後もこのプログラムからまた新たな受賞者を輩出できるよう、より質の高い人材育成につながる環境造りに関わっていけたら、と願っております。

また、この場を借りての報告となりますが、昨年度を最後に私は仙台大学でのフルタイムの職務を去り、現在は地元東京深川に拠点を移し、国内のS&C業務の新たな可能性を模索するために奔走しております。本学にてお世話になった方々におかれましては、昨年度までの長きにわたるご指導、ご助言、心から感謝いたします。

今年度も月に数度は来校してトレーニングセンターでの指導業務に勤しんでいます。出勤頻度は減りましたが、今後も仙台大学S&Cプログラム発展のために精一杯励んでまいりますので、プログラム共々、どうぞよろしくお願い申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

＜報 告：仙台大学客員研究員(非常勤研究員)
加賀　洋平＞

AEDを使い学生たちが連係プレーで救命救急の初期対応

6月12日（金）夕方、柴田町船岡南グランドサッカー場近くで、停車中の自動車が畑に後ろ向きに突っ込む事故がありました。

その場に通りがかった、硬式野球部の庄子順也さん（体育学科3年）と松井健さん（体育学科3年）が不審に思い、その自動車を覗きこんだところ、運転席で意識朦朧としている50代男性を発見しました。女子サッカー部の升川礼衣奈さんも駆けつけ、お互いに状況を確認し、このままだと命に関わるのではないか。すぐに助けなければいけない。との咄嗟の判断で警察と消防に連絡をし、救急隊が到着するまでの間、ＡＥＤを使用しての救命活動を行いました。

その時出動された柴田消防署救急隊の下山さんにお話を伺うと、「ＡＥＤを使用しての、まさしく模範的対応でした。ＡＥＤを作動させ「必要ない」の自動メッセージが流れたことにより電気ショックを与えなくても良い状況となりましたが、ＡＥＤを使ったからこそ出るメッセージです。もし、心細動などが起きていたならば使用しなければならないこともあったと思います。救急隊が到着するまでの間も、男性の観察を続け適切な対応をしていただきました。また救急隊が到着してからも活動を最後まで見守り、発見時の状況を詳細に聞き取ることが出来ました。ありがとうございました。学生のみなさんの対応は、大変立派でした。」とお褒めの言葉をいただきました。

病院へ搬送された男性は、病院へ到着するまでには話ができる状態になり、命に別状はなかったということです。

升川（ますかわ）　礼衣奈（れいな）さん（体育学科3年）

「教職キャリア演習」の授業で、実習先の名取市高舘小学校の先生方と共に、水泳の授業前に毎年実施されるＡＥＤ講習を前日に受けたばかりでした。庄子君と松井君と連携し、サッカーグランドのクラブハウス内に設置されていたＡＥＤを取りに行き心肺蘇生活動を行いました。今振り返れば、脈拍の確認など他にもしなければならない事があったかもしれないと思うのですが、その時は無我夢中でした。

丁度前日に、ＡＥＤ講習を受けていたためＡＥＤを使用することに戸惑いは全くありませんでした。女子サッカー部の危機管理マニュアルがあり、黒澤監督からチーム内で各自ＡＥＤの場所を確認しておくよう指導されていたので、サッカー場へ迷わず取りに行くことが出来ました。事故に遭われた男性も無事意識が戻られたと聞き本当に良かったです。

松井（まつい）　健（たける）さん（体育学科3年）

目の前で畑に車が突っ込むのを目撃しました。運転席の男性に声をかけるとあまり反応がなく、肩をたたいても反応が鈍かったため、110番の通報し状況説明をしました。警察や消防の方が到着するまでの時間は10分ぐらいでしたが、待つ時間は長く感じ、初動対応の大切さを痛感しました。

庄子（しょうじ）　順也（じゅんや）さん（体育学科3年）

ＡＥＤが到着するまで、胸部圧迫心臓マッサージをしていました。一人ではここまでは出来なかったかもしれませんが、松井君や升川さんが一緒に対応してくれたおかげです。自分の進路の一つの選択肢として教員を目指していますが、教員になった時、このような緊急の場面でどうすべきか、自分の言葉で伝えていけたらと思います。

仙台大学には、ＡＥＤが10か所（Ｃ棟実験室、第4体育館ＡＴルーム前、第5体育館エントランス、健康管理センター前、屋内プール、明仙バスケラボに2か所、サッカー場、第2グラウンド、漕門館、管理課（実習等での貸出用））に設置されています。

体育系大学で学ぶ学生たちが、大学内のＡＥＤを使って救命活動を行い、救われた命があった事実は、とても誇らしい出来事でした。

熱中症勉強会開催報告

第一回は6月8日（月）参加者7名場所はKMCH一階大会議室、第二回は6月10日（水）参加者20名（AT部学生対象）場所は第四体育館一階演習室、第三回は6月18日（木）参加者13人場所はKMCH一階大会議室 で実施しました。独立行政法人日本スポーツ振興センターによると、平成25年度の熱中症による死亡事故は、幼稚園から高等学校の間で5264件発生しました。熱中症はひどい場合は死に至る危険な状態です。いざという時の対処法を知ることも必要ですが、発症を予防する活動の実施が最も重要であると認識しています。アスレティックトレーニングルーム（以下ATルーム）では、今回のような勉強会開催を通し、正しい知識を各運動部に広げ、皆で熱中症事故をゼロに防いでいくことを目標としています。

今回の勉強会には、各運動部の部長・マネージャー・興味のある学生などに参加してもらい、3回の実施で15部活動からの参加がありました。内容は熱中症の症状別対処法、予防法、スポーツパフォーマンス向上のための水分補給などを実施しました。

参加者の女子ハンドボール部の畑澤亜由美さん（健康福祉学科2年）は勉強会を経て次のようにコメントしています。

「熱中症勉強会を受ける前の私は、知っているつもりが多く、改めて熱中症の様々な症状や予防・対策法の基礎知識を確認し、身に付ける事ができました。熱中症は夏の季節に多く見られ、一度に様々な症状を発症し、最悪の場合死に至る危険をもたらします。これから夏を迎えるにあたり、熱中症患者が多く出てくるはずです。そうならないためにも、部活動中や運動を行う際はもちろん、普段の生活の中でも今回の勉強会で学んだ事を活かして取り組んでいきたいと思います。また、私からも多くの人に熱中症予防啓発について発信できることは伝えていきたいです。」

毎年本学ATルームでは、熱中症危険度が増す6月～9月の間、体育館やグラウンドにてWBGT（湿球黒球温度）の計測を実施しています。WBGTとは、人体に影響の大きい気温・湿度・輻射熱（直射日光）の３つを取り入れた指標の事で、計測結果は①ほぼ安全　②注意　③警戒　④厳重警戒　⑤運動は原則中止の5項目に分けられています。夏場になると、厳重警戒や運動は原則中止などの計測結果が出ることも多いので、その際には熱中症に十分注意しながら運動を行ってもらいたいと思います。各計測地点にも掲示板を設置していますが、今年は毎日14：00頃～第三体育館スクリーンでも結果が上映されているので、そちらも是非活用してもらいたいと思います。

今後も本学ATルームでは、熱中症のみならず学内のスポーツ環境を安全に保つために、勉強会を開催していく予定です。

＜報　告：新助手　鈴木のぞみ＞

柴田町郵便局に本学の情報配信コーナーを常設

阿部学長と大沼局長（右）が地域への情報発信のあり方について話し合う‖柴田町郵便局

6月12日（金）より、柴田町郵便局ATMコーナー内に、本学の情報配信コーナー（仙台大学広報誌・仙台大学大学案内リーフレットなど）を常設して頂くことになりました。

これは、地域への情報発信の一環として、阿部学長が発案。阿部学長が柴田町郵便局の大沼芳則局長と直接交渉し、実現したものです。

後日、大沼局長より「熊原君の表紙の冊子は、その日うちになくなりました。反響も上々ですね」とご連絡を頂きました。今後も、地域の皆さまに本学についてより多く理解して頂けるような情報配信を心がけていきたいと思います。

なお、本学教職員の皆様も、地域の皆様へ何か情報発信したい事がありましたら、広報室までお問い合わせ下さい。

本学を会場に2015年度「NR.サプリメントアドバイザー」レベルアップセミナー開催

6月20日（土）、本学B棟300教室を会場に「NR．サプリメントアドバイザー認定資格」（一般社団法人日本臨床栄養協会の認定資格）におけるレベルアップセミナーが開催されました。

一般・学生の総勢約30名が参加し、サプリメントアドバイザーとして更なるレベルアップを図る機会となりました。日本栄養協会の方々と講師には仙台白百合女子大学：佐々木裕子准教授、株式会社グローバルニュートリショングループ：武田猛代表取締役をお招きし、「応用栄養学」・「機能性表示食品」についてご講話いただきました。有資格者として本学運動栄養学科の卒業生2名および在学生2名が参加しました。

そのうち、在学生参加者である木村汐里（きむらしおり）さん（運動栄養学科3年―群馬・館林女子高校出身）は「高齢者の多くが健康の為にサプリメントを活用しているという話を聞いて驚いた。使い方によっては、命に関わる可能性もあるので、正しい情報を提供し、利用者が自分に合ったサプリメントを使用できるよう支援していきたい。」と決意を新たにしていました。

今日のレベルアップセミナーを通じて、利用者にアドバイスをしていくにあたり、こちら側から一方的に話をするだけでなく、利用者に対して親身になり、支援することが大切であると学びました。

今後も一人でも多くのサプリメントアドバイザーが増えてほしいと思います。

＜報　告：新助手　只野瑞恵＞

本学内の知られざる社会貢献へのご案内

第５体育館に入って左に進んだ一番奥の右端にひっそりとスペシャルオリンピックス日本・宮城（以下ＳＯ宮城）専用のジュースの自動販売機が設置されています。その存在を知っている教職員、学生はどのくらいいるでしょうか。コカコーラ社の自動販売なのですが、ジュースの購入代金の一部がＳＯ宮城の活動資金として寄付されることになっています。確か２年前、ＳＯ宮城理事長からの依頼があり管理課を通して当時の朴澤学長にお話させていただき設置に至りました。

一方、この４月より学内４ヶ所にＳＯ宮城設立20周年記念チャリティーボックスを設置していただいています。庶務課、学生課、学生支援センター、KMCHの４ヶ所です。

こちらは、12月末に回収させていただき、全額がＳＯ宮城の活動資金として寄付されることになっています。

知的障がいのある人々に年間を通したスポーツプログラムと競技会を提供する国際的なスポーツ組織であるスペシャルオリンピックスは、紛れも無くIOCが認めたオリンピックの1つとして今日に至っています。

詳 細 は**http://www.son.or.jp/topics/201203_02.html**を参照ください。

1994年にＳＯ日本が設立され、翌年の1995年に６番目の地区組織としてＳＯ宮城が設立されました。設立当初、理事長が副会長で、私がスポーツプログラム委員長に就任しました。1995年から私は本学を会場にテニスプログラムを毎年実施してきました。3.11の１年だけはお休みしましたが、かれこれ19年継続してテニスプログラムを硬式テニス部員たちと一緒に20名程度のアスリートのコーチングに取り組んできました。宮城では12種目程度のプログラムが展開されているので、興味のある学生達に関わっていってもらえるとうれしいです。

教職員並びに学生のみなさま、チャリティーボックス等へのご協力よろしくお願いいたします。

＜スペシャルオリンピックス日本・宮城理事　仲野隆士＞

仙台大学柔道塾生から初の宮城県チャンピオン誕生

6月14日（日）、古川総合体育館武道場（宮城県大崎市）で「平成27年度第12回全国小学生学年別柔道大会宮城県予選会」が行なわれ、仙台大学柔道塾生の後坊蒼斗（ごぼうあおと）君【写真左】（小学6年生男子50kg級）が優勝しました。同柔道塾生から宮城県チャンピオンが誕生したのは、今回が初めて。後坊君は、平成27年8月30日（日）に小瀬スポーツ公園武道館（山梨県甲府市）で開催される全国大会に、宮城県代表として出場することが決まりました。

南條充寿塾長【写真右】（仙台大学准教授／全日本女子柔道監督）は「蒼斗は常に攻める果敢な姿勢が持ち味の選手。勝っても負けても経験。全国での経験を次の稽古に繋げ、更なる成長を期待したい」とエールを送りました。

見事、優勝を果たした後坊君に、柔道を始めたきっかけや全国大会での抱負などについてお話を聞きました。

柔道を始めたきっかけは―５歳（幼稚園の年中）から柔道を始めました。自分の身を守りたい・強くなりたい・目立ちたい・有名になりたいと思い始めたのがきっかけです。今は柔道が楽しくて充実しています。

憧れの選手は―背負投の名手で、ロンドンオリンピック柔道66kg級銅メダリストの海老沼匡（えびぬま・まさし）選手です。

全国大会での抱負は―右利きなので、左組手が苦手。苦手を克服し、真面目に一生懸命稽古に励んで優勝したいです。将来の夢は、オリンピックで金メダルを獲得することです。応援して頂けたら嬉しいです。

仙台大学柔道塾とは？

幼児・小学生等を対象とした柔道の普及を図り、柔道を通じて塾生の健全な精神と身体を養うこと、塾生相互の親睦を図り、地域社会の連携を深めることを目的とした本学独自の取り組みです。2011年7月、柴田町柔道スポーツ少年団から仙台大学柔道塾として新たにスタートし、現在は塾生も40人を超え、日々鍛錬に励んでいます。

女子サッカー部、MF加賀孝子主将とDF須永愛海選手がユニバ代表に選出

本学女子サッカー部のMF加賀孝子主将【写真左】（スポーツ情報マスメディア学科4年－ジェフユナイテッド市原・千葉レディース出身－宮城・聖和学園高校出身）とDF須永愛海選手【写真右】（体育学科3年－JFAアカデミー福島出身）が、7月2日（木）から韓国・光州で開幕する「第28回ユニバーシアード競技大会」の女子サッカー日本代表に選出されました。

ユニバ日本代表の２名同時選出は、東北地区大学サッカー界（男子含む）初の快挙です。また、同大会のコーチとして、本学女子サッカー部の黒澤尚監督も帯同します。

前回大会（2013年7月／ロシア・カザン）に続き、ユニバ日本代表に選出された加賀主将は、「前回大会（日本は５位）は負けた悔しさ、自分のプレーが出来なかった不甲斐なさが残る大会でした。今回は、自分の持ち味である足元の技術を生かしたボールコントロールを披露し、チームの勝利に貢献したい」と話し、ユニバ日本代表に初選出された須永選手は「自分の持ち味はスピード。インターセプトから果敢なオーバーラップでチームを活性化したい。優勝できるようにチーム一丸となって、一戦必勝の気持ちで戦いたい」と大会に向けた抱負を話しました。

黒澤監督は「加賀・須永共にチームの核となって、得点に絡んでほしい。力は十分通用するので、自分たちの良さを出しながら、自信を持ってプレーしてほしい」と話し、「ユニバ（国際大会）の経験を個人の成長と部（仙台大学女子サッカー部）の底上げにつなげてほしい」と期待を込めて話しました。

なお、ユニバーシアード日本代表チームは、１次リーグで7月2日（木）にロシア、4日（土）にコロンビア、6日（月）にメキシコという対戦スケジュールが組まれています。

柔道部、男女初戦で涙―全国の壁を痛感

6月27日（土）、団体戦（男子7人制・女子5人制）で争う「全日本学生柔道優勝大会（男子64回・女子24回）」が日本武道館（東京都千代田区）で開催され、本学男女柔道部が出場しました。

東北学生柔道優勝大会で初優勝し、勢いに乗る本学男子の初戦では、中央大学と対戦。最後まで果敢に攻めましたが、０－６の完敗。その中で一人、萩本恭輔選手（現代武道学科1年－茨城･磯原郷英高校出身）【写真上(左)】が粘りの柔道を見せ、引き分けに持ち込みました。

東北学生柔道優勝大会９連覇中の本学女子の初戦では、関東の強豪・淑徳大学と対戦。紙一重の差を埋めきれず、接戦の末１－３で敗れました。その中で一人、次鋒・工藤千佳主将（現代武道学科4年－青森･五所川原農林高校出身）が得意の“内股”で一本を奪い、一矢報いました。

残念ながら男女共に初戦で敗れ、全国の壁を痛感する大会となりました。試合後、本学女子柔道部の南條和恵監督は「10月に開催される団体戦（7人制）では、この悔しさを胸に、一泡吹かせたい」と新たな気持ちを話しました。

【写真下（右）：女子大将・大枝郁美選手（体育学科4年－茨城･水戸葵陵高校出身）が攻め続けるも惜しくも引き分け】

全日本大学野球選手権―初戦敗退、熱い応援で選手を鼓舞

6月8日（月）、東京ドームで「第64回全日本大学野球選手権大会」の1回戦が行なわれ、仙台大学（2年連続2度目／仙台六大学野球連盟）は九州産業大学（2年連続16度目／福岡六大学野球連盟）と対戦し、０－３で敗れて初戦敗退となりました。

試合は、エース熊原健人（くまばらけんと）投手（体育学科4年－宮城・柴田高校出身）が13奪三振を奪う力投を見せましたが、拙守に泣きました。打線は相手好投手を攻略できず、2安打16奪三振を喫し完敗。しかし、昨年は８強入り、2年連続「全日本大学野球選手権」に出場し、最後まで諦めずに戦った仙台大学硬式野球部の選手たち。三塁側の応援スタンドには、本学硬式野球部OBや同窓生、姉妹校である明成高校吹奏楽部の生徒、選手の父兄らに加え、今年も本学の所在地である柴田町から本学硬式野球部を支援する有志の会「川交会（せんこうかい）」の皆様らが応援に駆け付け、計約600名の大応援団が熱い応援で選手を鼓舞。初戦で敗れましたが、仙台大学ナインの戦いぶりに、大きな拍手が送られました。

力投する熊原投手＝東京ドーム

応援に駆け付けてくださった本学硬式野球部OBの森洋祐さん（36歳）（平成14年体育学科卒）は「居ても立ってもおられず、今年も応援に駆け付けました。後輩たちの活躍を誇りに思います。負けたことは非常に残念ですが、早く気持ちを切り替え、秋（明治神宮野球大会）を目指して頑張ってほしいです」と話し、後輩たちの今後の更なる飛躍を期待しました。

約６００名の大応援団が選手たちに熱いエールを送りました。

硬式野球部、東北地区大学野球選手権「初優勝」を果たす

初優勝を喜ぶ仙台大ナイン＝仙台市民球場

6月29日（月）、仙台市民球場（仙台市宮城野区）で、東北の王者を決める「第１０回東北地区大学野球選手権」の準決勝・決勝が行なわれ、仙台大学（仙台六大学野球連盟１位）が見事初優勝を果たしました。

準決勝では、エース熊原健人（くまばらけんと）投手（U21野球日本代表／体育学科4年－宮城･柴田高校出身）がノースアジア大学（北東北大学野球連盟５位）に１安打１２奪三振を奪う快投を見せ、５－０で完封勝利を挙げました。

決勝では、準決勝で東北福祉大学（仙台六大学野球連盟２位）を４－７で退けた富士大学（北東北大学野球連盟１位）と対戦。試合を決めたのは、２－２で迎えた６回裏２死一二塁で、７番･三浦大希（みうらだいき）捕手（体育学科2年－宮城･柴田高校出身）が放った左越えの逆転２点二塁打。最後は、先発・影浦雅人（かげうらまさと）投手（体育学科4年－北海道・旭川実業高校出身）を救援した馬場皐輔（ばばこうすけ）投手（体育学科2年－仙台育英学園高校出身）が強気の投球を見せ、粘る富士大学打線を４回１失点に抑え、４－３で振り切って、優勝投手に輝きました。

なお、大会最優秀選手賞には、今大会打率４割６分６厘・８打点の活躍を見せた大坂智哉（おおさかともや）一塁手（体育学科3年－青森山田高校出身）が選ばれました。

次は、仙台六大学野球秋季リーグ戦優勝（春秋連覇）を目指し、チーム一丸となって臨みますので、引き続き本学硬式野球部への熱い応援をよろしくお願い致します。

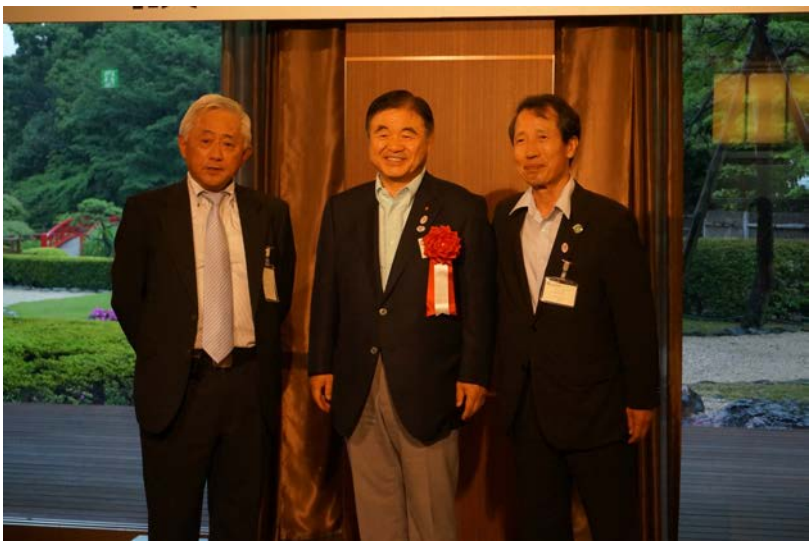
SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol.111／ 2015 July
（月1回発行）

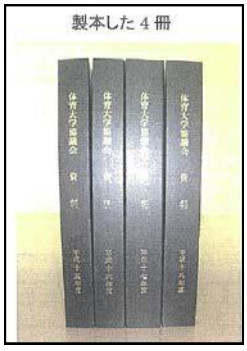
仙台大学 広報室

Monthly Report

一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」の法人化祝賀会に出席して



７月２６日、東京のホテルニューオータニにおいて開催された一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」の法人化祝賀会に、阿部学長とともに出席した。昭和５６年９月、体育系大学経営層の集まりである任意団体として、当時の設置基準改定による大学体育の選択科目化に対し必修維持を働きかける目的等で発足した体育大学協議会を、本年度、一般社団に法人化したものである。祝賀会では、松浪健四郎協議会会長(日本体育大学理事長)が、２０２０年東京オリンピック・パラリンピックに向けた組織拡大および役割の明示・発信、スポーツ指導者に対する協議会独自の認定資格制度創設その他、法人化の意図について説明・挨拶の後、下村文科相や遠藤五輪担当相から祝辞を頂くなど、多数の出席者を得て盛会のうちに終了した。


製本した４冊

仙台大学と同協議会との係わりでは、日本体育大学、日本女子体育大学、東京女子体育大学、大阪体育大学と並んで、発起人５大学の一つとして、発足当初から故矢作文男・前仙台大学理事長が協議会理事に就任し、当職が、引続き前年度末まで足かけ２４年間、理事職に在任するとともに、今回の一般社団法人設立にあたっても、発起人理事の一人として参画している。その間、平成１５年度から１８年度の４年間、故野田敏彦・前大阪体育大学理事長の後を受けて協議会会長職にも就任し、協議会の組織拡大や歴史資料の製本作業、健康体力づくり事業財団との健康運動指導士養成等に係る連携その他を実施した。また、粂野豊、向井正剛の元学長ご両人が、ともに、任意団体の全国体育系大学学長・学部長会会長として協議会副会長に就任し、同協議会の維持・発展に貢献されている。

（仙台大学理事長・朴澤泰治記）

＜ 目 次 ＞

一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」の法人化祝賀会に出席して	1
2015 National Athletic Trainers' Association Convention	2
「海をなめるなよ！」第35回仙台大学海浜実習の報告	3
CSULBの留学生が「書道」に親しむ	7
復興願い「未来(あした)への道1000km縦断リレー2015」に本学学生も参加	7
学生の競技結果等	12

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

2015 National Athletic Trainers' Association Convention
～ セントルイスからの報告 ～

アメリカンセンター内受付前にて　左から朴澤理事長・鈴木新助手・白幡助教・和泉新助手・小野新助手・佐藤周平助教・パランギ講師

米国中西部に位置するミズーリ州セントルイスで全米公認アスレティックトレーナー（以下AT）の会員制組織であるNational Athletic Trainers' Association（以下NATA）の年次総会が開催され、そこに今回本学から７名の教職員が参加した。

NATA会場内の様子

NATAは1950年に設立され、現在では30,000人（内５３％女性、４７％男性）を超す世界的組織となった。６月２４日・２５日・２６日の３日間の開催期間中に、世界中から約8, 000名のアスレティックトレーナーが会場に集結した。8,000名もの参加者が一同に集まるため、アメリカンセンターといった東京ドーム１つ分以上の大きさの建物で開催された。会場に入るとまず受付が設置されており、登録した者とそのゲストのみしか参加できないようになっている。プログラムが配布され、同時にいくつも開催されている講義、ポスター発表や研究発表から選択して聴講する方式となっている。その合間には、業者が最新のスポーツ関連商品を展示し、試供品を配布する「展示スペース」で最新の商品についてリサーチすることも可能だ。

展示スペースの様子1

また、「Career Center」といって数多くの雇用情報をNATA年次総会で得る事が可能だ。新卒者の面接を年次総会会場で行う事も多々ある。たくさんのATが集結するため、各地区の代表者が集まる会議や、常任理事会なども総会中に実施されている。また、卒業した大学の同窓会なども開催され、人脈を構築しATの職域を広げ各々が向上しあう機会を提供するよう構成されている。

展示スペースの様子2

2015年年次総会で最も話題性があったトピックは「脊髄損傷選手に対する適切な対処法」についての合意書が改訂された事である。以前のAT教育においては、脊椎損傷選手に対してアメリカンフットボールなどで使用される防具（ヘルメットやショルダーパッド）を外すのは医療機関に搬送されてから行うべきで、必要のない限り取り外さないとされていた。今回の改訂では、３名以上トレーニングを受けたATがその場にいた場合はできる限りの防具を現場で取り外してから搬送することとなった。また、搬送時に使うバックボードについても詳しく説明されている。医療機関に勤務する職種の人々よりスポーツ器具の種類やその除去方法に特化した知識や技術を持つATに判断が委ねられる事になったようだ。

AT教育プログラムは全米で３５０以上存在しているが、2017年までにすべてのプログラムが修士課程に移行されることがきまった。これはATの地位向上とその教育内容を考えたときに修士課程が妥当であると判断されたからである。更には、ATの資格を保持するためにはエビデンスに基づいたスポーツ医学の講義に参加して単位を取得することが必須条件となった。このように、NATAは常に変わりゆく世界の情勢を敏感に感じ取り、会員に常に最新のスポーツ医学の知見を学ぶ機会を提供している。NATAのメンバーはグループとして力を結集する事によりATの職業のためにそれぞれが個人で出来る以上の事を成し遂げる事が出来るのだ。このような機会を与えてくださった朴澤理事長をはじめ、関係者の方々に深謝いたします。

＜報 告：助教　白幡　恭子＞

「海をなめるなよ！」第35回仙台大学海浜実習の報告

平成27年度仙台大学海浜実習が、今年も山形県鶴岡市由良海水浴場で今月18日土曜日から20日月曜（海の日）まで2泊3日の日程で実施された。「海をなめるなよ！」で始まった「水泳実習」（当時の名称）も今年で35年目を迎える。今年は例年になく前日から台風の影響で悪天候に見舞われ、実習メニューが心配されていたが、やはり日本海を代表する海水浴場だけあって、我々の心配をよそに全ての課程を難なく消化する事が出来た。特に最終日の大遠泳では曇り空ではあったものの、水温もほどほど、波ひとつ立たない穏やかな海、絶好の遠泳日和となった。由良の海は最後まで仙台大学を裏切らなかった。最終的には全員が余裕を持って完泳する事が出来た。結果は同設定コースの中では最高記録である107分という実習最後にふさわしい有終の美を飾った。100人にも及ぶ編隊が水面の上で大きな群れと化し移動する様はまさに勇壮壮大である。よき指導を得て団結和協のもと、果てしなき未知の目標を達成しようとする若者の姿は何よりも美しいものである。「教師になって良かった･･･」と思うと同時に、本学学生（新入生として）誇らしくさえ思える瞬間である。

今思い起こせば当時、地元宮城県をはじめ隣県の太平洋沿岸の海水浴場での実習は、7月中旬という事もあって東北の梅雨明け頃の天候は不安定で天気はもとより、気温や水温をはじめ、自然環境要因が中々実習条件に叶う事が少なく、水泳実習に関しては関係者が困難を強いられていた事を思い出す。野外スポーツ活動の成否は、ほぼ気象条件が鍵を握っていると言っても過言ではない。特に「海」という大自然を相手にする水泳となると、潮の流れや水温が重要な要因となる。宮城先生は実習の怖さを良く知っており、その事を誰よりも理解している。

そんなある日、冬季の実習がきっかけで当時担当責任者となった宮城先生に太平洋と日本海の海の違いを話すことがあった。結局実際の現場を二度（真冬と初夏）に渡ってみて頂く事となった。冬の日本海、そして翌年の初夏の海があまりにも違う姿に、宮城先生の驚きの表情が今でも印象的だった。

以来、仙台大学に入って来たほやほやの新入生を迎えるべき体育系大学の「心構え教育」のスタートという事ではじめられた「水泳実習」（当時の名称）は、実に今年で35年。その間、実習中の事故は勿論のこと、始めは泳げなかった学生も全て脱落者無く見事完泳した。学生をはじめ、皆が充実感に浸れる唯一の体験となった。実習を終えた大学では何か学内の空気が大きく変わっていた事を思い出す。こんな気持ちを味わったのは私だけだろうか？そんな感動的行事が地元鶴岡市の話題となり学内にも徐々に浸透して行った。

年を重ね大学の規模も大きくなるに従って、実習生の数も増えていった。実習スタッフは実技教員ではおさまらず、教科や職の枠を超え殆どの教職員が参加（大学が留守状態になり心配した程、笑！）、大学上げての実習となって行った。多い時では300人を超える大遠泳となったことも記録に残っている。同じ厳しさでも競技クラブの活動とはチョット違う、いわば総合訓練にも似た一種独特な教育だったのだと思う。まさに仙台大学生の基本姿勢を植え付ける事が出来る唯一の「教育事業」に育って行った。

このように徐々に本学の一つのムーブメントになって伝統行事と化し、今で言う本学の「建学の精神」、しいてはFD（ファカルティディベロプメント）GP（グランドポリシー）等の土台となったと言ってもよいのではないか。

実は実習前夜に地元観光協会によるサプライズとして「歓迎兼35年感謝の会」が催され、会では当時の懐かしい思い出の写真やエピソードが映し出され、仙台大学の「実習35年の歩み」に花を添えて頂きました事を加えておきたい。また実習中は、毎年のように地元をはじめ隣県（新潟・秋田・仙台、他）の同窓生が数名顔を出し、思い出と懐かしさを取り戻しに来てくれる場面も見逃せない。本当に懐かしいんでしょうねぇ。「先生方年を取りましたね？」、「気合掛かってないんじゃないですか？」等と彼らに「はっぱ」を掛けられる始末（笑！）。最近では2泊3日とスケジュールも少なくなり、総勢100名規模のコンパクトな実習となってしまったが、今回の実習でも当初の「志」は変わらず、きっと仙台大学の精神を学生達に伝える事が出来たと信じている。

佐久間敏行先生（以下先生を省略）、熊坂繁太郎、佐渡一郎、小島淑子、北村　仁、佐藤信重、森　富、向井正剛、佐藤佑、藤堂良明、日下裕弘、本多弘子、鈴木敏明、岡村輝一、春藤るみ、横川和幸、佐藤　久、佐藤幹男、中房敏朗、舟山正則さん、などなど・・・、（他在職中教員略）現在はお亡くなりになられたり、殆どの先生方が退職されている先生方だ。今、文字を打ちながら、それぞれのお顔を思い起こしている。この諸先輩・諸先生の協力なくして今までの実習は存在しなかったことは言うまでもなく、そこに参加して頂いた歴代からの補助学生の諸君の力の賜物だと感謝している。

とにかく一人一人が燃えていた。その燃えた先生方の姿を、彼らはしっかりと今でも忘れていない。自分自身の誇りの宝として。だから、いつまでもそれを私たち教員は忘れない。本当にみなさんお疲れ様でした。今回の実習の閉講式では全員が大海原に向かって指をさし「海をなめるなよ！」のエールを行った。

「海をなめるなよ！」で始まり「海をなめるなよ！」で無事終わる事が出来、35年目の海浜実習が幕を閉じた。大きな体で直立不動となった宮城先生、震えた嗄れ声とうるんだ目がとても印象的だった。35年間私たちを守ってくれた「由良の海」に心から感謝を申し上げたい。これからも他大学に類のない体育大学らしい「仙台大学海浜実習」の素晴らしき伝統がさらに発展し、受け継がれていくことを誇らしく願うものである。

＜寄　稿：文・児玉善廣 教授、写真・小松恵一 教授＞

第2回 NPO法人日本スポーツ栄養学会（7月4日～5日）報告

滋賀県の立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおいて第2回NPO法人日本スポーツ栄養学会が開催されました。

今回の大会のテーマは『QOL（生活の質）の向上にスポーツ栄養学ができること』でした。今大会の大会長である立命館大学スポーツ健康科学部教授の海老久美子教授からQOLの向上のために今回、「和」と「輪」と「環」の３つの「わ」をキーワードに、広げ、深める大会であるとお話をしていただきました。「和」は日本の文化を意味し、「輪」は栄養面のニーズについて、また、人のつながりを意味します。「環」は人の体の中の活動を意味します。

多くの大学、企業から研究発表がありました。本大学からは、前年度と同様に早川公康准教授、岩田純講師が口頭発表を行いました。

岩田純講師により運動栄養サポート研究会の活動について、報告がされました。内容は昨年度から開始された新制度の運動栄養サポーターについてです。運動栄養サポート研究会の目標である「選手の競技力向上」を達成するためにも、サポート活動の質向上を目指して参ります。

今大会で報告された発表内容には、「集団に対する食事調査」、「体重の増減」など、運動栄養サポート研究会の発展に必要となる内容が数多く報告されていました。

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部の鈴木志保子教授による「スポーツ栄養マネジメントを理解しよう」をテーマにしたセミナーがありました。公認スポーツ栄養士に必要とされる栄養管理システムとして導入されている「スポーツ栄養マネジメント」に関し鈴木教授が実践してきたスポーツ栄養を通して教えていただきました。

本学の、運動栄養学科に設立された運動栄養サポート研究会は今年で13年目を迎えました。現時点で55名の学生が13種目の部活に対しサポート活動を行っています。

大会で学んだことを学生達に伝え、学生と教職員も運動栄養サポート研究会の向上に努めていきたいです。また、学生達にも学内の活動だけではなく、他の大学のスポーツ栄養に関する活動を知り、外部の活動に参加してほしいと感じました。学内に留まらず、外部が行っているスポーツ栄養を感じることで自分達の栄養指導力の広げていくよう願っています。

大会を通して私自身は、「選手とどれだけ向き合えるか」、「自分の時間を費やせるか」そして、「スポーツ栄養はアスリートだけではなくすべての人のためのある」これは仙台大学の基本理念であるスポーツフォアオールと近い理念だと考えます。これらの3つを基盤にアスリートへの栄養指導や学生の育成をして参ります。

以上、第2回NPO法人日本スポーツ栄養学会の報告とさせていただきます。

＜報　告：新助手　村上　昴＞

岩田講師の発表の様子
テーマ：栄養士要請課程の学生が行うスポーツ選手の栄養サポート活動に関する研究（第４報）～栄養サポートのためのカリキュラムと制度の検討～

日本学校教育学会第30回研究大会

［基調講演］憲法の国際平和と教育基本法の教員像を目指す教育対話
（前仙台大学副学長　京都光華女子大学副学長　若井彌一）

昨年8月に日本学校教育学会第29回研究大会が仙台大学で行われました。今回の第30回研究大会は、7月17日から３日間東京の目白大学を会場として開催されました。大会は公開シンポジウム、基調講演、記念講演、課題研究、自由研究などのセッションを設けました。本学元副学長若井彌一先生、昨年大会準備委員会委員長事務局長を務めた本学太田四郎、事務局長の高橋まゆみ先生、本学の牛志奎など数名の先生が大会に登壇しました。

（http://www.gakkoukyoiku.com）

［公開シンポジウム］司会を務めた高橋まゆみ先生（本学客員研究員、前体育学部教授、国際交流センター長）

地球規模のグロバール化の進行は政治・外交、経済、教育、社会に大きな影響を与えています。そのため近年東アジアではどのような教育改革が行われているのかを検討するため、大会は「東アジアの学校教育――教育改革の潮流を中心に――」という課題テーマを設定し、基調講演をはじめ、韓国、台湾、および中国からの研究者がそれぞれの最新の話題を提供しました。

［公開シンポジウム］牛志奎が衝撃的な写真とユーモラスな話で中国の激しい受験競争の現実を説明しています。

［記念講演］みんな地球に生きるひと～日本の国際化とこどもの未来～（アグネス・チャン　歌手　陳美齢　日本ユニセフ協会大使）

［自由研究］自由研究の発表、通訳・司会を務めた牛志奎と海外発表者および日本の研究者の記念撮影

＜文 責：教授･太田四郎／教授･牛 志奎＞

仙台大学生のための教採塾を実施―教師を目指す学生達の思いに応えて

仙台大学生のための教採塾の様子＝仙台大学

7月6日（月）、本学講義棟で「仙台大学生のための教採塾」＜主催：仙台大学教職支援センター／期間：平日・週1日（昨年11月～9月中旬まで）及び土曜・月2回（今年4月下旬～9月中旬まで）＞が実施され、「教師になろう」という強い志を持った本学の学生約60名が参加しました。教採塾では、教師を志望する学生に対し、「教員採用試験対策」の勉強会を行なっています。

この日は、本学の渡邊康男教授が、「特別支援教育」分野で出題頻度が高いと思われる内容を題材にしながら重要ポイントを確認。その後重要ポイントに解説を加え、わかりやすく説明されました。参加学生達は熱心に耳を傾け、メモを取っていました。

参加学生の塩入絵美（しおにゅうえみ）さん（健康福祉学科3年－福島・会津学鳳高校出身）は「私は将来、小学校の教師になりたいと考えています。教採まで１年を切ったので、本格的に勉強をスタートさせるつもりです。教採まであらゆる準備を行ない、現役合格を勝ち取るために今から精一杯頑張ります」と話しました。

本学教職支援センター長の青沼一民教授は「教員採用試験合格は、非常に難しい状況であるが、最後まで踏ん張って、努力を重ねてほしい」と学生達に向けての激励の言葉を話され、「教員採用試験対策は、いかにして大学1・2年生の早い段階から本気にさせるかが肝要である。学生達が意欲を高めるような仕組み、仕掛けを工夫していきたい」と今後の展望を述べられました。

【本学で取得可能な教員免許状】
「中学校教諭一種普通免許状（保健体育）」・「高等学校教諭一種普通免許状（保健体育）」・「養護教諭一種普通免許状」・「特別支援学校教諭一種普通免許状」・「高等学校教諭一種免許状（福祉）」・「栄養教諭二種普通免許状」・「小学校教諭二種免許状」
（明星大学通信教育部との教育業務提携による）

本学とタイ・シーナカリンウィロート大学との国際交流協定の締結を更新

協定書を手に握手する阿部学長（左）とスプラニー学部長＝学長室

7月14日（火）、本学において仙台大学とシーナカリンウィロート大学（タイ）との国際交流協定の締結を更新しました。本学の阿部芳吉学長とシーナカリンウィロート大学のクァンプンチャン・スプラニー学部長が、協定書に署名を行ないました。同大学の学生の受け入れは、平成22年度より毎年実施しています。

また、スプラニー学部長は、現在、本学に留学中のシーナカリンウィロート大学の学生2名と面談し、本学での勉学の様子や日常生活を確認され、安心した表情を浮かべていました。

シーナカリンウィロート大学は、1949（昭和24）年、教員養成のための国立師範学校を母体に設立されました。現在は、幅広い学問系統を持つ総合大学になっています。本学とは、平成21年1月7日に国際交流協定を締結。平成21年には、シーナカリンウィロート大学の教員が、本学の教育資源の研究や本学教員による指導を受けることを目的に来学されました。

国際交流協定の更新後、両大学間の連携がより強化され、教員および学生の活発な学術交流がますます発展するような更なる取り組みが期待されます。

CSULBの留学生が「書道」に親しむ

自分の書いた文字を掲げ、笑顔を見せる留学生ら＝仙台大学

7月27日（月）、本学クラブハウスにおいて、本学と国際提携を結ぶ米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）の短期留学生7名らが、日本の伝統文化に親しむことを目的に「書道」を体験しました。留学生全員にとって、初めての書道体験となりました。

講師の柴田町書道協会会長・山下龍洞氏【前列左から2人目】（読売書法会評議員／宮城県芸術協会会員）は、「書道は日本の伝統文化として、日常生活に溶け込んでいる。一本の筆で、自分の気持ちを一枚の紙に表現してほしい。太い線と細い線を組み合わせることでメリハリがつき、綺麗に見せることができる」と説明。留学生らは、慣れない筆遣いに戸惑いながらも、真剣な表情で筆を握り、「志」・「夢」・「光」などの漢字を色紙に書き写しました。

留学生のキンデル・フリーアーさん【後列中央】は、「漢字を書くのは難しかったけど、とても楽しかった です。将来、大きな夢を掴むために「夢」という漢字を書きました。将来は、メジャーリーグの球団で働きたいです」と感想と自分の夢を話してくれました。

復興願い「未来（あした）への道1000km縦断リレー2015」に本学学生も参加

左から今泉さん、伊藤さん、上野さん

7月28日（火）、宮城県南三陸町他で「未来（あした）への道1000km縦断リレー2015」（主催：東京都及び東京都スポーツ文化事業団）が行なわれ、本学からは、トライアスロン部の伊藤弘夢さん（健康福祉学科２年―栃木・上三川高校出身）・今泉啓太さん（健康福祉学科２年―青森・田名部高校出身）・上野歩さん（健康福祉学科２年―岩手・釜石高校出身）の３名が参加しました。本学の学生たちは、気仙沼市立階上小学校から南三陸森林組合までの約30kmの自転車区間を走行。一般の参加者から受け取ったタスキを上野さんのアシストのもと伊藤さん・今泉さんへと繋ぎ、次の区間の参加者へと送りました。

1000km縦断リレーは、東日本大震災からの復興をスポーツの力で支援することを目的として行なわれており、一昨年に続いて、３回目の開催。青森から東京までの約1,200km・162区間を15日間かけてタスキを繋いでいくリレー形式で行なわれ、ランニングまたは自転車で走行します。

中継所では、多くの地元の方やスタッフに迎えられ、参加した3名は「気持ちよかった」「達成感があった」と充実した表情で語ってくれました。

本学からは、昨年、公園等を会場とする「ふれあいランニング」という区間に学生・教職員ら約25名が参加したものに引き続き、今年は、自転車区間にトライアスロン部の3名の学生が参加しました。被災地にある体育大学として “東日本大震災からの復興をスポーツの力で支援”という趣旨のこのイベントに本学も貢献ができたのではと思います。

青森からスタートし引き継がれたタスキは、仙台・福島・茨城・千葉を経由し、8月7日（金）にシンボルプロムナード公園（東京都江東区・青梅）にゴールする予定です。

＜報　告：文･笹原聖大職員、写真･溝上拓志新助手＞

「平成27年度一般社団法人　仙台大学同窓会社員総会」を開催

仙台大学同窓会社員総会の様子＝仙台大学

7月4日（土）、本学管理研究棟（A棟）2階大会議室で、本学同窓会が社団法人化してから初となる「平成２７年度一般社団法人　仙台大学同窓会社員総会」が開催されました。北は北海道から南は沖縄まで、18支部の支部長または事務長がご出席下さいました。

本学同窓会本部からも鈴木省三代表理事、佐藤久・安部俊三の各顧問、小関章・半澤和茂らの各理事などが出席。総勢35名が参加し、活発な議論が繰り広げられました。 社員総会では、大河原事務局長の司会のもと、鈴木代表理事の挨拶に続き、平成26年度事業報告並びに平成27年度事業計画（案）について協議がなされました。2年連続全国大会に出場した硬式野球部への支援助成については、同窓会が一部負担することで了承。前年度からの懸案事項であった奨学金については、貸与条件等の具体案が示され、承認を求めたところ全会一致で可決されました。また、「第一回還暦同期会」や「同窓会オリジナルグッズの制作」などの新規事業が提案され、積極的に推進することが決定しました。
最後に小関理事より、今後の仙台大学同窓会の発展を祈念する挨拶があり、無事に閉会されました。引き続き行われた懇親会では、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、吉田龍哉事務局長も出席。和やかな雰囲気の中、同窓生相互の交流が深められ、盛況のうちに閉会となりました。

平成27年度 仙台大学同窓生の「第16回校長職就任祝賀会」並びに「第5回宮城県・仙台市新規採用教員激励会」を開催

挨拶する熊谷校長

挨拶する新規採用の高橋教諭

7月25日（土）、ＫＫＲホテル仙台で、平成27年度仙台大学同窓生の「第16回校長職就任祝賀会」並びに「第5回宮城県・仙台市新規採用教員激励会」が開催され、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長はじめ同窓生や本学関係者約80名が出席しました。

今回校長職に就任されたのは、登米市立津山中学校の熊谷良校長（第10回生）。また、宮城県・仙台市に新規採用された教諭は、築館高校の高橋佳奈教諭（第33回）ら29名。

熊谷校長からは、大学時代のエピソードや校長として新たな気持ちで学校経営に取り組んでいくとの決意が述べられ、また、新規採用された教諭の方々からは、喜びの言葉や、仙台大学出身者としての自覚・誇りを持って仕事に臨みたいなどの抱負が語られました。

本学の青沼一民教職支援センター長（元仙台市教育長）や太田四郎教授（元宮城県第二女子高校校長）らも登壇され、校長就任者及び新規採用教員に対し、激励の言葉を述べて会場を盛り上げました。

公益財団法人 江頭ホスピタリティ事業振興財団の報告

去る７月１４日(火)、公益財団法人 江頭ホスピタリティ事業振興財団の事務局長である宮浦恭子氏が本学を訪れ阿部学長と懇談をおこなった。江頭ホスピタリティ事業振興財団は〝ホスピタリティ産業〟の発展を通じて『ホスピタリティ』という概念が広く社会全体に定着し、多くの方々が健康で心豊かな生活を送ることができることを目的に活動する公益財団法人で、ホスピタリティ産業にとって最も大切なのはそこに関係する「人」と捉え、ホスピタリティに興味を持つ学生、将来これらの産業に従事したいと考える学生、また食や食文化に興味を持つ学生に対して、人材育成の為の奨学金給付事業を行っている。

さらに東日本大震災以降、被災等により就学継続に困難な状況にある学生を対象とする「特別」奨学金給付事業も行っており、本学学生も2011年以降奨学生を数名ずつ採用していただいている経緯がある。本年度も、新規で２名（３年生１名、２年生１名）の学生が奨学金を受給している。

阿部学長との懇談後、学内を見学され宮浦事務局長自身も栄養大学系卒業で管理栄養士の資格を持っており、運動栄養学科の栄養サポート関係事業については、非常に興味を持たれ、さらには体育大学らしい取組み（ＡＴ関係、トレーニング施設関係そして栄養関係、さらにはスポーツの映像・分析などの関係を上手く組み合わせている取組・環境）には感心していた。

同日、午後には仙台市内のレストランにおいて、江頭ホスピタリティ事業振興財団から奨学金の支援を受けている東北地方の学生が一堂に会し懇親会が行われた。平成２７年度の受給学生は全国で６６名、東北地方では半数の３３名。

内、懇親会出席学生は本学の２名も入れて１６名で、近況報告やら新規奨学生の紹介等がおこなわれ、提供されたお料理(フルコース)を頂くと共に、他大学に通う学生達（奨学生仲間達）と和気合いあいと過ごした。

＜報　告：学生課長　川村　昭宏＞

佐伯洋昌元教授が教職47年を振り返る本「なでしこ」を発行

平成23年3月に本学を退職され、平成25年11月に「瑞宝双光章」を受章された佐伯洋昌元仙台大学教授が、教職47年を振り返る本「なでしこ」を発行されました。

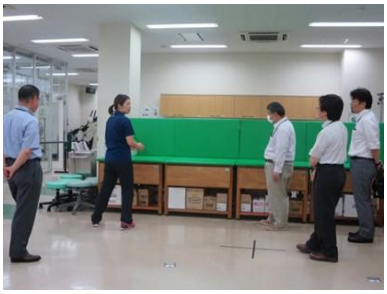
広報室で「なでしこ」を１部保管しておりますので、閲覧を希望される方は、広報室まで申し出て下さい。

平成27年度新任者紹介 挨拶(平成27年7月1日付)

内野 洋材 新助手（ＡＴ）

７月１日より、新助手として採用頂きました内野洋材（うちの・ひろき）と申します。アメリカでNATA-ATCの資格を取得後、アメリカンフットボールやバスケットボールのチームで働いておりました。初めての大学職員としての勤務となりますので、不慣れなことも多くあるかと思いますが、皆様のご教示を受け賜りながら全身全霊をもって本学に貢献できるよう努めて参ります。また、以前ハワイ大学に学生として籍を置かせていただいたこともあるので、同大学と密接な関係を持つ仙台大学で働かせていただけることを大変光栄に思います。両校のアスレティックトレーニング分野における更なる発展の一助となれるよう頑張ります。勤務地は船岡ATルームとなります。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

リコーインダストリー（株） 仙台大学を見学



7月28日（火）リコーインダストリー株式会社 安全衛生委員会の8名が学内見学をされました。リコーインダストリーとは平成24年に「社員の生活習慣改善」を目的に契約を結び、レクリエーションやメンタルヘルス等の教室を行ってまいりましたが、今回「フィジカルイベントの更なる向上を目指し、仙台大学がどのような技術やノウハウを持ち、又、支援を頂けるのか見学を通し検討したい」との要望を受け、学内見学を開催する運びとなりました。当日は、体力測定室や高圧高酸素室を見学され又、ATルームでは、鈴木のぞみ新助手、トレーニングセンターでは、白坂牧人新助手から施設等の説明を頂きました。参加した皆さんは、本学の充実した施設に驚かれ、色々な取り組みに対しても大変興味を持って頂けました。

その後、本学の実行委員長である弓田講師を交え打ち合わせを行い、今後とも協力し事業を推進して行く事を確認しました。

＜報　告：スポーツ健康科学研究実践機構
石川　美香＞

栄養士から管理栄養士への道筋・・・その一事例

全栄施協月報第658号掲載（平成27年7月25日）発行

想　い

栄養士から管理栄養士への道筋　・・・　その一事例

仙台大学理事長
理　事　　朴　澤　　泰　治

この度、全栄施協月報「想い」への執筆のご依頼を頂戴しましたので、地方の四年制小規模私立大学の運営に携わっている身として、設置している栄養士養成施設における人材育成に関し、日頃、「想っている」ことを書かせて頂こうと、先ずは、全国栄養士養成施設協会事務局に四年制大学における栄養士養成の現状を確認してみました。

執筆時点では、四年制大学で栄養士養成を実施しているのは全国で１８大学に過ぎないこと、そのうち、何らかのかたちで管理栄養士養成施設を併設している大学は１４大学に上り、栄養士養成施設のみの設置は４大学だけであること、その４つの大学は国立・私立がそれぞれ２大学となっていること、所在は東北に２大学、関東と九州・沖縄にそれぞれ１大学であること、男女共学の大学が３大学、女子学生のみの大学が１大学となっていること、ちなみに１８大学のうち１２大学が女子学生のみの大学であること、などを改めて確認しました。

これからすれば、協会理事としての執筆という位置づけでありますが、実質的には、正会員数２６３施設（２７年３月末現在）のうちの４大学、構成比で１．５％弱の立場からの「想い」、ということになってしまいます。

また、幣職の所属大学はスポーツ健康科学系を教育研究領域としておりますが、栄養士養成を実施している１８大学のうち、管理栄養士養成と栄養士養成とをそれぞれ学部を異にして実施され、具体的な内容は後述しますが、栄養士養成施設を併置されている学部・学科の人材育成理念が幣職の所属大学と類似するスポーツ健康科学系に立脚しておられるという大学も、一つ存在していることを確認しました。この観点から言えば、２６３施設のうちの僅か２施設の立場からの協会理事の「想い」、ということにもなってしまいます。

しかし、栄養士という名称独占の国家資格付与を付託されているという共通項のなかで、たとえ２施設であっても複数の養成施設が同一方向の理念の下に人材育成という責務を遂行しているという事実を踏まえると、以下に記します「想い」は、人口減少高齢社会が到来した日本をこれから担わなければならない人材の育成ということにおいて、必然となる多角的・多面的な視点に立った育成方策の推進ということに対して、議論の何らかの糸口になるのではないかと考えております。そして、担い手が少なくなる一方、という現状の日本社会におけるこの種の育成方策の推進という視点は、全養成施設の共通認識となり得るものであり、この意味では、より多くの立場を踏まえた協会理事の「想い」にも止揚されるのではないか、と期待している次第でもあります。

「想い」は、栄養士の役割と、これを踏まえた管理栄養士への道筋についてでありまして、具体的な事柄としては、四年制大学で栄養士資格を取得した卒業生が、大学卒業後の「１年間」と見做される実務経験により、管理栄養士試験の受験資格を取得するという、「現行制度の維持」であります。

幣職の所属大学と同一方向の理念の下にスポーツ健康科学系に立脚した栄養士養成を実施されている他の施設（大学）は、その人材育成の理念や背景・目的などを明快に公表しておられますので、先ず、同大学のＨＰの記載内容をお借りして、少し長くなりますが、その理念内容を紹介すべく引用させて頂きます。

人材育成の方向として、「栄養学をベースに、運動や健康づくりに関連する知識を習得し、さまざまな現場で実習を重ねて、将来、スポーツ栄養士として活躍できる実践力を養います。」とされ、その背景や目的として、「競技者、監督、コーチ、トレーナー、競技団体などのスポーツの現場から、競技者の栄養・食事に関する自己管理能力を高めるための栄養教育や食環境の整備等にいたるまで、栄養サポートに対するニーズは高まっています。これらは、日本代表といったトップアスリートからジュニア層、健康増進を目的としたスポーツ愛好家まで多様な層で求められています。チームや団体内においては、チーム医療と同様、監督、コーチ、トレーナー、医・科学の各専門分野のスタッフ（スポーツドクター、運動生理学、バイオメカニクス、スポーツ心理学など）と連携し、栄養面からの専門的なサポートを行うことが必要です。公認スポーツ栄養士は、これらの現場のニーズに的確に応えることのできるスポーツ栄養の専門家であり、公益社団法人日本栄養士会および公益財団法人日本体育協会の共同認定による資格です。」と示しておられます。言うまでもなく、２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックの開催国としても、今後、重要な分野であります。

さて、ここで、「想い」の焦点は、「公認スポーツ栄養士」であります。

実は「公認スポーツ栄養士」は、現状では、管理栄養士を対象とする認定資格となっております。

「健康」の三要素として「運動」「栄養」「休養」が挙げられますが、スポーツ健康科学系四年制大学の栄養士養成施設では、２年間の修学で取得できる栄養士資格に着眼し、名称独占の国家資格保有者に相応しい栄養士養成教育を実施するとともに、４年間という就学期間を活用し、一日でも早く「スポーツ」という事象を理解し、そのうえで運動・スポーツ分野などに就業してもらうため、スポーツ健康科学に関する豊富な知識技術の習得を促しております。

栄養士法は「栄養士の名称を用いて栄養の指導に従事することを業とする者」を「栄養士」と云う、としておりますが、さて、「公認スポーツ栄養士」は、栄養指導面のプロである栄養士であると同時にスポーツ事象にも通じた栄養士ではなく、何故、管理栄養士でなければならないのでしょうか。

カリキュラム上では、平成１４年４月１日施行の改正栄養士法を踏まえ、管理栄養士養成では、「専門基礎分野」としての「社会・環境（人間や生活）と健康」、「人体の構造と機能，疾病の成り立ち」、「食べ物と健康」の各教育分野に加え、「専門分野」としての「基礎栄養学」、「応用栄養学」、「臨床栄養学」など臨床栄養を中心とした教育分野が拡充される一方、栄養士養成でも、「社会生活と健康」、「人体の構造と機能」、「食品と衛生」、「栄養と健康」、「栄養の指導」、「給食の運営」といった栄養職種に関するプロとしての各面の教育が施されることになっており、栄養士は、運動・スポーツ分野においても十分に就業できるような栄養面に関する資質を備えているものと考えられます。

「公認スポーツ栄養士」は、行政的には厚生労働省と文部科学省の共管的意味合いの認定資格と考えられますが、結論的に考えれば、これらからしても、なお「管理栄養士」でなければならないということであれば、これは制度的枠組みの事柄である、と考えることが得心的姿勢ということになります。

そこで、いよいよ「想い」の具体的な事柄である上述の「現行制度の維持」ということになります。四年制大学で栄養士資格を取得した卒業生が、卒業の年の翌年の３月には管理栄養士試験を受験できる、すなわち、大学入学後５年で受験資格が得られるという現行制度の維持であります。

一日も早く「公認スポーツ栄養士」として、オリンピック開催という国家施策に寄与したい、という学生の声は多く聞こえてきます。その実現のためには一日も早く管理栄養士資格を取得しなければならず、資格取得の機会を一日も早く得たいという、大学４年間の就学期間を活用し名称独占の国家資格たる栄養士資格を保有すると同時にスポーツ健康科学に関する豊富な知識技術を保有する、次代を担う世代の声であります。一カ月にも満たない期間を対象とする試験期日の変更が実質的には１年間という膨大な時間を更に付加する結果となるという制度変更は、オリンピック開催という国家施策の共同遂行という視点から見ても、得策とは言いにくいものと考えられます。

栄養士法では、栄養面の高度なプロとしての管理栄養士の職務について、①傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、②個人の身体の状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導、③特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体の状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導、等を業として行う、としております。

このうちの②の職務については、オリンピック代表選手に対する栄養指導などを含め、運動・スポーツ分野などにおける就業がその典型的な職務例と捉えることもできると考えます。

このような観点からも、また、人口減少高齢社会の日本において、希少価値となった次代を担う世代に対する多角的・多面的な視点に立った人材育成方策の推進の観点からも、栄養士から管理栄養士への道筋において、「オリンピック開催その他、時代の要請に間に合うように一日も早く管理栄養士に」という声に適っているところであり、管理栄養士試験の受験に関する「現行制度」は、今後も維持されなければならない、と常々「想う」次第であります。

そして、この「想い」は、より多くの立場を踏まえた協会理事としての「想い」に止揚していると「想いたい」ところであります。

男子サッカー部、DF榎本滉大選手がベガルタ仙台の特別指定選手に

6月24日（水）、本学男子サッカー部のDF榎本滉大（えのもとこうだい）選手（体育学科3年－群馬・共愛学園高校出身／身長183cm・体重73kg）がベガルタ仙台の特別指定選手に承認されました。

特別指定選手とは、大学に所属しながら、Ｊリーグのクラブにも登録され、公式戦に出場できる選手。本学男子サッカー部からは、これまでも、OB細川淳矢選手（現Ｊ２水戸／平成19年体育学科卒－埼玉・武南高校出身）・OB奥埜博亮選手（現Ｊ１仙台／平成24年体育学科卒－宮城・明成高校出身）・OB蜂須賀孝治選手（現Ｊ１仙台／平成25年体育学科卒－群馬・桐生第一高校出身）らが本学在学中に特別指定を受け、卒業後はＪリーグ入りを果たしました。

榎本選手に今の心境や今後の抱負などについてお話を伺いました。

今の心境は―

小さい頃からＪリーグでプレーすることが夢だったので、その目標に一歩近づけたことはとても嬉しいです。これまでご指導・応援・支えて下さった方々への感謝の気持ちを忘れず、一生懸命努力し、日々成長していきたいと思います。

課題は―

プロは全てのスピードが速いので、慣れるのに必死です。また、球際で当たり負けするなどフィジカル面での差を感じています。筋力トレーニングでフィジカル面を強化し、体力アップを図りたいと思います。食事は常に気をつかっていますが、さらにバランスの良い食事を心がけていきたいです。

ベガルタ仙台の特別指定選手に承認された榎本選手＝仙台大学サッカー場

今後の抱負は―

まずはベンチ入りして、早く試合に関わっていきたいです。チーム（ベガルタ仙台）も自分をチームの一員として認めてくれているので、自信を持って積極的にプレーしていきたいです。

あくまで自分はまだ大学生です。ベガルタ仙台で経験してきたことを仙台大学男子サッカー部に少しでも還元できるよう努めていきたいと思います。

河北レガッタ―男子エイト仙台大Ａが制す

男子エイトを制した仙台大Ａ＝宮城県長沼ボート場

7月12日（日）、気温30℃を超える暑さの中、宮城県長沼ボート場（国際Ａ級公認コース）で「第２４回河北レガッタ」の決勝が行なわれ、一般・大学男子エイトを仙台大Ａが６分０３秒２７で制しました。２位は東北大、３位は仙台大Ｂ。仙台大は、同種目で４年連続優勝を果たしました。

本学漕艇部（男子）の林緩哉（はやしかんや）主将（体育学科4年―島根・松江東高校出身）は、「優勝は素直に嬉しいです。一段とレベルの高いレースが繰り広げられるインカレ（８月）に向けて、ローイングテクニックとクルーの一体感を高めていきたいです。インカレでは、表彰台を目指します」と力強く話しました。

今大会には、柴田町ボート協会の皆様が応援に駆け付け、大きな声援を送って下さいました。同協会の児玉裕雄会長は、「一糸乱れぬ応援ができた。男子エイトで２艇が出場できるという仙台大の選手層の厚さを感じる。８月のインカレにも必ず応援に行き、選手たちを後押ししたい」と激励の言葉を話されました。

引き続き、仙台大学漕艇部への熱い応援をよろしくお願い致します。

軟式野球部、2年連続4度目の全国へ―上位進出を目指す

全国大会に向け、打撃練習に励む橋場主将
＝並松運動場（柴田町船岡）

全日本大学軟式野球東北地区代表決定戦が6月11日（木）仙台市民球場（仙台市宮城野区）で行なわれ、本学が８－７で東北大学に逆転勝ちし、２年連続４度目の優勝を飾りました。

本学は、「第38回全日本大学軟式野球選手権大会」【8月15日（土）～19日（水）：長野オリンピックスタジアム他】への出場を決め、初戦は白鷗大学（北関東）【8月15日（土）11時30分～中野市営野球場】と対戦することになりました。

チームを牽引する橋場万寿男（はしばますお）主将（体育学科3年―北海道・北海学園札幌高校出身）は、「エース櫛引哲生（くしびきてつお）（体育学科3年―青森・大湊高校出身）ら投手陣の出来が勝敗を分ける。継投を含めて投手陣が踏ん張り、いかに失点を少なくするかがポイントになる。打撃は４番・田中拳輔（たなかけんすけ）（健康福祉学科3年―福島・田村高校出身）が勝負強いバッティングでチームを引っ張っている」「今回で４度目の全国。初勝利を必ず掴み取り、上位進出を目指す」と力強く話し、全国大会での活躍を誓いました。

仙台大学軟式野球部への熱い応援をよろしくお願い致します。

陸上競技部、佐々木琢磨選手（健康福祉学科4年）が「日本聴覚障害者陸上選手権」の100mと200mを自己新で制す

練習に取り組む佐々木選手＝仙台大学陸上競技場

7月18日（土）、正田醤油スタジアム群馬（群馬県前橋市）で、「第12回日本聴覚障害者陸上競技選手権大会」が行なわれました。本学陸上競技部の佐々木琢磨（ささきたくま）選手（健康福祉学科4年―岩手・盛岡聴覚支援学校出身）が100mと200mに出場。2種目で自己ベストを更新（100m 10秒88／200m22秒51）し、見事優勝を果たしました。佐々木選手は、５歳頃から両耳に重度の聴覚障害を持つアスリート。普段は、手話と口話の２つを用いてコミュニケーションをとっています。大会の感想と今後の課題、抱負について佐々木選手にお話を聞きました。

優勝した時の心境は―

３年ぶりに自己ベストを更新することができ、とても嬉しかったです。大学１年の頃から怪我が多く、自分が思っているように練習できない時期もありましたが、諦めずに競技を続けてきた成果だと思います。

課題は―

５０mからの走りに課題が残りました。左足の地面を蹴る力が弱いので、右足への負担が大きく、疲れが溜まりやすいです。左右の足の使い方のバランスを意識しながら、効率の良い練習を心がけていきたいと思います。

今後の抱負は―

「第49回全国ろうあ者体育大会in京都」（9月19日・20日）で、10秒6を出したいです。また、「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」（10月1日～11日／台湾・台北）に出場し、好成績を収められるよう練習に励みたいと思います。応援よろしくお願いします。

女子サッカー部、加賀孝子主将と須永愛海選手がユニバで銅メダルを獲得

加賀主将と須永選手のユニバ銅メダルを喜ぶ女子サッカー部
＝仙台大学サッカー場

“大学生の五輪”と言われる「ユニバーシード競技大会」が韓国･光州で開催され、女子サッカー日本代表チームは３位決定戦（7月12日）でカナダを５－０で破り、見事銅メダルを獲得しました。

本学から同大会に出場したMF加賀孝子（かがこうこ）主将（ユニバ女子サッカー日本代表主将）【写真前列右から３人目】（スポーツ情報マスメディア学科4年－ジェフユナイテッド市原・千葉レディース出身－宮城・聖和学園高校出身）とDF須永愛海（すながまなみ）選手【写真前列右から４人目】（体育学科3年－JFAアカデミー福島出身）は、全６試合に先発出場を果たし、得点を決めるなどの活躍を見せ、銅メダル獲得に大きく貢献しました。

「メダルを獲れて良かったですが、金を狙っていたので悔しい。ラストパスなど一つひとつのプレーの質を高めていきたい。最後のインカレでは、満足のいく結果を残したい」（加賀主将）。「嬉しさ半分。悔しさ半分。１対１で負けないフィジカルの強化とプレーの精度を高める必要性を感じた。ユニバの経験をチーム（仙台大）に生かしていきたい」（須永選手）。

同大会のコーチとして帯同した本学女子サッカー部の黒澤尚監督は、「二人には、プレーだけではなく人間性やコミュニケーション力の重要性をチームに示すことによって、自主性・自己決定力の高い組織になっていくような相乗効果を期待している」と話しました。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 112／ 2015 August
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

仙台大学船岡南テニスコート開所式及び元テニスプレーヤー福井烈氏によるテニス講座を開催

仙台大学船岡南テニスコート開所式での集合写真

本学では、船岡南にテニスコート（ハードコート３面・砂入人工芝コート２面の計５面）を建設しました。東北・北海道唯一の体育系大学として、世界水準のテニスコートを学生に提供することにより、競技力向上、グローバル感覚が身についた指導者を養成することを目指しています。

8月8日（土）に執り行なわれた「仙台大学船岡南テニスコート」開所式には、本学の朴澤泰治理事長・阿部芳吉学長や、来賓として柴田町の滝口茂町長、日本オリンピック委員会常務理事の福井烈氏（全日本テニス選手権シングルス優勝7回）らがご出席下さいました。

「体育系大学の施設として、テニスの普及・振興、指導者養成や競技力向上に有効活用していきたい」（朴澤理事長）。「テニスコートは地域にも開放し、テニスを通してさらに町が元気になるよう貢献していきたい」（阿部学長）。「全米オープンと同じ仕様のテニスコートを完成され、驚いている。このコートから、世界に羽ばたく選手が生まれることを期待している」（滝口町長）。「国際競技力向上を考えると、このような世界基準であるコートが必要。テニスから素晴らしい発信をしてほしい。そのためには強くなることが肝要」（福井氏）とそれぞれ、新しいテニスコートに対する思いを話されました。

日本プロテニス協会理事の松岡修造氏から届いた「仙台大学船岡南テニスコートご開校おめでとうございます。この情熱的なテニスコートが、仙台大学の皆さんにとって、そして日本のテニスにとって、大きな力になることを願っています」と祝電が披露されると大きな歓声と拍手が沸き上がり、祝電文は早速掲示されました。

【２面に続く】

＜ 目 次 ＞

仙台大学船岡南テニスコート開所式及び元テニスプレーヤー福井烈氏によるテニス講座を開催	1
仙台大学の専門教養演習授業の記録（『女川を元気にする会』に参加して）	2
ベトナム保健省及びバックマイ病院の関係者が来校	3
第１回仙台大学心池会杯争奪剣道大会 第3回仙台大学心池会練成会	4
青梅慶友病院の在職OB・OGが集まり懇親を深めました！	5
学生の競技結果等	7

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u。ac。jp

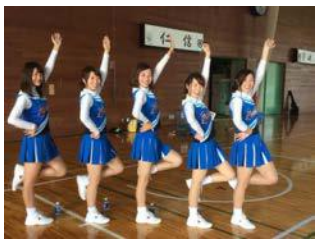
スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

開所式が終了後、福井氏によるテニスクリニックが行なわれ、本学硬式テニス部18名及びクラブ体験会に参加していた高校生８名の計25名が、日本トップレベルのプレーヤーから、情熱のこもった熱い指導を受けました。

硬式テニス部（女子）の坂祐希（さかゆうき）主将（運動栄養学科4年ー福島・須賀川桐陽高校出身）は「素晴らしい環境でプレーでき、モチベーションが一気に上がりました。東北のテニス王座一部リーグに昇格することが目標です。感謝の気持ちを忘れず、日々精進していきたいです」と話しました。

福井氏（左端）によるテニス講座の様子＝仙台大学船岡南テニスコート

仙台大学の専門教養演習授業の記録（『女川を元気にする会』に参加して）



８月１日空手道部８名、チアリーディング部５名の一行は、女川町で開催された『女川を元気にする会』イベントに参加してきました。

女川を元気にする会では、仙台大学、宮城教育大学、仙台市内の中学校長らが実行委員会を組織し、女川の方々との交流を通じて、震災体験を身近に感じると共に、復興への思いを共有することを目的として、過去３回のイベントを行ってまいりました。

今回のイベントは４回目の開催となり、仙台大学に加え、東北学院榴岡高校、仙台市内の西山、桜丘、郡山の三中学校、宮城教育大学が参加し、復興へ向けた思い・願いを自らの特技を生かし堂々と表現してまいりました。

空手道部は基本技の披露に始まり、型の演武、板割の披露、チアリーディングは軽快な音楽に合わせての楽しいドリルを展開しました。

駆けつけてくださった女川町民の方々は、学生の迫真の演技を、満面の笑顔で鑑賞されておりました。なかには目に涙を浮かべながら声援を送ってくださる方もいらっしゃいました。

学生たちは、応援を背に受けて日頃の練習の成果を十分に発揮できたと思います。

イベント終了後に、町の高台に上り津波到達点を確認すると、あまりの高さに学生の口からは驚嘆の声がこぼれました。たくさんの方々が津波にのまれた地点にある献花台に献花を行い、海に向かって手を合わせ黙祷してきました。

学生一人一人は女川の皆様と大震災から立ち直る思いを共有し、共助の精神を培うことが出来たのではないかと思います。私たちが行った支援はほんの小さなものかもしれませんが、優しさ・明るさ・感動をさしのべることが出来たとすれば幸いです。

【空手道部主将　仙台大学３年
橋本太輔さんのコメント】

今回の私たちの活動で、少しでも被災地の方々に笑顔を届けることができて良かったです。またこれからもこのような活動を継続し、皆様に元気になって頂けるよう頑張っていきたいと思います。

【チアリーディング部主将　仙台大学３年
梅本千春さんのコメント】

震災から４年たちましたが、復興は未だ不十分であること、でも被災地の人たちは、ものすごく頑張っているのだと肌で感じることができました。

＜報　告：空手道部　部長　郡山 孝幸＞

オープンキャンパス2016

8月8日（土）、「仙台大学オープンキャンパス2016」を実施し、970名（生徒680名・同伴者290名）の方々にご来場頂きました。

オープニングセレモニーでは、小堀祥（こぼりしょう）さん（体育学科4年－栃木・作新学院高校出身）と宍戸香菜子（ししどかなこ）さん（健康福祉学科3年－仙台東高校出身）による元気溢れる司会で、会場の高校生たちを盛り上げてくれました。また、５学科の体験・紹介コーナーの他に、ミニ講座「教師になろう！」、ボブスレー競技でオリンピックに５大会出場のOB鈴木寛（すずきひろし）さん（平成8年体育学科卒）・ラグビーのキャノンイーグルスでアナリストとして活躍中のOB吉田享（よしだとおる）さん（平成23年スポーツ情報マスメディア学科卒）をお招きし、進路紹介「スポーツ選手を支える仕事」、小論文対策講座、個別入試相談会、仙台大学とオリンピックに・プロスポーツに関する展示会などを行ない、本学についてより興味を持って頂けるよう努めました。

【過去３年のオープンキャンパスの来場者数】

年 度	来場者数
2014	865名（生徒：606名, 同伴者：259名）
2013	1,060名（生徒：771名, 同伴者：289名）
2012	936名（生徒：712名, 同伴者：224名）

ベトナム保健省及びバックマイ病院の関係者が来校

ベトナム保健省及びバックマイ病院の関係者と本学関係者との集合写真
＝仙台大学Ａ棟２階大会議室

8月20日（木）、JICA草の根技術協力事業（ベトナムでの足こぎ車いすを利用したリハビリモデル開発及び、リハビリ人材育成プロジェクト）の一環として、ベトナム保健省及びバックマイ病院の関係者が来校しました。ベトナムの関係各位は、朴澤泰治理事長・学事顧問や同事業に携わっている関矢貴秋教授らに挨拶され、本学の施設見学を行ないました。その後、足こぎ車いすの研究を進めている関矢教授の講義と実習を受けられました。「大変有意義な時間が過ごせた」とバックマイ病院の関係者の皆様からお言葉を頂きました。

関矢教授から講義と実習を受けられている様子＝転倒予防実習室
写真提供：朴澤理事長

仙台大学開放講座「楽しい園芸」をグローバルな視点で考える

平成27年8月19日（水）宮城いきいき学園仙南校の学園生を対象に「仙台大学開放講座」が開催されました。宮城いきいき学園仙南校は平成24年より学内施設を使用して月に1~2回、講義や運動など様々な授業を行っています。

今回の開放講座では75名の方が当学の遠藤保雄教授の講話を聴講されました。

講話では地球温暖化の問題について、他人事ではなく、自分のこととして考えていただくために、世界や日本の現状を分かりやすくお話いただいたのち、学園生が普段から楽しんでいる「園芸」がCO2削減のために非常に重要であるとご説明いただきました。講話の終盤の質疑応答では、数人の方から質問を頂くなど参加者も真剣に地球温暖化について考えていただけたと感じました。講話が終了したのち、参加された方からは「もっと長くお話を聞きたかった」「非常に面白かった」とのお声を頂戴し、今回の講話が自分自身のこととしてグローバルな視点で環境問題を考えていただく良いきっかけ作りになったと思います。

＜報　告：スポーツ健康科学研究実践機構
加 藤　琢 磨＞

第１回仙台大学心池会杯争奪剣道大会 第３回仙台大学心池会練成会

仙台大学剣道部心池会（ＯＢ会）が主催する、中学生を対象とした練成会を昨年度まで行っていました。今年度は技術向上を目指し、中・高生を対象にＯＢ、ＯＧの指導する学校やチーム以外にも声をかけ、県内はもちろん、岩手県、山形県、福島県から３３０人以上の生徒に参加をしていただき、８月１日（土）、２日（日）の両日にわたり、大会と練成会を行いました。

当日は、気温３４度を超える猛暑日でしたが、会場となった第一体育館と第三体育館、船岡体育館では、気温を超える熱い戦いが繰り広げられました。試合後は、笑顔の子や、涙している子、仲間を思いやり支えている子、そんな姿を見て、この大会や練成会に参加した子供たちの中から、全国大会で活躍してくれる選手が出てくれるだろうと確信しました。

この大会と練成会を開催するにあたり、前日の夜遅く、そして２日間にわたる早朝より駐車場の係、案内受付、審判や飲み物等の準備や運営に積極的に協力してくれた在学生に感謝しています。

また、体育館借用にご尽力いただいた齋藤浩二先生、学食利用や大会運営に携わっていただいたＯＢ、ＯＧの皆様にも深く感謝しております。この場をかりて御礼申し上げます。

最後に、今後も心池会及び在学生が協力し合い、仙台大学剣道部が更に発展していけるよう、ご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

≪試合結果≫

◎中学男子

優　勝	草野中学校（福島県）
準優勝	桂昇舘（宮城県）
第３位	増田中学校Ｂ（宮城県）
	石越中学校（宮城県）

◎中学女子

優　勝	岩沼中学校Ａ（宮城県）
準優勝	梁川中学校Ａ（福島県）
第３位	逢隈中学校Ａ（宮城県）
	梁川中学校Ｂ（福島県）

◎高校男子

優　勝	米沢中央高校Ｂ（山形県）
準優勝	米沢中央高校Ａ（山形県）
第３位	白石高校（宮城県）
	専修大学北上高校（岩手県）

◎高校女子

優　勝	米沢中央高校Ａ（山形県）
準優勝	仙台第三高校（宮城県）
第３位	盛岡白百合学園高校（岩手県）
	米沢中央高校Ｂ（山形県）

＜寄　稿：仙台大学剣道部心池会
事務局　三浦　昇（平成10年体育学科卒）＞

青梅慶友病院の在職OB・OGが集まり懇親を深めました！

怪物ルーキーや俊足快打の三年生など，話題性に富んだ夏の甲子園大会が幕を下ろした8月20日，東京都西部に位置する青梅慶友病院に，朴澤泰治理事長から大塚太郎氏に宛てた温かいお手紙と共に「SENDAI UNIV.」のロゴが入ったポロシャツが届けられました。仙台大学卒業生に向けた朴澤理事長からのサプライズ・プレゼントです。その翌日の8月21日（金），青梅市の焼肉店に集まったのは「医療法人社団 慶成会」に在籍する34名。入店の際，一人ひとりに手渡されたポロシャツに全員が袖を通し，年齢や所属していた学科・部活動などは一切関係なく，学生時代の思い出や日常の仕事のことなどを語り合い，とても有意義な時間となりました。会の中で最も歓声が大きかったのは，遅れて来店した慶成会理事長である太郎氏が，私たちと同じポロシャツを着て入場したときだったでしょうか。「仙台大学の卒業生だけで焼肉店を貸し切ろう」という太郎氏の発令から2ヵ月，それが実現した瞬間でもありました。

慶成会という組織は1980年に開設された青梅慶友病院を中心に，高齢者専門の病院と関連事業を運営する医療法人です。開設翌年である1981年に小池和幸氏（体育学科11期卒，現仙台大学教授），1993年には草壁孝治氏（同13期卒，現青梅慶友病院レクリエーション科科長）が入職して以来，卒業生の採用は毎年途切れることなく続き，35年間で126名ものOB・OGが，社会人としての第一歩をここで踏み出しました。

仙台大学と慶成会の関係は，大学で教鞭をとっていらした故田中久子先生が，当法人の開設者である大塚宣夫氏（現慶成会会長）の義母であったことに始まります。「高齢者を対象とする病院に元気のいい若者を」という宣夫氏からの要請により，教員採用試験に合格するまで数年間のアルバイトとして，前出の小池氏が田中先生から勧められたことがきっかけでした。現在，法人全体の職員は約1,400名で，そのうち仙台大学卒業生は38名です。男性21名で女性は13名，年齢は22歳から55歳と幅広く，職種も介護職や医療専門職，そして事務職など多岐にわたっています。従来からOB・OGの活躍には定評があり，それぞれがそれぞれの立場で職責を果たすのはもちろんのこと，病院行事となれば裏方や盛り上げ役に徹し，さらには医療，看護・介護，そしてリハビリテーションといった専門分野での論文執筆や学会発表をこなしています。

今年の5月には，太郎氏が理事長就任後はじめて仙台大学を訪問しました。朴澤理事長はじめ，多くの大学職員の皆様から祖母にあたる田中先生のいろいろなエピソードを伺ったことで，幼少期の思い出と教育者としての田中先生のお姿を重ねる機会になったようです。さらに7月には朴澤理事長，阿部芳吉学長，大山さく子健康福祉学科長，小池教授，高崎義輝教授，笠原岳人准教授といった錚々たる方々に青梅までお越しいただき，卒業生の活躍ぶりを見ていただきました。今回，二度にわたって両理事長の会談が実現したことは，在籍する卒業生にとってはとても心強く，また実に誇らしい出来事であったことはいうまでもありません。このことを契機に，この度「仙台大学の卒業生だけで…」という運びになった次第です。普段，ごく数名で集まることはあっても，法人全体で，しかもオフィシャルなものとして卒業生が集うことは初めてでしたので，開始直後から大変な騒ぎになると予想していたのですが，意外なことに飲食もそこそこにテーブルごとで妙に品よく語り合っていました。しかし，開始から1時間半が過ぎた頃には緊張も解け，ようやくいつも通り飲んで語っての大騒ぎ。「仙台大学新卒の採用が3人以上だった年にはまたやろう」との太郎氏からの言葉に会場は大いに盛り上がり，まさに“宴”と呼ぶにふさわしい時間はあっという間に過ぎました。

一つの事業所に複数の卒業生が存在することは，公私の区別や組織への影響としてマイナスに見られることが多々ありますが，それはすべて先に在籍した“先輩”方の配慮のなさであり，それに気づかない“後輩”の責任でもあろうと思われます。幸運なことに，慶成会では職種や所属部署などが分かれていることに加え，事業所内すべての職員から評価されるといった仕組みがあることから，狎れあいのような部分は極めて少ないようです。また，評価の仕組み以外にも仙台大学で育まれた対人関係スキルと，“自分以外はすべてお客様”という慶成会の根底に流れるマインドが，とてもうまく融合しているようにも感じます。もちろんそこには，手探りで今の原型を構築された小池・草壁両氏をはじめとした諸先輩方，その方々を送り出していただいた田中先生，そして都度ご協力いただいている大学関係の皆様のおかげと心より感謝し，この誌面をお借りして御礼申し上げます。

ちなみに，来春仙台大学を卒業する学生5名に内定通知が出されました。2年連続で卒業生の集いが開催される可能性は濃厚と一同今から心待ちにしております。

＜寄　稿：医療法人社団 慶成会 青梅慶友病院
部長兼リハビリテーション室長　福田卓民
（昭和63年体育学科卒）＞

OB紹介・柴田町スポーツ振興課長　石上幸弘さん

インタビューで笑顔を見せる石上さん＝船岡公民館内

現在、本学の所在地である柴田町の役場に勤務している卒業生は、１１名（退職者等４名）。今回は、その内の一人であるOB石上幸弘さん（昭和57年体育学科卒）にインタビューを行ないました。石上さんは、平成27年4月1日付けで、課長職（スポーツ振興課長）に昇進されました。柴田町役場における本学卒業生の課長職昇進は、OB安部俊三さん（現柴田町議会議員／昭和47年体育学科卒）以来２人目です。

原点は柴田町民の笑顔

柴田町船岡公民館に伺い、石上さんへ柴田町役場に就職したきっかけや今後の抱負などについてお話しをお聞きしました。

Q1. 柴田町役場に就職したきっかけ―

仙台大学在学時は、「社会体育コース」に所属していました。当時、就職担当だった柔道の川村巌先生から「柴田町役場で社会体育分野の人材を探しているので、役場の採用試験を受けてみないか」と勧められました。大学時代、船橋出身の私は、槻木が柴田町にあることも判らず、町のことは全く知りませんでした。しかし、私のアパートの近くに住むおばさんから生卵を戴いたり、ごみの出し方を教えてもらったりするなど地域住民の皆様の優しさや、温かさを感じることは多かったです。当時は、学生たちを温かい目で見てくれていた時代だったと思います。地域のために何か役立ちたいという熱い思いをもって試験に臨み、採用試験に合格することができました。

Q2. 柴田町役場の仕事は―

役場の仕事は、デパートに置き換えることができると思っています。町に関する全てを何から何まで覚えなくてはなりません。例えば、「水道」・「税制」・「教育」・「環境」など人事異動がある度に、一から新しい仕事を覚えるのは大変です。４年間お世話になった柴田町に倍の恩返しがしたいと思って仕事をしてきましたが、その恩返しがいまだにできていないと思っています。逆に町民の皆様に大変お世話になっています。退職までには、町民の皆様から７０点くらいの合格点がもらえるよう頑張りたいと思っています。今後もきめ細かい町民サービスの提供に取り組み、町民の笑顔を見ることが何よりの幸せであり、私の原点です。

Q3. 課長になって心がけていることは―

私の発言が他の部署に影響を及ぼすこともあるので、同じ事を言うにも言い方や、言葉を選んで慎重に考えて話すように気をつけています。責任と権限がある程度与えられ、今まで以上に一生懸命働きたいと思います。

仙台大学と一緒になって行なう「トップアスリート育成事業（地域創生事業）」を成功させ、大学のためにも町のためにも貢献できれば嬉しいです。

Q4. 今後の抱負―

柴田町では「総合体育館」を建設する構想があります。町民に愛され、笑顔で利用できる施設になるよう協議を重ねていかなければなりません。

また、大学と連携して「総合型地域スポーツクラブ」を活性化していきたいと思います。退職まで４年と数カ月ですが、この２つのことに道筋を付けて取り組んでいきたいと思っています。

Q5. 後輩達へのメッセージ―

目標が夢に終わらないよう努力を重ねることが大事。チャンスは人に与えられますが、そのチャンスを生かすかどうかはその人次第です。あらゆることに興味関心をもって、新たな領域に挑戦する意欲と勇気を持ち続けてほしいと思います。

PROFILE

石上　幸弘（いしがみ　ゆきひろ）／柴田町スポーツ振興課長

昭和34年5月7日生まれ。A型。千葉県船橋市出身。
仙台大学体育学部体育学科卒。大学時代は、バレーボール部に所属。
趣味はラジオ体操とジョギング。好きな食べ物は（奥様が作った）煮物。
座右の銘「学問に王道なし」。
【職歴】昭和57年4月柴田町教育委員会社会教育課に配属。その後、槻木公民館・都市建設課・水道事業所・柴田町社会福祉協議会出向・船迫生涯学習センターなどを経て、現在に至る。

本学の佐藤久夫教授率いるバスケットボール男子の明成高校がインターハイ初優勝

写真提供：明成高校

8月3日（月）、全国高校総体（インターハイ）のバスケットボール男子決勝がハンナリーズアリーナ（京都府京都市）で行なわれ、本学の佐藤久夫教授率いる明成高校（宮城県）が桜丘高校（愛知県）を９２―６９で下し、初優勝を果たしました。

本学と姉妹校である明成高校は、「高大連携」の取り組みの一つとして、男子バスケットボール部の強化を行なっております。

引き続き、明成高校男子バスケットボール部への熱い応援をよろしくお願い致します。

会場であるハンナリーズアリーナには、本学の前若井彌一副学長【写真】（現：京都光華女子大学　副学長・こども教育学部　学部長）が、大変お世話になった本学の、姉妹校である明成高校男子バスケットインターハイの初優勝がかかった試合と知り、酷暑のなか昨日と今日の２日間、応援に駆け付けて下さったそうです。

優勝が決まった瞬間、若井先生は大学に電話を下さり「明成男子バスケットインターハイ初優勝おめでとう！やっぱ明成はすごいですね。いてもたってもいられずに応援に来たけれど昨日はお客さんがいっぱいで、パブリックビューイングにすら入れませんでした。今日も会場は満杯でしたが幸いパブリックビューイングで応援することができて本当に良かったです。関係者のみなさんに祝意をお伝えください」とおっしゃっていました。京都からの熱い声援が、明成の選手達に届いての初優勝。若井先生、誠にありがとうございました。

男子サッカー部、10年ぶり2回目の天皇杯出場へ

10年ぶり2回目の天皇杯出場を喜ぶ仙台大イレブン＝宮城県サッカー場

8月23日（日）、宮城県サッカー場で「第１９回宮城県サッカー選手権決勝　天皇杯サッカー宮城県代表決定戦」が行なわれ、本学男子サッカー部は「ＪＦＬ・ソニー仙台ＦＣ」と対戦。本学が３－１でソニー仙台ＦＣに逆転勝ちし、１０年ぶり２回目の天皇杯出場を決めました。

試合は、前半１９分にペナルティーキックで先制される苦しい展開。しかし、後半６分にコーナーキックからDF榎本滉大（えのもとこうだい）選手（ベガルタ仙台特別指定選手／体育学科３年－群馬・共栄学園高校出身）がヘディングシュートを決め、１－１の同点に追いつきました。また、後半２７分に蓮沼翔太（はすぬましょうた）は途中出場のMF蓮沼翔太選手（体育学科４年－柏レイソルユース出身）が技ありの右足シュートを決めて勝ち越しに成功。さらに、後半４０分にはFW川島章示（かわしましょうじ）選手（スポーツ情報マスメディア学科３年－柏レイソルユース出身）が落ち着いてペナルティーキックで追加点を決め、ソニー仙台ＦＣを突き放しました。

試合終了後、本学男子サッカー部の吉井秀邦監督は「準決勝では東北社会人リーグ王者のコバルト―レ女川に勝利し、決勝ではＪＦＬセカンドステージ負けなしのソニー仙台に勝利できたことは自信になる。最後まで選手たちが粘り強く戦ってくれた。天皇杯では、宮城県の代表として１勝し、２回戦で是非ベガルタ仙台と対戦したい」。２点目のゴールを決めた蓮沼選手（同）は「何が何でも結果を残そうと思っていました。結果を残せてよかったです。ファーストタッチがうまく決まって、ゴールに繋がったと思います」と話しました。

硬式野球部が楽天二軍と交流戦―馬場投手が好投

仙台大学硬式野球部と楽天二軍との交流戦の様子
＝楽天Koboスタジアム宮城

8月25日（火）、本学硬式野球部は「楽天Koboスタジアム宮城」で東北楽天ゴールデンイーグルスの二軍と交流戦を行ない、０－９で敗れました。

試合は、先発・馬場皐輔（ばばこうすけ）投手【写真下】（体育学科2年－仙台育英学園高校出身）が６回０／３を被安打２、自責点２に抑える好投を見せました。馬場投手は、７回無死二、三塁のピンチを招いたところで降板しましたが、大きな自信と経験を得ることができました。

天皇杯サッカー１回戦・劇的ゴールで初戦突破―2回戦はJ1ベガルタ仙台に挑戦

劇的な決勝点を決め喜ぶDF山田選手（赤10：左端）
＝八戸市東運動公園陸上競技場

天皇杯全日本サッカー選手権に１０年ぶり２回目の出場となった仙台大学（宮城県代表）は、8月30日（日）、１回戦に臨みました。相手は、ＪＦＬファーストステージ優勝のヴァンラーレ八戸（ＪＦＬシード）。０－０で迎えた後半アディショナルタイムに本学のDF山田満夫（やまだみつお）選手（体育学科2年－Ｊ１松本山雅－北海道・帯広北高校出身）が決勝ゴールを決め、１－０で見事勝利。仙台大学は２回戦へと駒を進めました。２回戦の相手は、チームが目標に掲げていたOB奥埜博亮選手（平成24年体育学科卒）・OB蜂須賀孝治選手（平成25年体育学科卒）が在籍するＪ１ベガルタ仙台との対戦です。

劇的な決勝弾を決めたDF山田選手（同）は「ゴールを絶対決めるという強い気持ちで左足を思い切り振り抜きました。チームの勝利に貢献できたことが最高に嬉しいです。仙台大学サッカー部出身でベガルタ仙台の奥埜さんと蜂須賀さんとの対戦がすごく楽しみです。やるからには、チーム一丸となって結果にもこだわりたいです」と必勝を誓いました。

天皇杯２回戦は、J1ベガルタ仙台【日時：９月６日（日）１５時～、場所：ユアテックスタジアム仙台】に挑みます。引き続き、仙台大学男子サッカー部への温かいご声援をよろしくお願い致します。

阿部学長（中央）と初戦突破を喜ぶ仙台大イレブンら

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 113／ 2015 September
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

中国　遼寧省　瀋陽師範大学への出張報告

朴澤理事長と賈玉明副書記（右）

平成27年9月23日からの5日間、中国遼寧省の瀋陽師範大学と国際交流に関する打合せを行ってまいりました。当大学と仙台大学とは、平成20年に国際交流に関する協定を締結しており、今回は、学部学生の相互交流（留学）の更なる拡大、及び新たなる共同研究の可能性検討、幼児体育に関する意見交換について話合いがもたれました。

１）学生の相互交流（留学）

仙台大学から瀋陽師範大学への留学生派遣については中国武術学習を中心としたプログラムを、先方から仙台大学への留学生派遣については日本語・日本文化習得を中心としたプログラムを、人数枠を拡大する方向で検討していくことになりました。

２）共同研究

現在、仙台大学と中国青海省体育科学研究所で進めている研究の一部をベースに、仙台大学と瀋陽師範大学とで新たなテーマを検討することとしました。

３）幼児体育

先方の付属幼稚園（園児数330人）の見学を行い、幼児体育に関する意見交換を行いました。

＜　目　次　＞

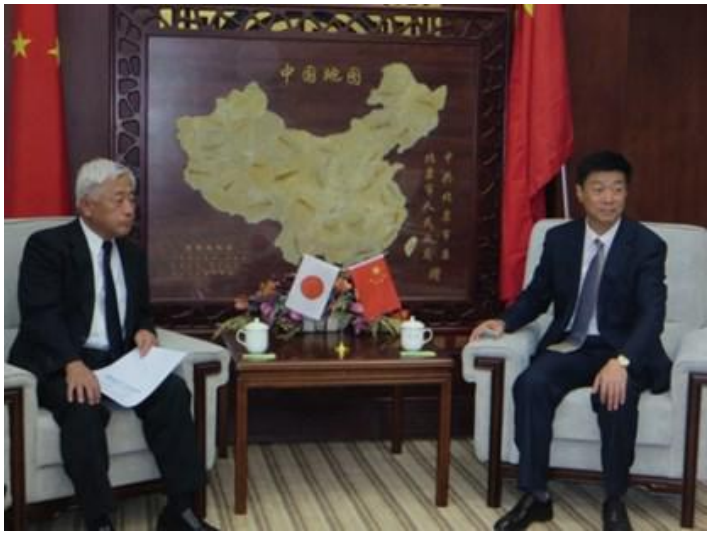
中国　遼寧省　瀋陽師範大学への出張報告	1
「大和証券福祉財団」から助成金を授与―仙台大学災害ボランティア活動	2
第21回ハワイ大学アスレティックトレーナー研修修了	3
山の厳しさと優しさを学んだキャンプ実習	4
高校生のための仙台大学「教師塾」の実施	5
驚き、大学の治安確保に活躍する大学警察！遠藤教授のスタンフォード大学探訪	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL　0224-55-1802
FAX　0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u。ac。jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～



朴澤理事長と林群学長（右）

朴澤理事長と趙大宇前学長（右）

尚、瀋陽師範大学の贾 玉明 副書記は、10月29日（木）に国際交流促進に関する合意書締結のため、本学に来学される予定です。また、9月14日～9月27日の2週間、仙台大学現代武道学科から2名の学生が瀋陽師範大学へ短期留学しております。瀋陽師範大学への今回の留学は仙台大学初の事業であり、斎藤現代武道学科長はじめ、荒井国際交流センター長、事業戦略室等の関連教職員のご尽力と、前向きで貪欲に未知なるものを吸収しようとする学生の努力により達成されたものです。いずれこの報告は10月末のマスリーレポートで馬佳濛講師より報告される予定です。

＜報　告：スポーツ健康科学研究実践機構　事務課長　近江康宏＞

「大和証券福祉財団」から助成金を授与―仙台大学災害ボランティア活動

「大和証券福祉財団」から目録と贈呈書が手渡された＝大和証券仙台支店

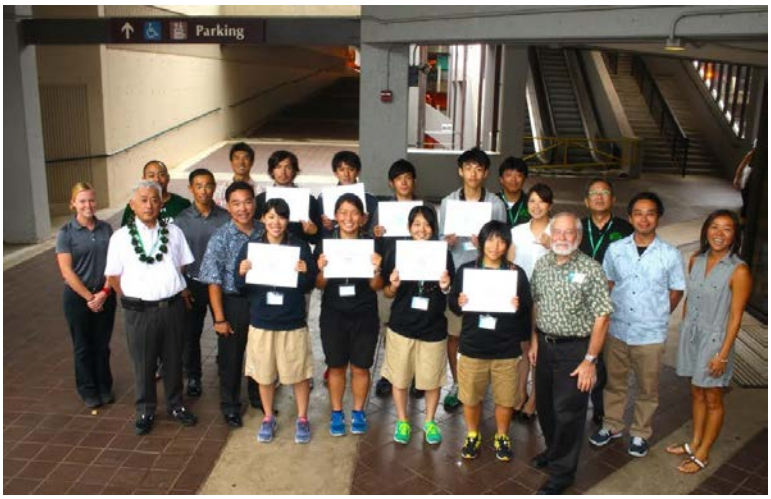
9月2日（水）、大和証券仙台支店（仙台市青葉区）において、東日本大震災の被災者支援のための継続的なボランティア活動を行なっている団体に対する「第５回災害時ボランティア活動助成」贈呈式が開催されました。この活動助成は、「大和証券福祉財団」が災害ボランティア助成として東日本大震災の発生した年に新設し、今年で5年目の事業。今年度は、全国66件の応募の中から審査を経て、本学を含め24団体が採択を受けました。贈呈式には、本学を代表して、仙台大学スポーツ科学研究実践機構の齋藤まり【写真中央】・柳澤麻里子【右から2人目】・松浦里紗【右端】の各新助手が出席し、大和証券仙台支店の田所俊弥支店長から目録（助成金50万円）と贈呈書が手渡されました。

贈呈式で審査に当った同財団の安藤雄太選考委員長【左から2人目】は、「皆さんが活動の中で積み上げてきた知恵と経験を活かして、今後も被災地の新たな支援の可能性を探ってほしい」と述べられました。贈呈式終了後には、授与された団体の活動紹介がなされ、本学の齋藤新助手は「助成金を活用させて頂き、さらに廃用症候群予防及びコミュニティーの再構築を目的とした運動教室や健康支援活動を発展させ継続して行なっていきたい」と話しました。

なお、本学は「第３回災害時ボランティア活動助成」（2013年度）でも同財団から活動助成を受け、今回で２回目となる活動助成金を授与されることになりました。

「第５回災害時ボランティア活動助成」贈呈式後の集合写真

第２１回ハワイ大学アスレティックトレーナー研修修了



修了証を手に記念撮影する参加学生たち＝ハワイ大学

平成２７年８月３０日～９月６日の期間において、ハワイ大学でアスレティックトレーナー（AT）研修アドバンスコースが行われた。AT研修アドバンスコースはベーシックコースでアメリカにおけるスポーツ文化などを学んだ後に、よりアスレティックトレーナーに興味がある学生向けのプログラムとなっている。研修の最大の魅力は献体解剖の見学実習である。既に全米公認アスレティックトレーナーの資格（NATABOC-ATC）を合格し、修士課程で学ぶハワイ大学の学生たちに混ぜてもらいながら、献体解剖の体験を行った。ハワイ大学医学部では、献体解剖で使用する献体は全て、生前の本人の協力意思を基に成り立っている。献体解剖の様子を見学する事も刺激的だが、各献体には生前の名前や職業、持病などが記されており、献体が提供されて初めて医学の勉強が成り立つという仕組みについても学ぶ事ができる。

今研修での新たな取り組みは、参加学生がハワイ大学学生寮に宿泊した事である。従来のハワイ研修ではホテルに宿泊していたが、コスト削減と現地学生との交流や留学模擬体験などの理由から寮滞在を実施した。ハワイ大学キャンパス内に所在するリンカーンホールはとてもきれいな建物で、良く管理が行き届いている。二人部屋が一泊約＄３５（￥４２００程度）ととても安価である。安全対策も講じられており、入口ではカードキーが無いと建物に入れないようになっている。何もかも提供されるホテルに滞在するよりは、大学内の施設に宿泊し、留学時と同様な体験をする事でとても良い経験となったのではないだろうか。

ATの専門的な内容だけに留まらず、海外留学で必須になる英語能力向上もこのプログラムの目的の一つである。２時間程度の英会話のレッスンが２度組み込まれており、さらに現地でATを目指す大学生との交流会も行った。英語の自己紹介や参加学生が準備してきた質問などをする機会の中で、同年代の学生と英語でコミュニケーションを図るというチャレンジを通し英語能力を向上するきっかけ作りも行った。日本人が持つ英語に対する苦手意識克服を目的としており、それが英会話講師の口癖である「English is EASY!!!」という言葉からもくみ取れる。

ハワイ大学のAT研修も今年で１２年２１回目となる。昨年度に調印されたハワイ大学教育学部KRS学科との提携により、このAT研修も大きく発展をしようとしている。以前と比べ、プログラムの担当者がNATABOC-ATCという事もあり本学参加学生の希望に合わせてプログラム内容も微調整してくださっている。この研修は、参加学生に対し、政府からの奨学金支給などもあり、かなり安価で有意義な体験が出来る。今後もより良いプログラムを構築出来るよう、一層ハワイ大学との連携を深めていきたい。

＜報 告：助 教　白幡恭子＞

山の厳しさと優しさを学んだキャンプ実習

平成２７年度の集中授業「キャンプ」が、宮城県白石市「南蔵王野営場（国立花山青少年自然の家管轄施設）」にて行われた。第一団は９月３日～６日、第二団は９月７日～１０日、それぞれ３泊４日の日程で実施された。実習生は、６～７名の男女学科部活混成班に振り分けられ、野外生活や沢登り、登山に取り組んだ。それぞれの班にはキャンプカウンセラーとして補助学生（本学３～４年生）が一人ずつつき、実習生と生活を共にしながら、野外活動の指導にあたった。

第一団は天気にも恵まれ、非常に快適なキャンプとなった。南蔵王野営場でキャンプをスタートさせてから今年で４年目となるが、最も天気がよかったと言える。何年も帯同している教員も、あれだけ登山で晴れたことはなかったと言ってよいくらい景色もよく、気持ちよく歩くことができた。しかしながら、活動時の怪我やハチ刺され、道迷いなどの野外活動特有のトラブルも少なからず発生したキャンプであった。その際は、実習生もスタッフも協力して問題解決にあたることができ、トラブルの時にどのように対応すればよいかを学ぶ機会にもなった。雨具などの装備不備者が一人もおらず、大きな怪我や事故もなく、すべてのプログラムも予定通り終えることができたことは、大きな成果であった。

第二団では一転、大雨のキャンプとなった。初日から、雨が降る中テントを濡らさないように設営することが求められ、どの班も苦戦を強いられた。２日目になると雨の生活にも慣れ、雨にも負けない体育大生らしい様子が見られるようになった。そして３日目の登山は、安全を考慮し、短縮コースで実施した。雨の中、どの班も仲間と協力しあい、水引入道（山頂）を目指した。山の厳しさに揉まれる中で、自分自身や仲間と向き合った実習生も多かっただろう。登山後は、雨の日の特別プログラム「カレーコンテスト」が行われ、かぼちゃを器代わりにしたドライカレーが優勝を飾った。最後の最後まで雨続きの第二団だったが、だからこそよく考えよく工夫し、仲間を思いやることができたのではないだろうか。

最後に、今回のキャンプ実習も、補助学生たちが大いに活躍してくれた。大学院生TAや、普段から野外活動に取り組んでいる４年生が中心となって結成された今年の補助学生チームは、過去４年の中で最もレベルが高く、キャンプ中にも様々な成長を見せてくれた。実習生にとってもよい経験ができるが、補助学生はさらに有意義な体験をできるのがキャンプ実習である。再来年、より多くの実習生が補助学生になってキャンプ実習に戻ってきてくれることを願っている。

＜記事・写真：岡田成弘講師提供＞

「放課後先生」開始式―教員志望の仙台大生を学校現場に派遣

「放課後先生」開始式の集合写真＝船岡小学校

9月7日（月）、柴田町立船岡小学校で「放課後先生」開始式が行なわれました。開始式には、本学からは阿部芳吉学長【写真前列中央】・青沼一民教授（教職支援センター長）【左から2人目】・久能和夫教授【左端】及び教員志望の仙台大生１０名が、柴田町の小中学校からは青田穣校長（船岡中学校長／柴田町校長会会長）【右から2人目】・鈴木均校長（船岡小学校長）【右端】が出席されました。

「放課後先生」の事業目的は、文化のまち・教育のまち「しばた」の教育資産（仙台大学）の活用を図り、児童生徒の学力や体力・運動スキル向上と仙台大学と柴田町の小中学校の交流を図ること。

柴田町の小中学校９校に教員志望の仙台大生が出向き、放課後を利用した児童生徒への学習支援を行なうことにより、体力・運動スキルの向上が見込まれます。また、仙台大生は、指導スキルの向上が期待されます。

阿部学長は「知・徳・体の三拍子揃った子どもたちを育成するために、仙台大学の力を結集してお手伝いをしたい。柴田町の特色ある教育の実現に向けて取り組んでいきたい」と話され、船岡小学校の鈴木校長は「仙台大生は学校現場の生の様子を肌で感じ、児童生徒との交流を深め、実践経験を積んでもらいたい。仙台大学とはWin Winの関係を構築したい」と述べられました。

教員志望の仙台大生を代表して、田中理沙（たなかりさ）さん（体育学科4年－青森南高校出身）は「今日集まった仙台大生は、教師になりたい気持ちが人一倍強い学生たちです。机上だけではなく、体育系大学の学生として、運動面でもお役に立てるよう努めたいと思います」と抱負を話しました。

なお、「放課後先生」は、柴田町の小中学校９校のうち、柴田小学校と船迫中学校は本年度当初から先行して実施しています。９月から船岡小学校を含む残り７校でも開始します。

高校生のための仙台大学「教師塾」の実施

学長講話

バレーボール実技指導

柔道実技指導

剣道実技指導

平成27年9月12日（土）9:00から15:00まで、「教師になろう」という高い志をもつ高校生に対し、その思いの実現に向けた教育活動を支援する目的で『高校生のための仙台大学「教師塾」』を開催しました。

当日は、明成高校や柴田高校など県内10校から36名の高校生の参加があり、午前に講義、午後に体育実技（バレーボール、剣道・柔道）を行いました。午前の講義は、阿部学長の「先生の魅力とは何か」と題した講話、山谷教授から『「教える」ってどんなこと』、志賀野教授から「教師になるには」と題した２つの講座を行いました。

教師の概念や魅力、教育の重要性、教師になるための資格など教員養成の現状等について幅広くお話しいただきました。午後は、川村学生課長がバレーボール、井上教授が剣道、仲田助教が柔道を各競技の基本や教員採用試験の実技試験の内容を取り入れて実施しました。当日は宮城県・仙台市の教員採用二次試験が実施されているというタイムリーな催しになり、実技の実施にあたっては、述べ11名の学生がボランティアで指導補助にあたっていただきました。また、お昼は学生食堂で教員や学生ボランティアと一緒に昼食懇談会を行い、仙台大学での生活の一端を経験していただきました。受講生からは、「教員への志向が高まった」、「教員の職務の一端を体験が体験できてよかった」などの感想が寄せられ、特に午後の体育実技においては、教員採用試験の実技試験の内容を取り入れて実施したため、高校生にとっては「普段体験できない貴重な取組みとなり、充実した一日であった」との感想を多数いただきました。

今後も、教職支援センターでは教職を志す高校生への支援の充実を図っていくこととしています。

＜報 告：仙台大学教職支援センター＞

カール･フォン･オシエツキー大学オルデンブルクとの交換留学生が来訪

左から荒井センター長・阿部学長・ピアさん・小松教授・渡邊室長
＝学長室

9月16日（水）、本学と国際交流協定を締結しているドイツのカール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクから、交換留学生のピア･カタリナ･フローベルクさん（人間科学部体育学科２年）が、荒井龍弥国際交流センター長及び小松恵一教授（国際交流センター委員・ドイツ担当）、渡邊一郎事業戦略室長と共に学長室を訪れました。ピアさんは、平成27年9月から平成28年3月までの半年間、学部の科目等履修生として学びます。

阿部芳吉学長は「早く仙台大学と日本の環境に慣れ、半年間有意義に過ごしてほしい」と挨拶。ピアさんは「日本文化と日本語を学びたいです。特に、日本人がスポーツをどのように教え・教えられ・訓練されているかを知りたいです。将来は日本での留学経験を生かし、ドイツの大学でスポーツ科学を教えたいと思っています」と意欲的に話しました。小松教授は「積極的に仙台大生や他の留学生たちと交流し、友達をたくさん作ってほしい。日本の教育やスポーツ科学の知識を得て、自分のキャリア形成に生かしてほしい」と期待の言葉を述べられました。

カール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクは、教育大学を前身に1973年に設立されたドイツでは新しい大学です。平成22年2月22日に、本学はドイツの大学では初の国際交流協定を締結しました。平成24年度に本学学生1名が同大学に1年間留学し、平成25年度には同大学より半年間1名の留学生を本学で受け入れました。平成26年度には、学術交流として「現代の系譜学」をテーマに本学においてワークショップを開催しました。今後も、同大学の体育学科を中心に教育・研究や活発な学生間交流を進めていきます。

台湾の台東大学から留学生が来訪

左から陳居賢さん、林さん、阿部学長、陳律慈さん、呉さん、王さん、渡邊室長
＝学長室

9月17日（木）、国際交流提携校の台東大学（台湾）からの留学生4名が、本学事業戦略室の渡邊一郎室長・台東大学から本学へ留学中（ダブルディグリー制度により本学の学位を取得中）の林彦宇さんと共に、学長室を訪れました。阿部芳吉学長は「病気や怪我が一番心配。疑問に思ったことや困ったことがあれば何でも相談に応じます。しっかり日本語を修得して、楽しく充実した留学生活を送ってください」と励ましの言葉を述べられました。

台東大学と仙台大学の両大学の学位取得をダブルディグリー制度により目指す陳律慈さん（柔道台湾代表）は、「日本語・日本文化・日本のスポーツ科学を学び、自分の世界を広げたいと思います。特に、日本の柔道を学びたいです。仙台大学の柔道部に入部したいと思っています」と抱負を話しました。

１年間、学部の科目等履修生として学ぶ３名は、「高校の体育教師を目指しています。日本の空手道の技術と精神を習得し、将来にも繋げていきたいです」（呉宇晴さん／空手道台湾代表）。「日本語と剣道を学びたいです。将来はツアーコンダクターになって、日本と台湾の橋渡し役になりたいです」（王崴さん）。「アウトドアスポーツに興味があります。台湾では雪が降らないので、スキーが楽しみ」（陳律慈さん）と留学への意気込みを話しました。

なお、本学では、台湾・台東大学の他に、スポーツ科学を中心とした分野で、中国や韓国・アメリカ・ドイツ・フィンランド・タイ・ベトナム等の世界各国の大学と交流を行なっています。

仙台大学同窓会―新潟・東海・広島の三支部が同日開催（2015.9.12）

新潟支部の報告

新潟支部同窓会を直江津駅前の「まるちゃん」で開催しました。７月に下越の会が開かれていた関係で参加者は少なかったですが、久々の上越開催でもあり、大いに盛り上がりました。また、大学からは同窓会長、学長がご参加くださり、同窓会の進む方向と仙台大学の現状を知ることができました。５０周年記念に向けて、次回は工夫を加え、多くの同窓生で支部会を行いたいと考えております。

＜新潟支部事務局長　小林直樹＞

東海支部の報告

会を重ねること１５回（特別開催を含めると１７回）の当同窓会は、全国の数ある支部会で突出した伝統と実績を自負しますが、実態はまだまだ難問山積です。しかし、400名余の同窓生と交信可能な状況と、100名の出欠席連絡「はがき」は心強く、会の発展に大きな力になるものと確信しております。

さて、名古屋の中心地にある「ホテル・メルパレク」で開催された今年度の同窓会では、１５周年記念講演として、バンクーバーオリンピックの悪夢を乗り越え、見事にソチオリンピックに連続出場した私達の仲間、小室　希氏（仙台大学特別研究員）をお招きしました。小室氏によるご講演は、大好評で、世界で活躍した同窓生を囲み、宴は盛り上がりました。今回の参加者は、常連とされる方に加えて懐かしい方々が多かったこと、更に初めて参加してくれた同窓生もあり、実に和やかな会に終始しました。二次会は、夜の名古屋の代名詞「錦三」・・錦三丁目に繰り出しました。誠に愉快な夜で、至福の一時を過ごした方々は、その余韻に浸っていることでしょう。

最後に母校仙台大学の隆盛と、同窓会の益々のご発展を心から祈念申し上げます。

＜東海支部長　松下邦雄＞

広島支部の報告

仙台大学広島支部同窓会が広島市中区八丁堀で開催されました。現在、広島には、50名を超える卒業生がおり、この日は11期から41期の14名が参加しました。最初に同窓会本部事務局長・大河原先生のご指導のもと総会が行われ、現在の大学の様子や支部の在り方についてご説明いただきました。懇親会の開会は、上村知令様（11期・剣道部）にご挨拶と乾杯の音頭をご担当いただきました。会が進むにつれ、心は一気に大学生に戻り、みなさん当時の思い出話に花を咲かせていたようです。全員で同窓会旗の前で記念写真を撮り、最後に校歌や応援歌を大合唱。締めの乾杯は大前浩昭様（13期・陸上部長距離）にご担当いただき、盛況のうちに閉会いたしました。

＜広島支部　中奥岳生＞

広島は３０数年ぶりと言うことで、広島同窓生５０人中１４人参加し、皆さんだいぶ心待ちにしていたようです。部活動つながりで再会を懐かしんだり、初めての顔合わせでも話題の中心は大学生活、先生方のエピソードで盛り上がり、最初から皆さんの笑顔があふれてとても良い雰囲気でした。最後は支部長が印刷してきた「校歌、学歌、仙大の力、第一応援歌、第二応援歌」を、居酒屋の中でみんなで声高らかに歌いあげました。これまで各支部同窓会に出席してきましたが、こんなに皆さんが覚えていて歌ったのは初めてでとても感心しました。最後は肩をくんで輪を作り、エールをして、おひらきとなりました。参加者全員が異口同音に、楽しかった、ぜひ来年もということで大変な盛会でした。

引き続きの２次会も、酒のつまみに出てきた広島特有のものなのか・小イワシの天ぷら・エイのひれ・ハゲのさしみ（たれはポン酢に肝、ネギ、大根の紅葉おろしを入れたもの）、アサリ蒸しなどとても美味しくいただきました。

広島支部の皆さん、とてもすてきな夜を満喫させていただきありがとうございました。これを機会に毎年開かれると良いですね。期待しています。

＜同窓会事務局　大河原則夫＞

イタリアスポーツ教育協会（AISE）での柔道研修
～　被災地の柔道家支援として5年目の招待　～

故バリオーリ氏のメッセージと嘉納治五郎に関する執筆本を手に

7月16日～7月29日、本学柔道部大枝郁美さん（体育学科4年・水戸葵陵高校出身）と田中千裕さん（体育学科３年・岐阜県鶯谷高校出身）がイタリアのプレダッピオ市ビッラサルタにある合宿所おいて柔道合宿に参加しました。

この研修は、イタリアスポーツ教育協会（ＡＩＳＥ）故チェザーレ・バリオーリ氏が、東日本大震災で被災した、日本の若い世代の柔道家をイタリアへ招待し勇気づけたいと女子柔道オリンピック金メダリストの谷本歩実さんを通じ打診があったことにあります。かねてから谷本さんと交流の深い本学柔道部の南條和恵女子監督に声掛けがあり、そのご縁で参加させていただくことになりました。震災のあった２０１１年から数えると今年で5年目となります。バリオーリ氏亡き後も、遺志を受け継ぐ形で、バリオーリ先生の奥様イヴァーナさんやお弟子さんたちが中心に継続し、無償で被災地唯一の体育大学である本学の柔道部の学生を招待し続けて下さっています。

稽古後の様子

合宿では、イタリア各地にあるＡＩＳＥの道場へ通う10代から50代の様々な年代の男女約２０名が参加しており、Ciao!と陽気な挨拶でイタリアの柔道家のみなさんに温かな雰囲気の中で迎えられ、屋外にあるビッラサルタの柔道場で今年もAISEに通う様々な団体とともに、ウォームアップに体の俊敏さを競ったゲームを取り入れていたり、技の研究、ミーティングなどでの意見交換など、様々な稽古が行われました。終盤の２日間ほどは、シチリアチームが合流し18歳の60キロ級柔道イタリアチャンピオンと稽古をする機会に恵まれて、沢山の貴重な経験をさせていただきました。

また、古武道や空手、合気道など日本古来の「武道」をトレーニングに取り入れ、一つ一つの技の研究なども熱心に取り組みながら、日本柔道を吸収しようと二人からも真剣に学び取ろうとする姿勢にとても感銘をうけたそうで、帰国する際には、バリオーリ先生が執筆した嘉納治五郎先生の生涯をまとめたイタリア語版の本や、最後に遺したバリオーリ先生のメッセージなどが手渡され、ぜひ原語で拝読したいと思ったそうです。

これまでの５回にわたる、仙台大学柔道部の学生への柔道研修を通じ、沢山のご支援をいただいたことに感謝しながらＡＩＳＥの皆さんに何等かの御恩返しがしたいとこれまでの研修での学びを報告してくれました。

大枝郁美さん
（体育学科4年・水戸葵陵高校出身）

稽古の後に集まり行われるミーティングにおいて、柔道に対する自分の考えを聞かれ、片言の英語で自分の気持ちを表現することがとても難しかったです。AISEの方々が柔道をとても愛していることを肌で感じ、生涯を通して学んでいく柔道の面白さを、改めて気付かされた想いです。柔道を知らない子どもたちへも楽しさを伝えられる柔道家になりたいと思いました。

田中千裕さん
（体育学科３年・岐阜県鶯谷高校出身）

受験英語を駆使し何とか会話したり、技の名前などは日本語のまま（たとえば、寝技（NE-WAZA））なので、技を教えたりする場では通じることができました。海外においては語学の大切さを痛感しました。今後は大学においての柔道をしっかり頑張り、イタリア語も今後勉強してバリオーリ先生が書かれた本を読めるようになればと思っています。

AISEの選手と稽古をする田中選手

驚き、大学の治安確保に活躍する大学警察！
遠藤教授のスタンフォード大学探訪

ZAVARA次席保安官と

米国カリフォルニア州サンフランシスコ市から車で1時間弱、そこに巨大な大学キャンパスが出現する。米国では、東海岸のハーバード大学と並ぶ、西海岸の名門校スタンフォード大学だ。

この度、現代武道学科で「警備制度の国際比較」を調査研究する遠藤が、米国の警察制度と民間警備業の実態調査の一環でスタンフォード大学を訪問した。まず、驚くのはそのキャンパスの広さだ。それは3310haと、本学の200倍の広さに該当する。そこに総勢約２万人弱の学生が学び、2000人弱に及ぶ教員が教育研究に携わる。これまでのノーベル賞の受賞者は実に58名に上る。

更に驚かされるのは、この広大なキャンパスには大学独自の警察とそれと一体的に警備組織が整備されていることである。それがスタンフォード大学公安局SUDPS：Stanford University Department of Public Safetyである。

日本では、公共の治安維持、社会の安全・安心の確保は警察という公権力に独占的にゆだねられ、個人や企業の民間ベースで生命・身体・財産の安全・安心の確保はそれぞれ自ら、又は、民間の警備業に委託して実施されている。

スタンフォード大警察のパトカー

これに対し、米国では民間警察（Private Police）が存在する。その一つの例がSUDPSの一部局”大学警察”だ。インタビューに応じてくれたのはスタンフォード大学警察のNO2の次席保安官ZAVARA女史だ。スタンフォード大学の所在するサンタクララ郡の郡保安官事務所との合意により、郡保安官の持つ警察権能がスタンフォード大学警察に付与されている。これにより、彼女は銃を携行して武装し、キャンパスで起きる殺人、強盗、窃盗、性犯罪、飲酒や麻薬問題、家庭内暴力、ストーカー犯罪などの捜査や防犯に取り組んでいる。勿論、その活動は警察車両であるパトロールカーにのって展開される。SUDPSのもう一つの顔が民間警備部局だ。キャンパス内の交通誘導、アメリカンフットボールなどのイベントが開催される際の雑踏警備などが主な仕事だ。このようにSUDPSは警察機能と民間警備機能を有するハイブリット型の大学警備部局だ。その人件費や運用経費は全て大学が負担している。米国に根付くSelf-help, self-protectionの思想がそこに現れている。米国の警察と警備に関する研究には、その奥さを掘り出すことの必要性を感じさせる。

＜寄 稿：学長特別補佐　遠藤保雄＞

2015東北こども博―仙台大学と船岡駐屯地との協定書締結式

朴澤理事長と腰塚司令（左）が固い握手を交わす
＝船岡駐屯地第２施設団長司令室

9月8日（火）、船岡駐屯地第２施設団長司令室で、本学と船岡駐屯地との「2015東北こども博」の連携協力に関する協定書締結式を行ないました。

締結式には、本学からは朴澤泰治理事長・西塚重良学生支援室長が、船岡駐屯地からは腰塚浩貴司令が出席し、朴澤理事長と腰塚司令が協定書を取り交わしました。

船岡自衛隊からは、東北こども博の初開催となった「2011東北こども博」より、来場者用駐車場の提供を受けています。また、「2013東北こども博」以降、地域連携企画としてロープワーク教室やジープ・偵察用バイク展示などのご協力を頂いています。

締結式で朴澤理事長は「2015東北こども博の成功に向け、協定を深めていきたい」と話し、「本学には武道と警護・警備を学び、社会の安全・安心に貢献できる人材を養成する現代武道学科を設置しています。自衛隊でもＰＲして頂ければ幸いです」と話されました。

2015東北こども博―10月11日（日）・12日（月・祝）に開催決定

2015東北こども博ポスター

仙台大学、柴田町、NPO法人東日本大震災こども未来基金等で構成される東北こども博実行委員会は、来たる10月11日（日）・12日（月・祝）の二日間、仙台大学キャンパスにおいて「2015東北こども博」を開催（仙台大学大学祭及びスポーツフェスティバルin柴田と両日同時開催）致します。

東北こども博は、「復興」・「笑顔」をキーワードに2011年10月からスタートし、今年で５回目となります。こどもも大人も、老若男女すべての方々に笑顔をもたらすようなイベントです。おもちゃや遊び、スポーツや音楽、アウトドアなど体験・参加できる楽しさいっぱいの2日間です。

入場は無料ですので、皆さまお誘い合わせの上、ぜひご来場下さい。

2015東北こども博　公式ホームページ
http://www.sendaidaigaku.jp/kodomohaku/

天皇杯サッカー2回戦・J1ベガルタ仙台に大善戦もあと一歩及ばず

試合前の仙台大イレブン＝ユアテックスタジアム仙台

途中出場のFW森村選手が１点差に詰め寄るゴールを決める

9月6日（日）、ユアテックスタジアム仙台（仙台市泉区）で、仙台大学（宮城県代表）がベガルタ仙台（Ｊ１）に挑んだ天皇杯２回戦。ベガルタ仙台は、仙台大学サッカー部出身のFW奥埜博亮選手（平成24年体育学科卒）とDF蜂須賀孝治選手（平成25年体育学科卒）が先発フル出場。仙台大学男子サッカー部は、最後の最後まで諦めずに戦い、ゴール裏のサッカー部員らも一丸となって声が枯れるほどに応援し続けましたが、追いつくことができず、２－３で惜しくも敗れました。

試合は、前半から本学が押し込まれる苦しい展開。前半9分、本学ＯＢの奥埜選手に左足で豪快な先制弾を決められました。同40分には、ゴール前でベガルタ仙台のMF野沢拓也選手にフリーキックを決められ、試合はベガルタ仙台ペースで進み、前半を０－２で折り返しました。

後半は、本学が前線からプレスをかけ、ボールを奪い、ボールを前に出して攻める形を続けます。後半15分、コーナーキックから本学のMF石川隆太（いしかわりゅうた）選手（体育学科4年－栃木SCユース出身）が頭で１点を返して反撃。しかし、同27分にベガルタ仙台のDF菅井直樹選手にダイビングヘッドを決められ、１－３と突き放されました。その後、同40分に途中出場の本学のFW森村公亮（もりむらきみあき）選手（体育学科2年－神奈川・横浜創英高校出身）がカウンター攻撃からゴールを決め、１点差に詰め寄り、本学のDF山田満夫（やまだみつお）選手（体育学科2年－Ｊ１松本山雅出身－北海道・帯広北高校出身）やベガルタ仙台から特別指定を受ける本学のDF榎本滉大（えのもとこうだい）選手（体育学科3年－群馬・共栄学園高校出身）らも攻め上がる猛攻を仕掛けましたが、大善戦もあと一歩及びませんでした。

試合後には、ゴール裏の仙台大学サッカー部員から本学ＯＢの奥埜選手と蜂須賀選手に対してのコールが沸き起こり、両ＯＢは「母校との対戦は、やりにくい部分もあったが、楽しみだった。（コールは）いい後輩たちに恵まれ、嬉しかった。リーグ戦でもいい結果を残したい」と感激した様子で話しました。

本学男子サッカー部の吉井秀邦監督は「Ｊ１ベガルタ仙台が、ほぼベストメンバーで試合に臨んでくれたことに感謝している。ウチ（仙台大学サッカー部）は、力を引き出してもらったと思っている。チームの自信につながる非常にいいゲームだった。ウチはベガルタ仙台との提携関係（練習試合やコーチ派遣など）で強くなれた。今後も、ベガルタ仙台と一緒に成長していきたい」と述べられました。

引き続き、仙台大学男子サッカー部への熱い応援をよろしくお願い致します。

左：OB奥埜選手(7)【右】が左足で先制弾を決める。
右：OB蜂須賀選手(4)【右】と競り合うＭＦ高橋晃司選手(8)(体育学科4年－青森山田高校出身)。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 114／ 2015 October
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

＜ 目 次 ＞

中国･瀋陽師範大学との国際交流促進に関する合意書に調印	1
大学アスリートサポートシステムシンポジウム開催される	3
宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会in仙台大学	4
2015東北こども博を開催―子どもたちの笑顔でいっぱい	6
Japan Welcomes our Students!	9
学生の競技結果	10

中国･瀋陽師範大学との国際交流促進に関する合意書に調印

合意書に調印後、固く握手を交わす賈副書記（左）と阿部学長＝仙台大学

平成２７年１０月２９日（木）、仙台大学と中国・瀋陽師範大学は、平成２０年５月２１日に締結した「仙台大学と瀋陽師範大学との間における国際交流に関する協定書」に基づき、両大学間の国際交流をさらに促進するため、新たに「学部学生の相互交流および教職員の交流」の具体的な取組項目について合意書を交わしました。

調印式には、本学の阿部芳吉学長・齋藤浩二現代武道学科長・荒井龍弥国際交流センター長や瀋陽師範大学の賈王明副書記ら１４名が出席。阿部学長と賈副書記がそれぞれ合意書に署名し、両大学の交流をさらに活性化させることを確認しました。

賈副書記は「瀋陽師範大学は仙台大学との友好関係を大切にしている。両大学の学部学生の相互交流と教職員の交流が一層進むことを期待している」と話され、阿部学長は「９月１４日から２週間、本学の学生２名が瀋陽師範大学でお世話になった。学生は一回りも二回りも人間性が大きくなって帰ってきたように感じる。両大学の学生たちのために、瀋陽師範大学と手を結んで、努力しながら精一杯教育していきたい」と応じました。

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見･ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

中国瀋陽師範大学短期研修

2015年9月14日～27日に中国瀋陽師範大学における短期研修が行われ、現代武道学科3年生の橋本太輔、高橋紗彩の2名が参加しました。引率教職員は、馬佳濛講師が全日程、斎藤浩二教授、金賢植講師、福原可奈氏が前半、そして朴澤泰治理事長、近江康宏課長が後半という分担での引率参加でした。

本短期研修は、27年度文部科学省奨学金（JASSO）補助の採択を受けて、初めて実施されたものです。プログラムについては、現代武道学科が開講している「中国武術Ⅰ」「中国武術Ⅱ」授業のアドバンスコースとして、本場での中国武術の習得を主な目的に、中国語、京劇、中国伝統民族楽器鑑賞、中国茶道などの多彩な文化体験によって構成されています。

中国武術の習得に関しては、一般学生と共に太極拳の授業を受講し、24式太極拳を熟練した上、一般の学生とも交流を図りました。また、毎年本学での「中国武術」集中講義の担当講師でもある瀋陽師範大学体育科学術院の王強先生が実施した特別授業では、橋本太輔さんが棒術、高橋紗彩さんが剣術という中国伝統武術の種目を紹介され、たった２週間という短期間で、基礎的な型を習得することができました。最終日の修了式において、担当教員および体育科学術院院長から高い評価を得るとともに、「今後も中国武術を続けて、武術を通じた日本と中国のかけ橋になってほしい」との期待の意が示され、修了書を授与されました。また、瀋陽師範大学武術チームおよび瀋陽市体育学校武術チームのパフォーマンスを見学し、中国武術を本場で見るだけでなく実施することで、より理解を深め、中国武術の真の精神と技能に触れることができました。

学生２人は、研修滞在中、瀋陽師範大学国際教育学院の留学生寮に宿泊し、20数ヶ国からの計850名の留学生とともに中国語および各種の文化体験授業を受け、寮生活をしました。普段の授業から日常生活まで、他の国から来た留学生と意欲的に中国語でコミュニケーションを取り、友情を築きました。また、中国語のリスニングやライティングなどの授業では、初級レベルでありながら、同クラスの留学生に励まされ、懸命に追いつき、２週間の受講を経て、自己紹介と簡単な会話を聞き取ることができるようになりました。さらに、京劇と伝統民族楽器の鑑賞、作法や考え方が日本と異なる茶道と書道の体験を通じ、中国文化を精神的にも身体的にも感じ取ることができました。また、学外の見学では、清の時代を統治した皇帝の初期の宮廷である瀋陽故宮博物院や、日本軍による満州事変の発端となった柳条湖事件以降の中国侵略の歴史を集めた9.18記念館なども見学し、学生にとっては、忘れられない経験になりました。

修了式では、橋本太輔さんは「研修を通して教職員の方や学生達の対応が良く、これまで抱いていた中国のイメージが良い方に変わった。また、進路の選択肢の一つとして、瀋陽師範大学で国費留学生という長期留学も考えていきたい。」、高橋沙彩さんは「２週間、大変、楽しく過ごした。今後も機会があればまた来たい。そして、歴史について再認識し、非常に勉強になった」と、ともに熱く感想を述べました。今回参加した２名の学生にとって良い経験と刺激になり、学んだことを生かして、将来に役立ててもらうことを願っております。

瀋陽師範大学と仙台大学とは、これまで、大学院留学生との交換留学、教職員間の交流等を行ってきましたが、今回の学部生の短期研修派遣は初めてであり、今後も本プログラムを継続すると同時に、「海外武道実習」の実施や中長期の単位交換留学制度の実現等にも向けて、さらに交流を拡充していく予定でおります。

＜報 告：研修担当・講師　馬佳濛＞

大学アスリートサポートシステムシンポジウム開催される

松浪理事長挨拶

１０月３日、日本体育大学世田谷記念講堂において、「大学におけるアスリートサポートの現状とその展開」と題して、医科学サポートを中心とした各大学の取組みに関するシンポジウムが開催され、本学からは、鈴木省三副学長が「仙台大学のアスリートサポートについて」の講演を行った。

シンポジウムの冒頭、日本体育大学の松浪健四郎理事長から、「２０２０年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本体育大学は７０名の日本代表を輩出することを目標とする。そのためにはサポート体制の整備強化が必要であり、本日の実のある発表に期待したい」との挨拶がなされ、先ず、国立スポーツ科学センターの川原　貴センター長から、「国立スポーツ科学センターにおける医・科学サポート」と題して、日本におけるスポーツに対する医科学サポートの歴史と現状について、分かりやすく解説がなされた後、日本体育大学(西山哲成氏)、東海大学(有賀誠司氏)、国際武道大学(山本利春氏)の医科学サポートの取組みの各状況について、説明講演がなされた。

日体大のＮＡＳＳパンフ

サポートの態様としては、トレーニング・サポート、メディカル(AT、S&C等)・サポート、パフォーマンス(情報等)分析・サポート、心理サポートなどの医科学サポートの他、教育サポート、研究サポート、財政サポート等、広い視点からの取組みがなされており、医科学サポートのうちの心理サポート、および、教育サポートという取組みは、本学のサポート体制としては未成熟な分野であり、学生教育の質の充実という観点からも早急な体制整備が必要であることを示していた。

日本体育大学の「医科学サポートは人間教育の有効な手段」、「体を張った管理栄養士」等、東海大学の「内部資金なし、委託研究など外部資金の獲得」、「活動状況の保護者への開示」、「勉強会重視」、「データ・ファイルの共用」、「地域住民への間連学内資格の付与制度」等、国際武道大学の「ATは体育的臨床であり教育である」等の各事例紹介は、本学としても取組むべき方向性を示唆している。

今回聴講においては、川原センター長の講演内容をビデオ収録しており、内容が学生の知識蓄積分野として必須の事項であることから、学内の屋外スクリーンでの放映により、学生に情報提供したいと考えている。

＜報 告：理事長　朴澤 泰治＞

陸上競技部･加藤由希子選手（健康福祉学科4年）が壮行会で抱負

世界選手権に向け「２位以内を目指したい」と抱負を語る加藤選手

１０月７日（水）、本学管理研究棟２階大会議室において、１０月２２日から１０月３１日まで開催される「ＩＰＣ2015陸上競技世界選手権大会」（カタール・ドーハ）の女子やり投げに出場する本学陸上競技部･加藤由希子選手（健康福祉学科4年―宮城・気仙沼女子高校出身）の壮行会が行なわれました。本学の教職員約３０名が出席。

壮行会では、阿部芳吉学長から「自己ベストの更新を期待している」。陸上競技部の藤井邦夫部長からは「次につながる活躍を期待している。壮行会を開催して下さり、感謝している」と激励と感謝の言葉が述べられ、その後、大学・保護者会・同窓会から加藤選手に激励金が手渡されました。

激励を受けた加藤選手は「今大会で２位以内に入るとリオデジャネイロパラリンピックの出場権を得ることができます。最大限の力を出して、よい報告ができるように頑張りますので、

応援よろしくお願いします。本日は壮行会を開催して頂き、ありがとうございました」と抱負と感謝の言葉を述べました。

宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会in仙台大学

橋本副学長の講演の様子＝仙台大学第五体育館

１０月６日（火）、本学第五体育館で「平成２７年度宮城県食生活改善推進員仙南ブロック交流会」が開催されました。仙南ブロック２市７町の食生活改善推進員（※地域における健康づくりと食育のアドバイザー（ボランティア）。）約１３０名が集い、本学の橋本実副学長からは「地域で支える健康づくり～健康寿命の延伸に向けて～」と題する講演を行ないました。

講演の冒頭、柴田町の滝口茂町長から「健康づくりには、バランスの摂れた食事・適度な運動・十分な睡眠が大事。正しい情報を伝え、地域の健康づくりの担い手として活躍してほしい」。本学の阿部芳吉学長からは「食を通じて健康で元気な人を増やし、地域に貢献してほしい。実りある交流会にしてほしい」と歓迎の挨拶が述べられました。

講演では、橋本副学長から「100歳以上まで生きるための秘訣」、「糖質摂取で太る理由」、「糖質制限の方法」、等が紹介されました。橋本副学長は「炭水化物は、血糖値を急上昇させる性質をもっている。これが、血管を傷つけ、老化を早め、動脈硬化や糖尿病を引き起こしている」と話され、「何を」「どれだけ」食べたら良いのかを理解することの重要性を強調しました。講演後の質疑応答では、食生活改善推進員から牛乳・卵・酒に関する質問がなされましたが、橋本副学長の回答に納得した様子で頷かれていました。

引き続き、本学の柳澤麻里子新助手から「地域で実践できる軽運動・体操」と題して、いつまでも自分の脚で歩けるように無理なく行なえる軽運動・体操の実演指導が行なわれました。「幸せなら手をたたこう」を歌いながら、手を叩いたり、足踏みしたり、食生活改善推進員同士で触れ合ったりしながら楽しく体を動かしました。

足踏みを実演指導する柳澤新助手

最後に、仙南２市７町（白石市・角田市・蔵王町・七ヶ宿町・柴田町・大河原町・村田町・川崎町・丸森町）の食生活改善推進員から「私たちの食を通じた健康づくり活動」と題した活動発表が行なわれ、活発な議論が交わされました。

宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会は、参加者の皆様から好評を博し、盛会裏に終了しました。

平成27年度　東北多文化アカデミー主催・日本語学校開講式

10月14日、次年度大学院入学予定である台湾・中国の留学生が仙台市青葉区で行われました、東北多文化アカデミー主催の日本語学校の開講式に参加しました。

入学者は先月来日した中国の瀋陽師範大学、上海体育学院と台湾の台東大学からの５名の留学生です。

留学生の中の大半が日本での生活は初めてであり、まだまだ慣れていない様子で、辺りを物珍しく見渡し、様々な物に対してカメラを向けている場面が多く見られました。開講式では、これからの新しい場所での生活を心待ちにしているのが伝わるような輝いた目で、同席された朴澤理事長や東北多文化アカデミーの方々の挨拶を聞いていました。また、覚えたてで片言ではありましたが、しっかりと日本語で先生方に自己紹介を披露し、終始和やかな雰囲気で式を終えることができました。今後、日本語能力がどこまでレベルアップするのか、彼らの頑張りに期待したいものです。

＜報 告：学生支援室　石橋雪乃＞

仙台89ERS・2015-2016シーズンTKbjリーグ開幕戦を観戦

左からキーナート副学長、鈴木保之香さん、佐藤文哉選手、朴澤理事長、白坂

2015-2016シーズンTKbjリーグが開幕しました。TKbjリーグはこれが最終シーズンとなり、次シーズンから日本のバスケットボールリーグが統一され、新しく『Bリーグ』として始まります。仙台89ERSはBリーグI部で戦うことが決まっており、TKbjリーグ最後のシーズンに悲願の優勝を果たすことを目標としています。

平成27年10月10日、ゼビオアリーナあすと長町にて行われたホーム開幕戦にご招待いただき、朴澤理事長先生、キーナート副学長と観戦させていただきました。満席の会場の3階席に案内され、食事や飲み物が用意されており、会食を通して他スポンサー企業様との交流を持つことができました。理事長先生は七十七銀行頭取の氏家氏、株式会社藤崎専務取締役の田中氏とご交流を持たれておりました。

私としましても株式会社ボディープラスインターナショナル社長ホルトン氏を始め、たくさんの方々と交流を持つことができました。対戦相手は東京サンレーヴスで、108-58と大きく突き放したダブルスコアゲームとなり、ホーム開幕戦をより一層盛り上げる大勝となりました。佐藤文哉選手は得意のスリーポイントを3本沈め、合計12得点という活躍でした。試合終了後にはスポンサー企業と選手との交流会もあり、朴澤理事長は佐藤選手とチアリーダーの鈴木保之香さんとお話をされていました。佐藤選手には活躍を讃え、また、「もっとアピールをしなくては」と激励されていました。今シーズンのロスターの特徴は日本人選手の補強であると見受けます。経験も実力もある日本人選手に囲まれ、佐藤選手がさらなる成長をし、数多くの試合で活躍することを期待しています。また、今シーズンは仙台出身の選手も増え、地元に根付いたチーム作りにも期待しています。

仙台89ERSを離れて3シーズン目が始まりましたが、今年度も元チームメイトをサポートできる環境にいられることを朴澤理事長先生に感謝申し上げます。

＜報 告：新助手　白坂広子＞

第一回スポーツ情報サポート研究会活動報告会が開催される

活動報告会の様子＝講義棟Ｂ１０３教室

10月13日（火）、本学講義棟Ｂ１０３教室において、「第一回スポーツ情報サポート研究会活動報告会」が開催され、学生や関係教職員ら合わせて約４０名の聴講者が集まりました。スポーツ情報サポート研究会は今年４月に設立。同研究会の活動目的は、スポーツに関する様々な「情報」を有効に活用できる実践力を身に付けること。情報戦略系とマスメディア系の２つに分かれて、それぞれ活動が行なわれ、「情報戦略系」では、主に特別強化指定サークルになっている一部の部活動を対象として、ダートフィッシュやスポーツコードを使って分析サポートが行なわれています。「マスメディア系」では、本学が行なう学内外の様々な取組やサークル活動、地域イベント等の取材・撮影・編集を行ない、主に第三体育館の大型スクリーンによる情報発信が行なわれています。

報告会の冒頭、スポーツ情報マスメディア学科の高橋弘彦学科長から「映像がなければ分析はできない。情報戦略系とマスメディア系の融合が重要。これまで取り組んできた成果発表を楽しみにしている」と挨拶され、発表が開始されました。

発表者たちは真剣な表情で発表に臨み、事前に準備したパワーポイントで活動の成果を示しながら発表しました。また、発表後の質疑応答でも活発な議論が交わされました。

発表会の最後に阿部芳吉学長から「仙台大学らしい素晴らしい発表会で感動した。新しい分析の視点で「情報」に対する考えを確立してほしい。情報分析による価値ある提言や情報発信を期待している」とエールが送られ、発表会が締めくくられました。

2015東北こども博を開催―子どもたちの笑顔でいっぱい

子どもたちと一緒に大人気の「ようかい体操第二」を踊る学生ボランティア
＝仙台大学第二体育館

10月12日（日）・13日（祝・月）の二日間、「震災からの復興」と「子どもたちの笑顔」をテーマに、「2015東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省／宮城県／仙台市教育委員会など）が本学を会場として開催され、約１７，７００人の方々がご来場下さいました。

今回で５回目を迎えた「東北こども博」は、子どもたちに、遊んで、からだを動かし、元気になってもらおうと全国の玩具メーカーや地元企業約６０社が協賛。アンパンマンやウルトラマンエックスなどのキャラクターによるステージショー、最新の玩具やアクセサリーを作る体験などができる「トイホビー」、サッカーや野球などの競技に挑戦できる「スポーツ」、グルメ屋台などが並ぶ「お祭り」、復興市場（女川のサンマやカキ・亘理のはらこめしなどが出店）や（公財）音楽の力による復興センター・東北が「音のおもちゃ箱♪」と題したミニコンサートなど「ふるさと（地域連携企画）」の４つのエリアから構成された多彩な催しが行なわれ、各会場は大人も子どもも夢中になって楽しんでいました。

約４００名の学生ボランティアが二日間に渡り「東北こども博」を支え、盛り上げました。トイホビー広場でプラバンアクセサリー作りを体験していた仙台市立柳生小学校６年の女子児童は、「昨年に続いて家族４人でこども博に来ました。大学生が優しく教えてくれ、オリジナルのプラバンアクセサリーができました」。ふるさと広場で紙ヒコーキ作りを体験していた名取市立増田小学校３年の男子児童は、「こども博は毎年楽しみな行事です。（折り紙ヒコーキ協会会長の戸田拓夫さん：紙ヒコーキ室内滞空時間ギネス世界記録保持者から）よく飛ぶ紙ヒコーキの織り方を教えてもらえて嬉しかったです」と語ってくれました。

ソチ五輪ボブスレー日本代表・黒岩俊喜選手が講演in大河原小学校

大河原小学校で講演する黒岩選手

10月20日（火）、大河原小学校（全校生徒８４８人）でソチ五輪に出場したボブスレーの黒岩俊喜選手（運動栄養学科4年ー神奈川・橘高校出身）の講演会が行なわれました。黒岩選手は、夢を持つことの素晴らしさや、困難に立ち向かい努力し続けることの大切さを児童たちに伝えました。

黒岩選手はオリンピックについて、競技だけでなく、国際理解・国際交流も魅力の一つと強調。自分の小学校時代に触れ、「テニスや陸上で精一杯取り組んだ結果が良い方向に進んでいった」と振り返りました。また、自らの経験談を交えながら、夢を叶えるための３つの心構えについて「夢や目標を持って努力すること、感謝すること、自分を好きになることが大切」と呼び掛けました。

講演会終了後、黒岩選手は児童代表から「黒岩さんの生き方を通して、頑張ること、挑戦することの素晴らしさを学びました。次のオリンピックも頑張って下さい」とお礼の言葉と花束が贈呈されました。

なお、講演会は本学と大河原小学校の連携事業による一環として、同小学校が企画しました。

平成27年度前期海外留学研修報告会および後期留学生交流会

国際交流センター主催の前期海外留学研修報告会が１０月２０日（火）、学生食堂「なちゅら」において開催され、教職員・学生・留学生など約６０名が参加しました。

会のはじめに阿部芳吉学長から「日本の良さは海外に行くことにより再認識することができる。今後も世界に視野を広げながら頑張ってほしい」とあいさつされました。報告会ではハワイ大学アスレティックトレーニング研修アドバンスコース、フィンランドカヤーニ応用科学大学長期交換留学、そして、協定締結後初めての派遣となった中国瀋陽師範大学中国武術・文化研修派遣の３つのプログラムの報告が行われました。

報告の中で学生からは、「日本では体験できないことができ、今後勉強を進めるうえで参考になった」「海外に行って視野が広がった」「留学経験を活かせる職業に就きたい」という声が聞かれ、有意義な留学研修が行われたことが伺えました。

報告会終了後には中国、台湾、ベトナム、ドイツからの留学生と本学学生との交流会も開催され、留学生全員の日本語での自己紹介や、中国に留学した学生による中国武術の演武が披露されるなど、終始和やかな雰囲気で会が進みました。

荒井龍弥国際交流センター長は「留学を経験した学生はその経験を大学生活に生かしてほしい。また、留学生の皆さんも仙台大学で多くのことを経験してください」と締めくくりました。

後期も様々な留学研修プログラムが予定されており、本学の国際交流がますます活発化していくことが期待されます。

＜報 告：事業戦略室　石森靖明＞

船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」に本学学生が参加

10月28日（水）に「船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」」が実施されました。本学からは吉田事務局長、川村学生課長をはじめ、女子バスケットボール部の菅野コーチと部員10名が参加し、船岡さくら商店会会員の皆様とともに街路の清掃と花木の植栽を行いました。街路の清掃や花木の植栽中には、地域の方々から「お疲れ様」「ありがとうね」といったお言葉を多くかけていただき、交流を深めながら取り組んでいました。

スマイルロード・プログラムに参加した女子バスケットボール部の関畑希さん（せきはた・のぞみ）（健康福祉学科4年－岩手・一関学院高等学校出身）は、「地域の方々から多くの声をかけていただき、柴田町・船岡の温かさを改めて実感しました。今回の経験は部活動や社会に出てからも活かせると思うので、今後も地域に貢献できる活動をしていきたい」と充実した表情で話してくれました。

船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」とは

宮城県の支援を受け、良好な道路環境をつくるため、定期的に清掃や緑化活動を行い、もって地域環境の維持向上と道路通行安全確保を通し、民間と行政のパートナーシップの構築と住民参加のまちづくりを図ることを目的とする。

＜報 告：新助手　溝上 拓志＞

元桜美林大学大学院教授　船戸高樹先生との懇親会が開催されました

１０月２６日（月）、船戸高樹先生（本学客員教授／山梨学院大学教育・学習開発センター顧問／元桜美林大学大学院教授）が来仙され、桜美林大学大学院の船戸研究室に在籍していた本学事務職員との交流を図りました。

船戸先生と本学との繋がりは、平成１３年に日本私立大学協会主催の米国大学経営戦略視察団に朴澤理事長が参加された際に、船戸先生からレクチャーを受けたのが始まり。

その後、桜美林大学が大学事務職員を対象とした大学運営に関する通信制大学院を開設（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科）。船戸先生もその教授陣の一員となられました。本学事務職員がＳＤの一環として、船戸先生からご指導を受ける運びとなりました。

船戸先生には、第１期生である番匠入試創職室長を始め、中鉢入試創職担当課長、岡沼会計課長、渡辺広報室担当課長、庄子教務課長、三浦入試創職室担当課長、吉田茂予算管理課担当課長、杉本入試創職室担当課長、伊東教務課担当課長、第６期生として最後に薊（大学院事務室担当課長）がご指導頂きました。この流れは、現在も継続しており、毎年１・２名の本学事務職員が桜美林大学大学院に入学して研究を行なっております。

現在、中小規模私立大学のなかで修士の学位を保有する事務職員の比率は、本学が全国有数であると思われます。

当日は、厳しい修論指導の思い出話の他にも、船戸先生主催のアメリカ研修でのハプニングなどの話しで盛り上がり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

今後も大学院在籍時の気持ちを忘れずに、大学発展のために船戸先生にご指導頂きながら、事務職員としての業務を遂行していく所存であります。

＜報 告：大学院事務室　薊 正展＞

Japan Welcomes our Students!

【概略】

仙台大学が提携しているカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB)の大学院から、スポーツマネージメントを学ぶ７名の大学院生と彼らの引率としてキネシオロジー学部の副学部長であるテリー・ロバートソン氏が来訪し、７月１９日～７月３０日まで本学で学びました。その様子がスポーツマネージメントプログラムの２０１５秋号として同大学院のHPで紹介されました。

今年で３回目となる同大学院生の本学の訪問は「お習字」など日本文化を体験しつつ「SENDAI８９ERS」・「楽天」・「ベガルタ」を見学し、日本におけるプロスポーツがビジネスとしてどのように成り立って行くかを実践的に学ぶ非常に充実した内容として、毎回好評を得ています。

参加者の１人であるレオ・マグナさんは「日本・仙台大学におけるこの研修に参加することは、私の人生において最高な体験の１つとなりました。楽天やベガルタの試合を観戦する前に私達はそれぞれのチームの経営者レベルの方々に会い、プロスポーツを彼らがどのように運営し、日本においては異国と違うどういったチャレンジをしているのか、非常に価値あるお話を聞くことができました。また、ホスピタリティに満ち、きめ細やかな日本の心を象徴するおもてなしの数々は、何より胸を打たれるものでした。仙台大学の関係者や学生達は、両手を広げて私達を歓待し、決して忘れぬ体験を積み重ねられるよう終始温かく手を差し伸べてくれ、この研修が大学院で学ぶプログラムのハイライトであることは疑う予知がありません。他国の文化とスポーツを体験できる短期留学は、何より素晴らしく、是非参加するよう大学院生全員に勧めたいと思います」と語っています。

熊原健人投手（体育学科４年）が横浜DeNAから2位指名
―仙台大学から初のプロ野球選手誕生！

高橋部長（左端）・森本監督（右端）と固く手を握り合う熊原投手＝仙台大学

10月22日（木）、2015プロ野球ドラフト会議において、本学硬式野球部の熊原健人投手（体育学科4年－宮城・柴田高校出身）が横浜ＤｅＮＡベイスターズからドラフト２位指名を受けました。仙台大学から初のプロ野球選手が誕生しました。熊原投手は、３年春に３４年ぶりのリーグ優勝に貢献。３年秋の東北学院大学戦でノーヒットノーランを達成。全国大会には３年春（ベスト８）、４年春（１回戦）の全日本選手権に出場。2014年大学野球日本代表。2014年２１Ｕ日本代表に選ばれるなどの活躍を見せました。

大学内の記者会見場には、テレビ局・新聞社など約８０名のマスコミ関係者が取材に訪れました。熊原投手は、硬式野球部の高橋義夫部長・森本吉謙監督と共に、テレビで生中継されているドラフト会議の進行を見守りました。

横浜ＤｅＮＡから指名を受けると、直ちにその場で記者会見が行なわれました。熊原投手は記者からの質問に対し、「ドキドキしました。素直に嬉しいです。仙台大学第一号のプロ野球選手になれて光栄。大学入学後に、体重は２０ｋｇ増えました。仙台大学の素晴らしい環境とトレーナーのお陰です」「自分の持ち味は投げっぷり。プロの選手相手にインコースを強気に投げていきたいです。プロ野球の世界は厳しいですが、長く記憶に残る選手になりたいです」と今後に向けての決意を表明しました。

記者会見終了後には、本学硬式野球部約１５０名のチームメイトによる熊原投手を祝福する胴上げが行なわれました。引き続き、熊原投手への熱い応援をよろしくお願い致します。

＜阿部芳吉学長のコメント＞

横浜ＤｅＮＡベイスターズから２位指名を受け、大変嬉しく存じます。本学のプロ野球選手第一号として、なるべく早く一軍で活躍してほしいと願っています。これまで熊原投手を育てて下さった方々に心から感謝申し上げます。

熊原健人投手（体育学科4年）に横浜DeNAからドラフト指名あいさつ

左から武居スカウト・吉田スカウト部長・熊原投手・阿部学長・森本監督・高橋部長＝仙台大学

10月28日（水）、プロ野球ドラフト会議において本学硬式野球部の熊原健人投手（体育学科4年－宮城・柴田高校出身）をドラフト２位指名した横浜ＤｅＮＡベイスターズの吉田孝司スカウト部長と武居邦夫スカウトが、熊原投手・阿部芳吉学長・高橋義夫部長・森本吉謙監督へ指名あいさつに来校されました。熊原投手は、吉田スカウト部長からＤｅＮＡのラミネス新監督の直筆サイン入りカードとＤｅＮＡの帽子をプレゼントされました。

吉田スカウト部長は「熊原投手の体全体を使ったダイナミックで躍動感ある投球フォームは、元阪神の村山実さんを彷彿させる迫力がある。即戦力として期待している」と評価の言葉を述べられました。

熊原投手は「プロは大学生に比べて２段階レベルが高く、自分はまだまだ力が足りないところがたくさんあると自覚しています。一年目から一軍で投げられるように、これからの時間を大切にしていきたいです」と一年目からの活躍を誓いました。

阿部学長は「早く一軍で活躍する姿が見たい。体を壊さないように気をつけ、息の長い投手になってほしい」と熊原投手を激励しました。

熊原投手は今後、メディカルチェック・仮契約を経て11月28日(土)に横浜スタジアムで開催されるファン感謝デーで正式にお披露目される予定です。

全日本大学女子駅伝東北学連選抜
―伊藤玲奈主将（4年）「2年分の思いを込めて」

10月25日（日）、宮城県仙台市で「第33回杜の都 全日本大学女子駅伝」が開催され、参加26チームが仙台市陸上競技場から仙台市役所前広場までの6区間38.0㎞を駆け抜けました。本学陸上競技部からは、東北学連選抜（オープン参加）の主将として伊藤玲奈選手（体育学科4年－宮城・明成高校出身）がアンカーを務め、第6区（5.2㎞）を19分39秒（区間24位）のタイムで走り切りました。

東北学連選抜は2時間19分17秒（オープン参加の為、公式順位はつかず）で25位という結果でした。レース当日は気温が低く、強風が吹き、時には雨も混じるコンディションの中でのレースでした。

レース後に笑顔を見せる伊藤主将

昨年に続き東北学連選抜に選出された伊藤主将は、レース後に「個人として納得のいく走りは出来ませんでしたが、駅伝を楽しみながら走ることが出来ました。」と振り返りました。

「昨年は補欠で出場することが出来なかった分、2年分の思いも込めながら走りました。仙台大学の関係者をはじめ沿道で手を振って下さる方々、皆さんの応援が力になりました。来年は、後輩達にもぜひこの舞台を体験してほしいです。」とエールを送りました。

＜報 告：スポーツ情報マスメディア学科３年・陸上競技部　横山剛士＞

今野杏夏選手（体育学科１年）が「第１回アジア空道カップ大会」初代チャンピオンに輝く

写真：本人提供

10月4日にモンゴルのウランバートルで開催された「第１回アジア空道カップ大会」において、本学の今野杏夏選手（いまの・きょうか）（体育学科１年―仙台第三高校出身）が初代チャンピオンに輝きました。

空道は日本（宮城）発祥の総合武道。大道塾が作り上げた安全性と実戦性の両立を目指した競技であり、打撃技・投げ技・寝技が認められた打撃系総合武道です。

今野選手は「３年後の世界大会は、東京で開催されます。そこで優勝することが、大学生としての最終目標です」と力強く今後の抱負を語りました。

PROFILE

今野　杏夏（いまの　きょうか）／第１回アジア空道アップ大会初代チャンピオン

1996（平成8）年7月23日生まれ 。宮城県多賀城市出身。163cm／67kg。血液型Ｏ型。小学校５年で空道を始め、高校２年時に「全日本空道ジュニア選手権大会Ｕ19 優勝」・高校３年時に「第1回世界空道ジュニア選手権大会　優勝」・大学１年時に「2015北斗旗全日本空道体力別選手権大会　初出場初優勝」。そして今回、「第１回アジア空道カップ大会」で優勝を果たす。日本空道界を代表する選手。

陸上競技部、佐々木琢磨選手が「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mで金メダル獲得

金メダルを手に笑顔を見せる佐々木選手（中央）＝台湾・台北

１０月４日に台湾の台北で開催された「第８回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mにおいて、本学陸上競技部の佐々木琢磨選手（ささき・たくま）（健康福祉学科４年―岩手・盛岡聴覚支援学校出身）が金メダルを獲得しました。

佐々木選手は、両側内耳性難聴による聴覚障害者２級のろうあ者。佐々木選手は「2017デフリンピック（トルコ・アンカラ）で世界一を目指す」とさらなる飛躍を誓いました。

PROFILE

佐々木 琢磨（ささき たくま）／第８回アジア太平洋ろうあ者競技大会の100ｍで優勝

1993（平成5）年11月30日生まれ 。青森県五戸市出身。167cm／66kg。血液型Ｂ型。青森県立八戸聾学校中等部から陸上を始め、岩手県立盛岡聴覚支援学校高等部３年時に「全国ろうあ者体育大会」の100m・200m・4×100mで三冠を達成。大学２年時に「第２２回夏季ソフィアデフリンピック」の200mと4×100mに日本代表として出場。大学４年時に「第１２回日本聴覚障害者大会」の100mと200mの２種目で３年ぶりに自己ベストを更新（100m：10秒88／200m：22秒51）して優勝。
そして今回、「第８回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mで優勝を果たす。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 115／ 2015 November
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」で3タイプが選定

一昨年より、教育改革等に積極的な私立大学に対する助成拡充の一環として開始された文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」において、本年度助成に関し、仙台大学は、4タイプ中の3タイプ。具体的には、タイプ１「教育の質的転換」、タイプ２「地域発展」、タイプ３「産業界・他大学等との連携」について採択されました。

この事業は、大学教育の質的転換、地域貢献、産学連携、およびグローバル化という、現在、大学が時代から要請されている重要事項について全学的・組織的に取り組んでいる私立大学等に対する支援を強化するため、大学教育の質向上その他各事業の主要項目について取組内容を点数化し、申請大学に各項目の取り組み状況を自己評価させ、その獲得点数が一定基準を上回る場合に選定対象として認定し、選定対象となったタイプについて、経常費・設備費・施設費を一体として５０％を大幅に超える補助率を適用し、重点的に支援するものです。従って、認定の有無は大学改革への取り組みに対する評価指標ともなるものです。

全国の私立大学のうち、４タイプ全てが採択となったのは５大学のみで、仙台大学は、過去２年間は全タイプで採択となってきましたが、今年度は、タイプ４の「グローバル化」は残念ながら不採択となり、英語教育の抜本的改革等が急務となっております。

本年度は、支援内容のうち「教育研究活性化設備整備費補助金」についてはタイプ１「教育の質的転換」＝平成２８年１月３１日づけ完成予定であるラーニング・コモンズ関係（含む同時通訳）、タイプ２「地域発展」＝血糖値測定装置・インボディ、タイプ３「産業界・他大学等との連携」＝足こぎ車いす関係設備として携帯型呼気ガス分析計、ウエアラブル光トポグラフィなどの各設備について整備することとしております。今後はそれぞれ特色ある設備の有効活用により３つの事業タイプを確実に実施し、成果をあげるとともに、大学教育の質の向上、地域社会への貢献その他、時代が要請するところに十分応えることにより、さらに世界へ羽ばたく学術的な大学として歩んで参ります。

＜ 目 次 ＞

文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」で3タイプが選定	1
ベトナムでの日本留学フェア	2
元気アップ＆専門教養演習「オリンピックを学ぶ」第一回集中講義	6
学生記者がプロの現場で奮戦－bjリーグでスポーツ取材・報道実習	6
20年間の感謝をこめて「新体操演技発表会」を開催	8
学生の競技結果	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

ベトナムでの日本留学フェア

ハノイの日本留学フェア

2015年10月30日（金）～11月3日（火）4日間に渡りベトナムの大学との交流と日本留学フェアへ参加して参りました。

10月31日（土）1日目はハノイ市へ行き、ハノイ大学の見学を行いました。他国の大学を見学する貴重な体験をすることができました。ハノイ大学の日本語学科の学生さんと話す機会があり、日本に対する関心がとても強いことがわかりました。将来的には日本で仕事をしたいと考えている方が多いと感じました。

11月1日（日）、2日（月）の2日目間は独立行政法人日本学生支援機構主催日本留学フェアに参加しました。会場は、1日（日）はハノイ市のメリアハノイホテル、2日（月）はホーチミン市のホテルエクアトリアルで行われました。今回の留学フェアでも80を超える大学または企業が参加しました。

留学フェアにお越しくださった学生並びに教員や留学関係の企業関係者が訪れ盛大な留学フェアになりました。仙台大学のブースには2日間を通して59名の方が起こしくださいました。

仙台大学は、ハノイ大学大学院に在学している鈴木美生さんの協力を得ながら大学紹介を行いました。フェア中は先生方のご指導の下、大学の基本理念である【Sports for All】や各学科の特色を伝え、仙台大学で学ぶことができる分野について説明を行いました。留学フェアに参加してくださった学生の多くは、日本語を勉強するために日本への留学を考えていました。仙台大学では日本語を勉強できる学科はないため、スポーツ化学の分野にどのように興味を引き付けさせるかを考えさせられました。

朴澤理事長・学事顧問から「日本語を身に付けることは大事だが、それを使って何を学ぶかのほうが大切である。」とアドバイスをいただきました。

留学フェアに参加した学生は、日本語を習得した後のことを深く考えている方は少なかったと感じました。スポーツ化学の分野に関心がなかった学生も日本語を駆使して活躍できる場の１つにスポーツの分野もあることを知ってもらえたと感じました。

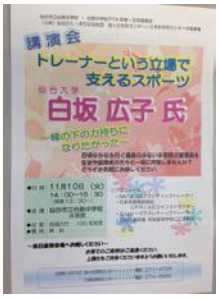
11月3日（火）は、ホテルエクアトリアル内会議室にてプレゼンテーションを実施した。村上新助手は「運動栄養学とは」、齋藤新助手は「健康づくり運動サポーター養成事業について」、関矢教授「足こぎ車椅子の効果と実践について」の順で行い、ホーチミン市体育大学教員と学生が参加しました。今回の運動栄養学科のプレゼンテーション内容では、ベトナムに栄養士という資格がないため、栄養に対する関心がやや低いと感じました。動画は多くの興味を引き付けるのに効果的なので、画像だけでなく動画を多く活用する工夫も必要であると感じました。今回の貴重な経験を今後の活動に生かしたいと考えています。

＜報　告：新助手　村上　昴＞

ホーチミン体育大学生に対してのプレゼンテーション

新助手の白坂広子トレーナーが講演in仙台市立台原中学校

平成27年11月10日、仙台市立台原中学校にて「トレーナーという立場で支えるスポーツ　～縁の下の力持ちになりたかった～」という題目で講演をさせていただきました。この講演会は台原中学校、台原中ＰＴＡ研修、交流委員会、旭ヶ丘市民センター、三本松市民センターとの事業企画会により企画された講演会で、全校生徒がテーマを共有し、学び、気づき、考える機会を提供し、今回はスポーツ選手を身体面から支えるスポーツトレーナーの仕事を取り上げ、仕事に向き合う姿勢や思いを聞くことにより目標に向けて努力することの意義や職業観を育むための一助であるということでした。



そしてスポーツを通してトレーナーという立場から「支える側の魅力や重要性を伝えて欲しい」、という内容でした。私は地域、学校としてトレーナーという職業をモデルに支える側の重要性を知りたいと考えてくださったことに驚きを感じながらも、数あるサポート的職業のなかでトレーナーという存在にスポットを当ててくれたことをとても嬉しく感じました。そして、表舞台に立つことだけが輝かしいことではなく、表舞台に立つ人の陰にはいろいろな形で支えている人が存在し、その存在があるからこそ輝ける人がいること、そして支えている存在は表舞台を目指して支えている訳ではなく、支えることが喜びである、ということを生徒に伝えたいと思い、ご依頼をお引き受けしました。

当日は台原中学校全校生徒、教職員の皆様、旭ヶ丘市民センターと三本松市民センターの皆様、地域からご参加下さった一般の方々、約700名を対象に1時間程度の講演となりました。生徒は比較的積極的に講演会を聞き、途中で私のほうから質問をした際などしっかりとした意見を出してくれたり、ユーモアで返答してくれたりと、明るい雰囲気で講演会を進行することができました。トレーナーを目指すまでどのように人生を考えていたのか、目指す職業に出会ってからどのように考え方が変わったのかなど、留学経験談を交えながら話をしました。

そしてトレーナーという職業の大前提はスポーツ現場に医療的サポートを配置し「スポーツ人口の命を守る」ということ、そして、勝つために努力をするアスリートのために健康、体、傷害に関してサポート役に徹することのやりがい、楽しさ、大変さなどを、プロリーグや大学、高校での活動経験のもとお話をさせて頂きました。質疑応答では、生徒からトレーナーの活動時間について、給料について、やっていてよかったと思う瞬間、などの質問があがり、職業として興味を少しでも持ってもらえたのではないかと感じています。また、一般の参加者の方からはトレーナーという立場の日本の法整備について、これからのトレーナーという職業のあり方、などの質問があがりました。講演後、運動部活動所属生徒の約80名が集まり、試合と試合の間で行えるダイナミックストレッチ実技講座を即席で行いました。また、基礎的な筋力トレーニングの方法、各部活動ごとで悩んでいる怪我などについての質問があがり、約1時間改めて生徒に指導しました。

私はこの講演会を通して、改めてトレーナーという職業の意味を考えました。そしてその職業の重要性を再認識し、発展に繋げることの任務を感じました。また、講演会を通して人との出会いの尊さを感じることができました。人は人と仕事を通して繋がり、その繋がりが違う出会いの始まりとなり、そしてまた誰かと繋がっていきます。トレーナーは人間関係が良好で、関わる指導者たちと信頼関係が生まれるからこそ成り立つ職業です。つまり、トレーナーは人間関係の繋がりを大切にできるからこそ発展していく職業なのです。一つ一つの出会いを大切にし、これからもサポート役、トレーナー、人間としてこの職業を通じ精進していきたいと思っています。

＜講演報告：新助手　白坂広子＞

柴田町16区行政区地域交流イベント「秋の大運動会」を開催

11月8日（日）に槻木体育館で「秋の大運動会」が開催されました。このイベントは毎年、柴田町16区行政区と合同で開催しているもので、今年で6年目となります。本学独自の認定資格である健康づくり運動サポーターの上級実習の一環として、上級実習生2名がイベントの企画・運営を行いました。今年は「運動する楽しさを知っていただくこと」、「住民同士のコミュニケーションだけでなく、学生とも交流を深め仙台大学の活動についてしってもらう」ことを目的として、10月上旬から16区代表者、柴田町福祉課、上級実習生の3者で話し合いを重ね当日を迎えました。

当日は上級実習生の他に、健康づくり運動サポーター（健サポ）15名と小池教授、新助手3名がスタッフとして運営に携わりました。体組成や骨密度を測定できる測定コーナーや健康づくりのための講話や運動を行う健康指導コーナー、楽しみながら身体を動かすニュースポーツコーナーを実施し、健康づくりについての理解を深めてもらいました。

後半には、参加者全員で楽しむ運試し競争や玉入れ等運動会を実施し、一生懸命に体を動かしながらも楽しんでいるのが印象的でした。イベントには78名の方に集まっていただき、大盛況のうちに終えることができました。

上級実習としてイベントを企画した佐藤達也さん（体育学科4年）は「参加者と学生が触れ合える内容を意識しました。当日は参加者も学生も楽しんでくれて良かったです」と、宍戸香菜子さん（健康福祉学科3年）は「将来は養護教諭を目指しています。人を動かす大変さを学生のうちに経験できたことは財産です」とそれぞれ感想を述べました。

普段、学生たちは授業など大学の中でも知識や技術を得ていますが、学外で地域の方々と触れ合う中で学内での学びが生きた学びとなり、現場で活躍できる力を身につけることができていると感じています。健サポの学生たちが社会に出た時に即戦力として活躍できるよう、今後もしっかりとサポートしていきたいです。

＜報　告：新助手　齋藤まり＞

給食運営実習Ⅰでの昼食提供について

下処理の様子

盛り付けの様子

実際の食事（10月30日）

食事の様子

1.実習の概要

運動栄養学科3年後期に開講されている給食運営実習Ⅰは、栄養士免許取得のための必修科目であり、大量調理（60食程度）を行う実習を実施しています。3年前期までに学んだ献立作成、発注業務、調理作業、衛生管理などの知識や技術を使って学生が主体となり食事の提供を行う実習です。栄養士班3～4名の学生が調理班である10名程度の学生に指示を出して調理作業を実施しています。

2.実習の特徴

本実習を行う集団給食実習室には、大量調理専用の調理機器があり、100人分程度を一度に調理することが出来る回転釜や大量の食材を短時間で切ることが出来るフードカッターなどの使い方を学びながら作業をしています。また、煮崩れを防ぐ調理方法や味付けの仕方など大量調理ならではの注意点があります。更に、調理作業中の細菌の混入や食中毒を予防するために、ボウルやザルなどの調理器具は肉、魚、野菜など食材ごとに専用のものを使っています。

3.昼食の食券販売について

本実習では、教職員の方々に食券を購入してもらうことで、より実践に近い形で緊張感を体験と給食に対する客観的な評価を得られることを期待し食券を販売しています。これまで延べ５４人の方々に食券をご購入いただきました。お時間のある方は、ぜひ学生が調理した食事を食べに来てください。

【提供時間】11：00～11：30
（11/6～12/18までの毎週木・金曜日）
【食券価格】400円
【提供場所】25記念館1階 集団給食実習室食堂
【担当者】　岩田 純、渡部 由佳、三品 朋子

※ご希望の方は担当者まで内線もしくはメールにてお知らせください。

菊地眞一氏を偲ぶ会

今年８月に急逝された川交会(前)会長の故菊地眞一氏を偲ぶ会が、１１月１０日午後５時３０分より本学の学生食堂において行われ、故人と親交のあった関係者約５０人が出席されました。

故人は平成元年に川交会を発足させた方で、柴田町の福祉劇団「鶴亀」等の立役者でもありました。川交会は、白石川と阿武隈川が交わる場所という意味で命名され、地元柴田町にある本学のスポーツサークルを協力して支え応援していこうという有志の会です。その応援や支援は硬式野球部に始まり、その後ボブスレー・リュージュ・スケルトン部、新体操競技部、漕艇部に広がりました。

偲ぶ会では始めに故人への黙祷が行われ、続いて学校法人朴沢学園朴澤泰治理事長より主催者挨拶がありました。

思い出のスピーチでは、柴田町ボート協会会長の児玉裕雄氏の「菊地眞一さんの遺志をこれからも引き継ぎ、漕艇部の活躍を祈念し、できる限り応援ししていきたい」、とのお言葉に続き、川交会(現)会長の大沼英一氏からは「仙台大学が存在する限り次代を担う若人を支援していきたい」、宮城県ボブスレー・リュージュ連盟会長の大沼迪義氏からは「そり競技を全国に広めたいと語っていた眞ちゃんとの交わりはかけがえのないものだと思っています」とのお話がありました。また、高橋義夫硬式野球部長、森本吉謙硬式野球部監督、阿部肇漕艇部監督、斎藤幸一元柴田町議会議員、安部俊三柴田町議会議員のスピーチもあり、親交の深さがうかがえました。

喪主謝辞では、子息である本学の菊地太一庶務課長の氏より、ご参集の方々への感謝と故人との思い出話が述べられました。

おわりに、鈴木省三副学長より、「３１年前にサラエボで行われた冬季オリンピックへの出発前に行われた壮行会で菊地眞一さんから熱い抱擁を受け、仙台大学の世界一の応援団と感じた」と、その当時のエピソードが披露されました。また、２０２０年に東京で開催される夏季オリンピックでは「念ずれば道ひらく」との意気込みで、是非仙台大学からメダリストを出したいと力強い閉会の挨拶がありました。

会は故人が気さくで親しみやすいお人柄だったこともあり、終始和やかな雰囲気の中で行われました。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

＜報　告：庶務課担当課長　石渡修一＞

秋のプラスチックそり大会を初開催―滑って輝く子どもたちの笑顔

プラそり競争を盛り上げる仙台大生と子どもたち＝太陽の村

１１月７日（土）、柴田町の太陽の村で、傾斜２５度の芝生の上をプラスチック製のソリに乗って３０ｍ先のゴールまでのタイムを競う「秋のプラそり大会」が初開催され、小学１年生から小学６年生までの児童３３名が参加しました。プラそり大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ・スケルトン」などのソリ競技の魅力を知ってもらうことを目的として、宮城県ボブスレー・リュージュ連盟が主催し、仙台大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部が協力して行なわれました。

子どもたちは、仙台大生から速く滑るコツや乗り方・止まり方などを教わり、歓声を上げながらソリ競争を存分に楽しみました。

小学校低学年の部で優勝した村田町立村田小学校２年の女子児童は、「大学生に、滑る時は体を動かさないようにすることがスピードを出すコツと教わりました。怖くなかったし、楽しかったです。またやりたいです」と語ってくれました。

本学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の浅野拓海さん（体育学科３年－宮城・利府高校出身）は「子どもたちから、笑顔で「楽しい」・「面白い」・「もう一回やりたい」などの言葉が聞けて、本当に嬉しかったです。企画運営は大変でしたが、達成感があり、仲間と協力することの大切も実感し、多くを学ぶことができました。この経験を活かして、来年に繋げていきたいです」と話しました。

元気アップ＆専門教養演習「オリンピックを学ぶ」第一回集中講義

１１月２３日（勤労感謝の日）スポ情専門教養演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと元気アッププログラム集中授業がＪＳＣ日本スポーツ振興センタースポーツ開発事業推進部長でＪＩＳＳ副センター長、ナショナルトレーニングセンター副センター長を務める勝田隆氏を講師に招き行われた。集中授業は勝田氏のキーノートレクチャーからスタートしグループで討論と発表が行われた。

この日のテーマは「２０２０年に向けて、２０２０年を越えて」と題し、スポーツ界・ＩＯＣはじめ世界のトップスポーツ指導者が口にするキーワードintegrity（インテグリティー）がスポーツにとっていかに重要か、また東京オリンピックに寄せられる日本への期待、将来のスポーツ界の姿を話し合った。

この中で勝田氏は前ＩＯＣ会長ジャックロゲが警告した「スポーツ界は危機に瀕している」を紹介しスポーツのINTEGRITYを脅かす要因が増えている中、世界が規律正しい日本（世界は津波震災時の被災者の人間としての高潔性に驚嘆）、東京がオリンピック会場に選ばれた理由の一端と説明。

またスポーツ界の考え方、組織体制を変えるには①危機的状況に落ち入った時、②カリスマリーダーが出現した時③自国開催のオリンピックの時であるとしてスポーツの新しい時代に向けて2020TOKYOは重要。皆がこの問題に向き合うことがオリンピックを成功させ、次の時代のスポーツのあり方を決めていく要素になるだろうと話した。この後学生たちは2020TOKYOに向け、何をしたら良いかなどを真剣に討論し充実した発表を行った。

＜報　告：スポーツ情報マスメディア学科
教　授　山内　亨＞

学生記者がプロの現場で奮戦－bjリーグでスポーツ取材・報道実習

プロの記者に交じり、バスケットボールの試合を取材する、スポーツ情報マスメディア学科の「スポーツ取材・報道実習Ⅰ」が11月28、29日、仙台市青葉区の仙台市青葉体育館で行われました。

取材対象は、プロ・バスケットボールのbjリーグ2015－2016シーズン第17、18戦、仙台89ERS対横浜ビー・コルセアーズ。首位に躍り出た仙台がその座を守れるか、直前まで3連勝中の横浜が一気に勢いに乗れるかが注目されたカードでした。

実習に参加したのは28日に4人、29日に7人の計11人でした。学生たちは両日とも仙台89ERSを運営する「仙台スポーツリンク」の女性広報担当から、広報の業務内容やゲーム写真取材のポジションなどについて説明を受けた後、2人1組となって交互にスタンドでの観戦取材と、プロカメラマンと一緒にゴールエンドに座り込んでのデジタルカメラによる写真取材をそれぞれ体験しました。試合前には仙台大学OGで仙台89ERSのチアリーダーを務める鈴木保之香さんらのパフォーマンスも写真に収めました。

試合結果は、初日が仙台、2日目が横浜のそれぞれ勝利でしたが、仙台はかろうじて首位を守りました。試合後の記者会見は両日とも仙台の「首位」に絡む内容が中心でした。学生記者たちは新聞社、テレビ局、雑誌社のプロ記者たちを取り囲むようにして、ヘッドコーチや指名選手の会見内容をメモしました。プロの記者たちの会見後は、仙台大学取材陣による単独インタビューです。リクエストしたのはもちろん両日とも仙台大学OBで89ERSの佐藤文哉選手。初日はプロ記者も一部交り、佐藤選手への質問は後輩の学生が取材に訪れたことに対する感想にまで及びましたが、2日目は完全単独インタビューとなりました。両日ともやや遠慮がちな学生に対し、快く会見リクエストに応じ、丁寧に質問に答えてくれた佐藤選手の姿が印象的でした。

＜報　告：スポーツ情報マスメディア学科
教 授　高橋　義夫＞

第11回スポーツシンポジウム　～もっとスポーツを楽しむために～ を開催

西村氏（右）による基調講演の様子（聞き手・吉井講師）
＝せんだいメディアテーク

平成27年11月24日せんだいメディアテークを会場に、第11回スポーツシンポジウム（主催：仙台市、河北新報社、仙台大学、協力：スポーツコミッションせんだい）を開催しました。

今年のテーマは「もっとスポーツを楽しむために」で基調講演とパネルディスカッションの2部構成でのシンポジウムが行われ約300名の来場者が席を埋め尽くしました。

第一部の基調講演には2010・2014FIFAワールドカップレフェリーを務めた西村雄一氏を迎え、全世界から集結した90名のワールドカップレフェリーたちの様々なトレーニングの様子などが紹介されました。

後半は本学サッカー部監督の吉井秀邦講師を聞き手に試合映像を交え、あらゆる場面を想定し正しくジャッジする難しさなどが語られました。

第二部のパネルディスカッションでは、新体操団体日本代表で元フェアリージャパンPOLAの三澤樹知氏、東北楽天イーグルスチアリーダー東北ゴールデンエンジェルスで結成時から11年間活躍を続け2012年からはチームリーダーも務める本学卒業生の上田亜樹氏（健康福祉学科卒）、本学からは2014仁川パラ陸上競技大会女子砲丸投げ世界記録保持者で、パラリンピック出場を目指す加藤由希子さん（健康福祉学科4年）と宮西智久教授（体育科学博士・専門バイオメカニクス）の4名それぞれの立場からの競技の関わりと自身の経験などが話されコーディネーターを菊地直子准教授が務めました。

会場には西村さんを通じてお借りした、ワールドカップでのメダルやユニフォームなどとともに本学の紹介パネルを多数展示し、来場者に本学の魅力を説明と共に伝える試みも新たに行い、多数の来場者の興味関心を得ることができました。

仙台大学柔道塾、小学生男子団体の部「初優勝」を阿部学長へ報告

初優勝を飾った仙台大学柔道塾生ら＝学長室

１０月２５日（日）、宮城県武道館柔道場で「宮城県スポーツ少年団柔道交流大会」が開催され、仙台大学柔道塾が小学生男子団体の部で初優勝を飾りました。

本学では、体育系大学の特色を生かした地域貢献活動の一つとして、ジュニアアスリートの育成に取り組んでいます。その中の一つである「仙台大学柔道塾」（２０１１年７月発足）には、現在、幼稚園年長から中学生までの約４０名が在籍し、週３回の稽古で汗を流しています。

子どもたちの指導にあたっているのは、仙台大学柔道部総監督であり、柔道女子日本代表監督でもある南條充寿塾長【後列中央】と南條和恵仙台大学女子柔道部監督【後列右端】。加えて、本学柔道部の学生たちです。

１１月１７日（火）、同大会小学生男子団体の部で見事初優勝を果たした仙台大学柔道塾生５名とその保護者が、南條塾長と南條和恵監督と共に、阿部芳吉学長【後列左端】へ「優勝」の報告を行ない、優勝旗や賞状が披露されました。阿部学長は「凄いな。最後の最後まで頑張って良かったな。もっともっと伸びて、将来は仙台大でオリンピック選手になってほしい」と子どもたちへ労いと激励の言葉を述べられ、南條塾長は「柔道塾の目的は、地域密着型の柔道を通じて柴田町を元気にすること。初優勝は嬉しいが、次につながるよう日々の稽古に励みたい」と気を引き締めました。中堅の太田晴仁君（船岡小学校６年生）【前列中央】は「（団体決勝を含めて）４試合戦って２勝２敗でした。何一つ満足していません。個人的には悔しい大会でしたが、団体優勝は嬉しいです」と話してくれました。

20年間の感謝をこめて「新体操演技発表会」を開催

仙台大学男女新体操競技部による最終演技＝仙台大学第五体育館

１１月２９日（日）、仙台大学第五体育館で、本学男女新体操競技部主催の「第２０回新体操演技発表会Next stage～２０年間の感謝をこめて～」が開催されました。

最初に仙台大学を代表して、朴澤泰治理事長・学事顧問は「２０回という節目を迎えることができたことは、非常に感慨深い気持ちである。新体操はオリンピックの正式種目。２０２０年の東京オリンピックに向けて活躍するアスリートを育成すると共に、本学の地域貢献の一つとしてジュニア新体操教室を開催している。子どもたちの元気な演技を楽しみにしている」と挨拶。

出演は、本学男女新体操競技部・仙台大学開放講座ジュニア新体操教室・本学ブレイキン同好会に加え、小野桜菜選手（仙台スピン体操クラブ）と泉田佳穂選手（仙台ジュニア体育研究所）にも賛助出演して頂き、発表会を盛り上げて頂きました。各選手たちは、それぞれの持ち味を十分に発揮し、素晴らしい演技で会場を埋めた３００名余を魅了しました。最終演技が終わると、会場からは惜しみない拍手が送られ、第２０回新体操演技発表会は盛会裏に終了しました。

発表会終了後、本学女子新体操競技部の桑原玲美主将（体育学科４年－山形・霞城学園高校出身）は「記念すべき第２０回新体操演技発表会。これまでの感謝の気持ちをこめて演技しました。感謝の気持ちを忘れず、これからも部員一丸となって発表会や練習に取り組んでいきますので、応援をよろしくお願い致します」と話しました。

今年で２０回目を迎えた新体操演技発表会は、さわやかな余韻を残し、幕が閉じられました。仙台大学はこれからも新体操演技発表会を続けて参りますので、温かいご支援・ご声援をよろしくお願い致します。

平成27年度　防犯まちづくり多賀城市民のつどい 阿部学長が「地域で守る子どもたち」と題し講演を行いました

写真提供：多賀城市総務部交通防災課

平成27年11月21日（土）多賀城市民会館において、多賀城市防犯まちづくり推進協議会と多賀城市が主催する「平成27年度防犯まちづくり多賀城市民のつどい」が開催され、阿部学長が「地域で守る子どもたち～子どもが犯罪に巻き込まれないために～」と題した講演を行いました。

当日は地域が一体となって安心できるまちづくりを学ぼうと多賀城市民の方々など約350名が会場に訪れ熱心に耳を傾けました。

阿部学長は、中学校等において校内暴力やいじめ、不登校など生徒指導に関わり、仙台市教育委員会教育長をも務めた経験から、地域の役割や大人の見守りなどが犯罪を防ぐためにいかに大切かなどを分かりやすい表現と聞く人を飽きさせない語り口で、いろいろなエピソードやユーモアを交え話されました。

聴講された市民の方々も良い会だったと満足げに話され、市の担当者の方も親しみやすく、かつ温かみのある講演会で防犯意識も高まり大変好評でした、誠にありがとうございましたと、話してくださいました。

また、講演終了後にはバリトン歌手とピアノ演奏によるミニコンサートも開催され和やかに会が締めくくられました。

男子サッカー部、創部以来初の3冠達成！―15年連続32回目のインカレ出場へ

優勝を果たし３冠ポーズをとる仙台大イレブンら
＝岩手県営運動公園多目的運動場

11月3日（火）、岩手県営運動公園多目的運動場（岩手県盛岡市）で「第40回東北地区大学サッカーリーグ最終節」が行われ、仙台大学が岩手大学を3-0（前半1-0、後半2-0）で破り、優勝（8勝2分）を果たしました。これで本学男子サッカー部は、15年連続32回目のインカレ（第64回全日本大学サッカー選手権大会）出場の切符を手にしました。

仙台大学は前半16分、DF石橋理志選手（体育学科3年－群馬・前橋育英高校出身）のスローインからFW堺俊暉選手（体育学科4年－神奈川・相洋高校出身）がグラウンダークロスを上げ、FW宮澤弘選手（体育学科2年－柏レイソルユース出身）がダイレクトに合わせて先制。後半14分には、ゴール前のこぼれ球に素早く反応したMF蓮沼翔太選手（体育学科4年－柏レイソルユース出身）が、相手DFを交わし技ありの2点目。さらに後半42分、攻守において躍動していたDF川上盛司選手（体育学科2年－鹿島アントラーズユース出身）が3点目のゴールを挙げ、試合を決定づけました。先制ゴールを挙げたFW宮澤選手（同）は「今日の試合は、勝つことしか考えていなかった。ゴールシーンは（良いクロスが来たので）決めるだけでした」と試合を振り返りました。

FW宮澤選手（14）が決勝点となる先制ゴールを
決め喜びを表す。

本年度の本学男子サッカー部は、「総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント東北地区予選」、「天皇杯全日本サッカー選手権大会宮城県予選」も制しており、1968年の創部以来初となる3冠を達成しました。10年前、天皇杯に初出場した2005年度は、総理大臣杯予選・インカレ予選ともに優勝を逃していました。また、その後は幾度も総理大臣杯予選とインカレ予選で優勝しながらも天皇杯の出場権を獲得できず、3冠達成は目標としながらも高い壁となっていました。

悲願の3冠を達成した吉井秀邦監督は「今年のチームは、総理大臣杯・天皇杯・インカレと全ての予選を制し3冠を達成したということで、最強世代だと思っている。このチームでインカレに挑戦できる権利を得たことは、凄く楽しみであり自信を持って臨むことができる」と喜びを表しながらも、落ち着いた様子で次（インカレ）に向けての抱負を述べられました。

インカレは、12月8日（火）から町田市陸上競技場（東京都）等を会場として開催される予定です。また、上記の大会の他に、男子サッカー部のＢチームが「東北地区大学総体」・Ａ２チームが「インディペンデンスリーグ」で優勝を果たしており、東北地区で本学男子サッカー部がその実力を轟かせた一年となりました。

引き続き、本学男子サッカー部への熱いご声援をよろしくお願い致します。

**＜記事･写真：スポーツ情報マスメディア学科
溝上拓志新助手提供＞**

DF川上選手（2）が試合を決定づける３点目の
ゴールを挙げた。

仙台大初のプロ野球選手・熊原健人投手が横浜DeNA新入団選手発表会にて、背番号「1」が決定！

フォトセッションにてガッツポーズする熊原投手（前列中央）

11月27日（金）、横浜DeNAベイスターズ新入団選手発表会が横浜市内のホテルにて行われ、同球団からドラフト２位指名を受けた本学硬式野球部・熊原健人投手（体育学科4年−宮城・柴田高校出身）が出席しました。

新人各選手が色紙に漢字２文字で抱負をしたためる中、熊原投手は〝進歩〟と記し、「自分はまだまだ未熟で成長するところがたくさんあるんですけど、一日一日を無駄にせず、少しでも進歩して、なりたい自分になれるように」と、その意図を説明。

背番号は「１」に決まり、「（山下大輔、谷繁元信、金城龍彦など歴代のスター選手が付けた）重みのある番号。ルーキーの自分が付けていいのかと思うけど、それだけ期待されているのだと、与えてくださった球団に感謝したいです。将来的には『ベイスターズの背番号１といえば、熊原だ』と思われるようになりたいです」。

代表質問では、１年目の目標を聞かれ「開幕１軍。先発として勝ち星を重ねて（昨年大学ジャパンでもチームメイトだった）山﨑康晃さんのように新人王を獲りたい」。また自らのセールスポイントに「内角を強気に攻める、投げっぷりの良さ」を挙げるなど、終始緊張の面持ちながらも力強くプロとしての決意を述べました。

熊原投手は、来春のキャンプでドラフト１位・今永昇太投手（駒澤大学）らとともに１軍帯同が見込まれています。球団史上初となる２年連続の新人王に、大いなる期待が持てそうです。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 116／ 2015 December
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

明成高校との高大連携事業で成果結実
佐藤久夫教授率いる明成高校3連覇達成！―
ﾊﾞｽｹｯﾄ･全国高校選抜優勝大会（ｳｲﾝﾀｰｶｯﾌﾟ）

写真：明成高校提供

12月29日（金）、バスケットボールの全国高校選抜優勝大会（ウインターカップ）男子決勝が東京体育館で行なわれ、本学の佐藤久夫教授率いる明成高校（総体１位・宮城県）が土浦日大高校（茨城県）を７８－７３で破り、３年連続４度目の優勝を果たしました。

本学と姉妹校である明成高校は、「高大連携」の取り組みの一つとして、男子バスケットボール部の強化を行なっております。明成高校男子バスケットボール部は、本学の佐藤久夫教授が指揮を執り、本学の高橋陽介講師がチームトレーナーとして選手たちをサポートしております。

この度、明成高校と本学との高大連携事業が結実し、バスケット全国高校選抜優勝大会（ウインターカップ）で見事３連覇（４度目の日本一）という快挙を成し遂げました。

引き続き、明成高校男子バスケットボール部への熱い応援をよろしくお願い致します。

＜佐藤久夫教授と高橋陽介講師のお話（１月８日）＞

「昨年末に開催された全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会におきまして、優勝という結果で終える事が出来たことを誠に嬉しく思っております。高大連携事業において良い結果を出すことが出来たのも、大学そして高校の方々のご理解とご支援があってのことと感じております。厚く御礼申し上げます。　今後も、高校での現場指導経験を大学での教育に活かし、大学での研究・教育を通して学んでいることを高校での現場指導に活かしていくことで、高大連携事業の効果を出していきたいと考えております。」

＜　目　次　＞

明成高校と本学との高大連携事業で成果結実―本学の佐藤久夫教授率いる明成3連覇達成！／バスケット全国高校選抜優勝大会（ウインターカップ）	1
白石市･柴田町･仙台大学の連携による2020東京オリンピック･パラリンピック事前キャンプ等招致記者会見を開催	2
「安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議」で田中智仁准教授が講演	3
運動栄養サポーター認定証書授与式を初開催	4
日中国際共同研究　研究協議会	4
学生の競技結果	8

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見･ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL　0224-55-1802
FAX　0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

白石市･柴田町･仙台大学の連携による2020東京オリンピック･パラリンピック事前キャンプ等招致記者会見を開催

招致成功に向け、両手で固い握手を交わす３者代表＝仙台大学
（左から滝口柴田町長･風間白石市長・朴澤理事長・阿部学長）

12月22日（火）、白石市・柴田町・仙台大学は、2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、事前キャンプ等の招致を連携して推進していくことで合意しました。同日、本学管理研究棟２階大会議室で、風間康静白石市長、滝口茂柴田町長、朴澤泰治理事長･学事顧問、阿部芳吉学長による「2020東京オリンピック･パラリンピック事前キャンプ等招致記者会見」が開催されました。

行政側を代表して風間白石市長は、「官民一体となって、招致活動を成功させていく取り組みを行なっていきたい。地方創生を見据え、仙南地域活性化の起爆剤にもしていきたい」。仙台大学を代表して朴澤理事長は、「教育・研究に留まらず、地域貢献も大学の大きな責務の一つである。地域と一体となって、2020年東京オリンピック・パラリンピックに関与していきたい。招致が実現すれば、人材育成にも役立てる絶好の機会になる」と期待を込めて話されました。

今後は、本年度中に協議会を設置して、白石市・柴田町・仙台大学の概要や競技施設、滞在環境などを紹介するホームページやガイドブック・プロモーションビデオを制作し、積極的な招致活動を展開していきます。また、招致種目は、現時点では絞らず、オリンピック・パラリンピック双方の幅広い競技について招致を検討していきます。

消防訓練を実施しました

仕事納めである１２月２８日（月）仙南地域広域行政事務組合柴田消防署予防係・消防士長の沼田純一氏他のご協力の下、消防訓練を実施しました。今回は学生食堂から出火したという想定で、約６０人の教職員が参加し、真剣に取り組みました。

１１９番への通報後、本番さながらに火災消火班や避難誘導班、情報連絡班がそれぞれの持ち場である火元や守衛室に駆けつけ、その他の教職員は速やかに噴水前に避難、実際に火災消火班数名が消火器を使っての消火と放水を体験しました。

消火活動を行った一人の太田教授は「今まで何度も消防訓練に立ちあってきたものの、自分で消火器に触るのは初めてで、実際にグリップを握ってみるとその力具合などがよく分かり、勉強になった」そうです。

沼田消防士長は「火事が起きた際、１番大事なポイントは大きな声で、火事だ！と叫び、自分１人で対処しようとせず、できるだけ多くの助けを求めることです。初期消火が大切なのはもちろんですが、もし火を見て冷静でいられなかったり、消火器の使い方がわからず戸惑った場合には、ともかく一刻も早く逃げ、自分の命を最優先にしてください」と話されました。

阿部学長は「今日の訓練をこれからの生活に活かしましょう」と述べ、最後に沼田消防士長より「昨日も近隣で火事が２件起きました。これから放火が増える季節でもあり、燃えやすい物をできるだけ家の周辺におかないよう心がけることも大切です」といった具体的なアドバイスを頂戴し、終了となりました。

年が明ける３月には東日本大震災から５年目を迎えます。地震や火事など災害に強い大学として、日頃から防災の意識を忘れず予防に努めて参りましょう。

「安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議」で田中智仁准教授が講演

平成27年12月7日（月）角田市市民センターにおいて、「平成27年度安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議研修会」が開催され、田中智仁准教授が講師を務めました。この研修は市の生活安全条例の趣旨に基づき、関係機関等が情報や意見交換の場を通じて安心・安全なまちづくりを実現するため、共通認識もって防犯活動の促進に努めることを目的として毎年開催されており、角田市の防犯協会連合会をはじめ子ども会育成会、各行政区長や民生委員など約40名が聴講しました。

「気軽にできる地域の防犯活動」と題して行われた今回の講演で田中先生は、犯罪発生に至るまでの仕組みをフローチャートで示し、犯罪行動を起こしにくくするために、防犯の環境設定が重要であることなどを話され、コンビニエンスストアの商品棚やレジの図を用いて少しの配置の工夫で死角を減らし犯罪を抑止することができること、また空き巣に狙われやすいのはどの家か？など3つのモデルケースから狙われやすい家を選ぶ問題も出題され、参加者が考え挙手して問題点を探るテストが行われるなど物理的・心理的に犯罪者を遠ざける環境づくりが防犯に役立つことなどの説明がありました。

質疑応答の時間、少年補導員からは地域の小学校等における「あいさつ運動」が果たす役割についての質問、行政区長の方からは「地域の空き家問題」についての質問がなされ、田中先生も一つひとつの質問に丁寧に答えていました。地域の様々な課題に対し地域の手で守ろうとする角田市の方々の意識の高さがうかがえました。

4ヵ国13名の留学生が日本の文化に触れる ～日本の原風景・とよま町を訪ねて～

留学生たちへ日本の囲炉裏について説明する伊達客員教授【右から３番目】＝武家屋敷「春蘭亭」

１２月１２日（土）、日本の文化に触れことを目的として、中国・台湾・ベトナム・ドイツからの留学生１３名が日本文化体験学習「日本の原風景・とよま町を訪ねて」（仙台大学学生支援センター主催）で宮城県登米市を訪れました。

留学生たちは、登米市の登米伊達家第１６代目である本学の伊達宗弘客員教授の案内で、教育資料館（旧登米高等尋常小学校）・伝統芸能伝承館・北上川河畔・武家屋敷「春蘭亭」を見学しました。

さらに、留学生たちは、養蜂園を経営している伊達客員教授の自宅に招かれ、ミツバチや養蜂についての説明を聞いたり、伊達家の歴史資料を拝見したり、おもてなしのお菓子とお茶を御馳走になったりと歓迎を受けました。ドイツのカール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクからの留学生であるピア･カタリナ･フローベルクさんは、「囲炉裏は初めて見ました。また、ドイツに抹茶はありません。日本の文化に触れ、ますます日本に興味を持ちました」。ベトナムのホーチミン市体育大学からの留学生であるグェン・タン・チュンさんは、「登米市の歴史的な建造物や伊達家ゆかりの鎧や兜などの武具の品々に触れ、本当に楽しく素晴らしい一日でした」と感想を話しました。

伊達客員教授は「古き良き時代の日本の原風景が登米には残っています。今回の体験学習が留学生たちにとって日本の文化・環境を知る良い機会になったらと思います。自国と日本の文化のあり方や違いを知り、客観的に日本を見てほしいです。ずっと留学生たちの心に残る経験、良い思い出になっていれば幸いです」と話されました。

運動栄養サポーター認定証書授与式を初開催

１２月９日（水）、本学管理研究棟２階大会議室で、本学運動栄養学科生の「運動栄養サポーター認定証書授与式」が初開催されました。今回は、運動栄養サポーターとして、Stage1取得者２２名・Stage2取得者１４名の計３６名が認定されました。

「運動栄養サポーター」は、健康増進や運動・スポーツの現場において、運動・スポーツをする人に対して栄養指導を行なう知識と技能を習得できたと認められた者に対し、本学運動栄養学科が独自に認定する学内資格です。運動栄養サポーターの養成プログラムでは、運動・スポーツと栄養に関する基礎知識に加えて、専門的知識を備える「勉強会」と実践的技能を身につける「実習」・「課題」によるカリキュラムから構成されています。

カリキュラムは4段階のStageごとに構成されており、各Stageを取得すると様々な能力や活動の実施が認められます。さらに、本学では、運動栄養サポート研究会へ入会し、本学の運動部に対して栄養サポート活動を実施することで、実践経験を積むことができます。

同授与式では、阿部芳吉学長より、認定者を代表して、清野鉄雄さん【写真】（運動栄養学科2年ー福島成蹊高校出身）へ認定証が手渡されました。

阿部学長からは「選手に対する心遣いや苦労があったと思います。努力は必ず報われます。自分の将来の夢に向かって実力を身に付け、さらに成長した姿を見せてほしい」。吉田龍哉事務局長からは「夢に向かって様々なことに挑戦し、充実した学生生活を送られることを切に願っております。事務局としてサポートしていきます」と学生たちに激励の言葉を述べられました。

同授与式終了後、清野さんは「栄養サポート活動に必要な基礎知識や技術を身に付け、意欲的に経験を積み、実践面を高めて後輩たちを引っ張っていけるようになりたいです。一人前のスポーツ栄養士になれるよう日々精進して参ります」とさらなる飛躍を誓いました。

日中国際共同研究　研究協議会

１２月１９日、中国の上海体育学院にて、国際共同研究協議会が行われた。本研究は、本学と国際交流協定機関である中国青海省体育科学研究所、上海体育学院および瀋陽師範大学の４教育研究機関共同で、一般成人の健康状況について、日・中間比較、高・低地間比較という観点で、中国高地の青海省西寧市住民、中国東北部平地の瀋陽市住民、中国東南部平地の上海市住民、および柴田町の一般健常者を対象に、骨密度、体組成、身体活動状況、食習慣等に関して、昨年度より研究調査および測定を実施したものであり、約2600名強のデータを収集した。

国際共同研究協議会の目的は、研究調査成果の発表、今後の方向性について協議することであった。本学の参加者は、青海省共同研究実行委員会の実行委員長である朴澤泰治理事長、健康関連調査担当の実行委員笠原准教授、同早川准教授、同馬佳濛講師、そして、東北師範大学出身の大学院1年生金瑞年氏であった。３名の実行委員は、それぞれ、4地域間の骨密度、体組成および身体活動の状況についての地域間比較結果を、金瑞年氏は柴田町の一般健常者の健康状況について発表を行った。また、共同研究の3機関からは、青海省は体育科学研究所馬所長、瀋陽師範大学は楊光准教授（現東北師範大学准教授）、上海体育学院は陸教授のそれぞれが、所在地と日本のデータを活用し報告を行った。仙台大学からの国費留学生（中野・菊地・石橋の３名）も、上海体育学院大学院生その他とともに協議会に参加し報告を傍聴した。最後に、本共同研究の進むべき方向性を協議し、追加調査や成果の公表方法について４機間の間で合意がなされ、盛会のうちに終了した。

＜報 告：講 師　馬佳濛＞

第３回就職ガイダンス～先輩の話を聞こう～が開催されました

１２月１５日（火）１６時からＢ３００番教室において、第３回就職ガイダンスが実施されました。入試創職部では、学生の就職支援を目的に本学の正規の授業とは別に、独自の就職ガイダンスやセミナーを開講しており、そのカリキュラムの一環として、「先輩の話を聞こう！」というイベントを実施いたしました。

このガイダンスにおきましては、学生に「卒業後の人生設計」を早期に考えさせることで、学生生活を「目標を持って」過ごさせること、また、就職活動をいち早くスタートさせるための動機付けにさせる事をねらいとしており、４年生の先輩や様々な分野の卒業生をお招きし講話を頂戴するというものです。

昨年までは、４年生の体験談のみの内容で実施しておりましたが、今回は、４年生の他に地域企業の発展を担う、宮城県内を勤務地とする若手の卒業生（５名）をお招きいたしました。

卒業生の方には、「現在担当している仕事内容、これまで仕事をしてきてうれしかったこと・つらかったこと（エピソード）、会社を選んだ理由、後輩へのアドバイス」などを中心にお話頂き、学生は真剣に耳を傾けていました。

また、入試創職部では、地元企業の将来を担う人材の育成を図り、地域経済に貢献できる人材を輩出できるよう目指しており、１２月２２日には「魅力ある中堅・中小企業の探し方」というテーマで企業研究セミナーを開催いたしました。引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

＜発 表 者＞

【４年生】

仙台市消防局合格者、宮城県警察合格者、
清山会医療福祉グループ内定者

【卒業生】

宮城トヨタ自動車株式会社、
株式会社ＬＥＯＣ、
株式会社トラストネットワーク、
株式会社グラン・スポール、ゼビオ株式会社

＜報 告：入試創職室担当課長　中鉢芳尚＞

平成27年年度　学生相談室･教育改善企画運営委員会
共同開催教職員研修会「最近の大学生に対する授業実践のヒント」

12月22日（火）13時30分から、平成27年度学生相談室・教育改善企画運営委員会合同開催の教職員研修会が第５体育館大教室で開催されました。講師に聖徳大学教授の八木正一先生をお招きし、教職員と教職を目指す学生約60名が参加しました。

八木先生は、授業の構成理論を中心に研究を進めると同時に、教材や授業プランの開発も行っており、「教科校正のあり方」の検討や、新しいカリキュラム開発にも取り組んでいる教授法の専門家です。今回は「最近の大学生に対する授業実践のヒント」と題し、日頃の教育活動に悩む教員やこれから教育実習等に臨む学生にむけて、教育方法の工夫についてお話を頂きました。

最近の学生にみられる傾向として、勉強ができる学生もできない学生も「授業を楽しんでいない」こと、『学びからの逃走』ともいえる「大学に入った時点で基礎学力が足りない」こと、「自己肯定感や自尊感情が低い」ことの三つが挙げられました。

授業を楽しくするアイディアとして、社会科の授業で本物の婚姻届を書くなどの「要素を工夫」や、具体性・典型性・意外性・挑戦性を取り入れた「教材・教具の工夫」、学生主体で作る・提案することを目的とした「学習活動の工夫」、一文一意の意識、指示行為を直接言わないなどの「教授行為の工夫」が紹介されました。

学生の基礎学力不足には「書かせる」ことの重要性を説き、単純ではあるけれども書かせたことを読み上げるなどの工夫が紹介されました。そして、自尊感情や自己肯定感の低さへの対応として、知っている学生のみ回答できる質問よりも、知っている学生も知らない学生も答えることができる質問を心掛けることの重要性を強調しておられました。学生の心の問題には、まず素人でどうにかなるものと、ならないものの区別をつけなければなりません。そのうえで、学生の主張や思いを傾聴する重要性が述べられました。

評価の視点としては、他者との比較ではなく、個人に着目し、今日どれだけ伸びたかに注目することが大事であること、相手の自尊感情を傷つけない工夫として「あなたがそんなことをすると、私が悲しい」など、主語を「Ｉ」として対応することなど具体的な対応のヒントもお話しいただきました。

今回の八木先生の講義の中は、実際に「CD」や「鼻笛」を使ったり、海外の小中学校で使用されている日本を紹介したイラスト（1975年当時）をご提示くださったりと、聴講者を惹きつける工夫がちりばめられており、授業実践のアイディアを身をもって体感することができました。

改めて、教育は「教授者と学生との間での行為」であり、学生が主体的に学べるよう教授側が工夫をこらすことが重要である、と感じたご講義でした。

＜報 告：准教授　菊地直子＞

中京大学への訪問

私は現在、川平ATRを明成高校により良く根付かせ、アスレティックトレーニングの認知向上・普及を目的とし、他大学や高校で活躍されているNATA-ATCを尋ねてATRを訪問し、良い運営や取り組みを学び、運営上での困難などを調査研究しています。これまでに早稲田実業（東京都国分寺市）、アメリカンスクールインジャパン（東京都調布市）、愛知東邦大学（愛知県名古屋市）へ伺い、ATRを実質運営している方々から設立の経緯、運営方針、様々な取組経験についてお話を伺ってきました。また、昨年10月に日本体育大学で開催された『大学アスリートサポートシステムシンポジウム2015』では、東海大学（有賀教授）、国際武道大学（山本教授）、日本体育大学（西山教授）におけるAT関連事業についても学びました。多くのAT関係者から知恵とアドバイスを頂き、川平ATR運営に役立てていきたいと思っています。

平成27年12月18日は、以前より是非見学させて頂きたかった大学への訪問がついに実現しました。それは愛知県豊田市にある中京大学豊田キャンパスです。エリートアスリートを輩出し続ける歴史ある大学への訪問をとても楽しみにしていました。当日はスポーツ科学部助教の村田先生よりアスレティックトレーニング実習室、スポーツ振興室を案内して頂きました。同大スポーツ健康科学科トレーナーコースには1学年約20名の学生がいるそうです。中京大学は日本体育協会認定校であり、各学生は学生トレーナーとして部活動に所属し、学習したことを実践する場としています。教員は日本体育協会認定アスレティックトレーナー2名のみということで、各部活動での実習に関しては3,4年生が1,2年生を指導するということです。

スポーツ振興室の全体

スポーツ振興室の器具

スポーツ振興室（CSIPプロジェクト）では、高谷氏をはじめとしたNATA-ATCの2名がアメリカEXOS社とプロジェクト提携し、学内と外部のエリートアスリートに対しトレーニング指導をしながら、共同研究や中京大学独自のマニュアル作成などを行っています。お二人は、授業や部活、プロジェクトについて詳細にお話をして下さり、私としても仙台大学での取組を紹介したりするなど、とても有意義な時間となりました。

今回の訪問は、中京大学の前学長であり現在は学事顧問の北川薫先生と「全国体育スポーツ系大学協議会」（旧「体育大学協議会」）などの活動を通して懇意でいらっしゃる朴澤理事長・学事顧問の多大なお力添えにより実現致しました。北川先生はご多忙であるにも関わらず、自ら豊田キャンパスと名古屋キャンパスをご案内して下さいました。豊田キャンパスのスポーツ施設は全てが素晴らしく、他大学にはないオーロラリンクや屋外温水プールなどは特に秀逸で、エリートアスリートを輩出する環境を間近に感じることができました。また、北川先生はキャンパスを案内して下さっている合間にスポーツ科学と共存していなくてはいけない知恵や経験についてお話をして下さいました。北川先生のお計らいで学部教員の方やCISPプロジェクトでご活躍されている方々などと交流を持つこともできました。中京大学訪問で体験した施設見学や出会い、北川先生から頂いた教養は、川平ATRの活動方針を固めるため、さらには私自身のビジョン形成のために貴重な体験となりました。このような機会を与えて下さいました朴澤理事長、阿部学長、ならびにAT関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

＜報 告：新助手　白坂広子＞

女子サッカー部、インカレ初の8強入り逃す

試合前の仙台大学女子サッカー部イレブン（１回戦）
＝兵庫県三木総合防災公園陸上競技場

「第24回全日本大学女子サッカー選手権大会（インカレ）」が兵庫県三木総合防災公園で行なわれ、６年連続出場の本学女子サッカー部（東北第１代表）は、１回戦（12月26日）で札幌大学（北海道代表）と対戦しました。前半5分に直接フリーキックを決められ、先制を許す苦しい展開も、同17分にコーナーキックからDF高野沙緒里選手（体育学科2年－東京・村田女子高校出身）が頭で合わせ同点。前半ロスタイムにMF加賀孝子主将（スポーツ情報マスメディア学科4年－宮城・聖和学園高校出身）が落ち着いてPKを決め、勝ち越し。

後半5分には、MF門間香奈実選手（体育学科4年－宮城・東北高校出身）が左足で決めて３－１と突き放し、後半ロスタイムに加賀主将（同）が２本目のPKを決めて、４－１で逆転勝ちを収めました。

２回戦（12月28日）は、初の８強入りをかけて、静岡産業大学（東海第１代表）と対戦しました。両者立ち上がりから互角の戦いが続き、０－０で前半を折り返しました。後半17分にゴール左からの直接フリーキックを決められ失点。その後、仙台大学が猛攻を仕掛け、相手ゴールに何度も迫りますが、最後までゴールを割れず、０－１で惜敗。インカレ初の８強入りを逃しました。

０―１で迎えた後半、加賀主将がループシュートを放つも、惜しくもゴールポストに阻まれた（２回戦）。
＝兵庫県三木総合防災公園第２球技場

熊原健人投手（体育学科4年）に後援会

地元の少年野球チームの選手から花束を贈呈される熊原投手
＝かくだ田園ホール

仙台大学から初のプロ野球選手となり、横浜ＤｅＮＡベイスターズに入団が決まった本学硬式野球部の熊原健人投手（体育学科4年－宮城・柴田高校出身）の後援会が角田市民有志により発足し、12月7日（月）に「かくだ田園ホール」で激励会が行なわれました。

激励会には角田市民ら約５００名が参加。後援会名誉会長の大友喜助角田市長は「熊原投手の最速１５２Kmの直球を角田宇宙センターにちなんでロケットボールと名付けたい。子どもたちが憧れるプロ野球選手として、長く活躍されることを期待している」と祝辞を述べられました。本学硬式野球部の森本吉謙監督も来賓として招かれ「プロ野球は相当に厳しい世界。良い時も悪い時も変わらず熊原を応援して頂きたい」と話されました。

熊原投手は「両親・仲間・恩師のお陰でプロ野球選手になることができました。子どもたちにも夢を追いかけてほしいです」と語りました。

＜熊原健人投手後援会事務局＞
個人会員年会費：1,000円
問い合わせ：0224-63-3154
（河北新報角田専売所）

BSL部、宮嶋克幸選手（体育学科2年）が「銀」・「銅」獲得－スケルトンアメリカンズカップ

第3戦の表彰式の様子（左から2人目が宮嶋選手）
＝カナダ・ウィスラースライディングセンター

カナダのウィスラースライディングセンターで行なわれた「スケルトンのアメリカンズカップ第3戦・第4戦」において、本学ＢＬＳ部（ボブスレー・リュージュ・スケルトン部）の宮嶋克幸選手（体育学科2年－北海道・札幌丘珠高校出身）が、11月26日の第3戦で2回の合計タイム1分48秒75（出場24選手）で「銀」メダルを獲得。また、11月27日の第4戦では、2回の合計タイム1分48秒74（出場24選手）で「銅」メダルを獲得しました。

2018年の韓国・平昌冬季五輪にスケルトン競技での出場を目指す宮嶋選手に、大会を振り返ってもらうと共に、今後の意気込みなどについてお話しを伺いました。

Q1.大会を振り返って―

初めての国際大会でした。アナウンスの英語がうまく聞き取れないこともあって、かなり緊張しました。正直、滑走前から勝負できる環境ではありませんでした。英語力の重要性を痛感した大会でしたが、英語力を身に付ければ、もっと結果を残せる自信があります。良い経験となった大会でした。

Q2.課題は―

さらに競技力を向上させることは当然ですが、国際大会で勝つためには、英語力を身に付けることが最低条件であると思います。ドイツ語も身に付けることができれば、違う情報を得ることもできますが、まずは英語の習得に励みたいと思います。英語は、パランギ講師の「英会話」の講義を履修しています。また、遠藤保雄教授からは、実践的な英会話を講義外（毎週水曜日5時限）でご指導頂いています。英語に触れる機会を意識的に増やし、自信を持って国際大会に臨んでいきたいです。

Q3.今後の意気込み―

全日本選手権（12月27日）の「優勝」と世界ジュニア選手権（1月18日－26日：ドイツ）で表彰台に立つことが目標です。この二つの目標を達成することが2018年の韓国・平昌冬季五輪への近道になると思っています。感謝の気持ちを忘れず、心から応援してもらえるよう精進していきたいと思います。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 117／ 2016 January
（月1回発行）

大学構内の紅梅

仙台大学 広報室

Monthly Report

＜ 目 次 ＞

体育系大学の特性を活かす「多様な学びの空間（ラーニングコモンズ）」が4月オープン	1
専門機器使い本学で体力測定 —プロ野球楽天新人8選手	2
第4回　全国高校生介護技術コンテストに参加！「奨励賞」受賞	2
阿部学長韓国（龍仁大学・韓国体育大学）訪問	3
DAN DAN DANCE&SPORTS 12thを開催—「挑戦」をテーマに24組がダンスを披露	4
学生の競技結果	6

体育系大学の特性を活かす「多様な学びの空間（ラーニングコモンズ）」が4月オープン

２０１６年４月、仙台大学ＬＣ棟に「多様な学びの空間（ラーニングコモンズ）」がオープンします。ラーニングコモンズは、学生たちによる「SOCIALIZE～出会い～」・「EXTERNALIZE～表現する～」・「VISUALIZE～共に見る～」をコンセプトとしており、既存図書館に接続された大空間は、「固定ミーティングエリア」・「フリーミーティングエリア」で構成されています。各エリアの特徴を活かし、学生の主体的な学びや活動を支援。特に、「フリーミーティングエリア」には、大型マルチビジョン（全国の大学でも最大規模）を三台配置し、迫力ある映像を投影できるシステムを導入しています。同エリアは、体育系大学の特性を活かしたスポーツ・バーのBarの部分を除いた機能を持たせ、世界中のスポーツの実況が楽しめるようになっています。

１月２７日（水）、仙台大学ＬＣ棟の引渡式ならびに披露式が執り行なわれました。引渡式で朴澤泰治理事長は「体育系大学としての新たな学びの空間（ラーニングコモンズ）を展開していきたい。学生と教職員が意見や情報を交換し、相互に学び合う場として活用してほしい」。阿部芳吉学長は「学生だけでなく、地域にも愛されるラーニングコモンズとなるような取組みを考えていきたい。学生にとって価値ある学習の場になることを期待している」と話されました。

披露式に訪れた中島貴志さん（大学院1年）は、「ラーニングコモンズは、アイディア次第で使い方がどんどん広がると思います。大型マルチビジョンから伝わってくる迫力や臨場感は素晴らしい。リオデジャネイロオリンピックの時には、大型マルチビジョンを活用したパブリックビューイングで日本代表を応援してみたいです」と話してくれました。

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL　0224-55-1802
FAX　0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

専門機器使い本学で体力測定―プロ野球楽天新人8選手

最大酸素摂取量を測定するオコエ選手＝仙台大学スポーツ生理学実験室

１月１０日（日）、プロ野球東北楽天ゴールデンイーグルスの新人８選手（オコエ瑠偉外野手・茂木栄五郎内野手・堀内謙伍捕手・石橋良太投手・足立祐一捕手・村林一輝内野手・出口匠内野手・山田大樹内野手）が、本学で専門機器を使った体力測定を行ないました。東北楽天ゴールデンイーグルスの新人選手の体力測定は、選手それぞれの体力やコンディションの把握、練習メニューの設定などの参考にするために、本学で６年前から実施されています。

新人選手たちは、最大酸素摂取量（全身持久力の指標）と脚筋力の測定を行ない、ドラフト１位のオコエ選手（＝写真）も苦しそうな表情を浮かべながら取り組んでいました。

今回の体力測定では、本学の高橋弘彦教授、内丸仁・竹村英和の各准教授、山口貴久・高橋陽介の各講師が測定指導を行ない、本学体育学科トレーナーコース及びアスレティックトレーナー部の学生らが測定補助を行ないました。

脚筋力の測定補助を行なったアスレティックトレーナー部の野澤照平さん（体育学科３年－栃木・大田原高校出身）は、「楽天の体力測定の補助を行なったのは、今回で２回目です。選手たちに理解してもらえるよう、分かりやすい言葉での説明を心がけました。今後のトレーナー活動に生かしていきたいです」と話し、本学の山口講師は「スポーツ科学の教育研究機関として、本学の専門機器を使った楽天との連携・協力を通して、チーム強化や成績向上に繋げてほしい。トレーナーを目指す学生たちの実践教育の場になっている」と語りました。

第4回　全国高校生介護技術コンテストに参加！「奨励賞」受賞

平成２７年１０月３１日、１１月１日に三重県伊勢市にて行われた「第４回高校生介護技術コンテスト」に東北地区の代表として、明成高校介護福祉科２年生５名が出場しました。（選手：阿部花音、加藤すみか　補欠選手：奥田萌花　サポート：天野海晴、佐藤茜）

コンテストの課題は２段階で提示され、介護者の「現場対応力」が問われる難題でしたが、選手たちは心のこもった思いやりある介護実践を発表しました。

多くの方から「感動した！」との声を頂き、審査委員からは「身だしなみ、態度、姿勢が非常に素晴らしい。福祉を学ぶ高校生のお手本にしたい。ボディメカニクスと残存能力を活かした介助も非常に素晴らしかった。」と高く評価されました。惜しくも『最優秀賞』には届きませんでしたが、『奨励賞』を頂き、生徒たちは他校の発表から多くの事を学び、「来年もチャレンジしたい」と新たな目標を見つけました。

このコンテストに向け、本学科卒業の高橋先生や支倉先生が生徒たちと朝、昼、放課後と練習を重ねてきました。今大会を通して、改めて福祉を学ぶ高校生の大きな可能性を感じる事ができ、今後も明成高校介護福祉科と健康福祉学科と連携を深めながら頑張っていきたいとの報告がありました。

仙台大学で学び、現在、高校で介護福祉士の人材養成に携わり大きな力を発揮していること、そしてこのような報告は大変うれしく感動します。

＜報 告：健康福祉学科長　大山さく子＞

阿部学長韓国（龍仁大学・韓国体育大学）訪問

本学への留学希望学生（龍仁大学）を交えて

12月16日から18日、韓国との交流促進を目的に学長以下５名で龍仁（ヨンニン）大学と韓国体育大学を訪問しました。両大学とも本学とは十年来の交流関係を育んできています。今回は親交の深い斎藤浩二現代武道学科長や、南條女子柔道部監督も同行したこともあり、両大学とも学長一行を大歓迎してくださいました。

龍仁大学はソウルの南東の龍仁市にある体育・スポーツから科学、芸術分野へと領域を広げていった総合大学です。龍仁大学とは学生交流に関する合意書の調印を行ったほか、４月から本学に長期留学する希望者４名も挨拶にかけつけてくれました。

上：パク副学長（龍仁大学）と本学阿部学長
下：病をおしてかけつけたパク学長と談笑

また、本年度韓国大学選手権優勝チームであるサッカー部や、オリンピックメダリストも交えて練習する柔道部の様子、その他障がい児用のスポーツ指導施設など、龍仁大学の充実した体育関連施設も視察させていただきました。

韓国体育大学はソウル市内にある韓国唯一の国立体育大学です。テコンドーやスピードスケートなどで世界レベルの選手を多数輩出しています。本学現代武道学科でテコンドーをご指導くださる張先生のいらっしゃる大学でもあります。

韓国体育大学からも日本や本学に興味を抱いている学生がおり、２月には教員と共に本学を訪れたいとのことでした。

韓国体育大学のキム学長（右）

韓国体育大学にはスピードスケートのショートトラック専用リンクがあり、メダリストを多数育成したチョン教授にお話をうかがうことができました。また、日本からも練習のため選手が来ていました。テコンドー学科の演舞も披露してくださり、空手六段の阿部学長は食い入るように見つめていました。

テコンドーの演武

韓国がオリンピックで獲得するメダルは龍仁大学の学生およびＯＢが20%、韓国体育大学の学生およびＯＢが25%などと競い合っている様子を伺い、互いに高いレベルでのよいライバル関係にあることが感じられました。

今回の学長訪韓を機会に、両大学とも本学との交流をより進めていきたいとの意向が確認できました。

本学と韓国体育大学のスタッフ

＜報 告：国際交流センター長　荒井龍弥＞

DAN DAN DANCE&SPORTS 12thを開催
―「挑戦」をテーマに24組がダンスを披露

迫力あるダンスパフォーマンスを披露する仙台大学わんぱくフット
＝えずこホール（宮城県大河原町）

1月23日（土）、えずこホール（仙南芸術文化ホール）において、今年で12回目を迎えた「DAN DAN DANCE&SPORTS 12th」（主催：仙台大学・DAN DAN DANCE&SPORTS実行委員会）が開催され、約３００名の方々がご来場下さいました。老若男女・障害の有無を問わないダンサーたち24組の「挑戦」をテーマにした力強く華麗なダンスが披露され、会場から大きな歓声と拍手が送られました。

仙台大学からは、男女新体操競技部・体操競技部・ブレイキン同好会のほか多数の団体が出演。明成高校・東北生活文化大学高校・常盤木学園高校・クラーク記念国際高校仙台キャンパスの高校生ダンサーたちも若さ溢れるエネルギッシュなダンスを披露し、会場を大いに盛り上げました。

最終演技では、ゲストダンサーとして招かれたドイツで活躍しているミハエル・シャンドール氏が、繊細な感性と創造性のある「コンテンポラリーダンス」を繰り広げ、会場は表現力豊かなダンスに魅了されました。

DAN DAN DANCE&SPORTS 12thを無事に終えた実行委員長の坂祐希さん（運動栄養学科4年－福島･須賀川桐陽高校出身）は「無事に終えられた感動と感謝の気持ちでいっぱいです。それぞれの作品に個性があり、一生懸命さが伝わるものばかりで、見応えがありました。出演者の笑顔が見られて良かったです」。本学の山梨雅枝講師は「学生たちに、ダンスを「踊る」・「創る」という力のほかに、「観る」という「鑑賞力」が身に付いてきているという手応えを感じています。ドイツから招聘したミハエル氏には、学生たちのダンスの作品指導をして頂きました。英語でコミュニケーションが交わされ、海外に目を向ける学生たちが増えれば嬉しいです」と話されました。

なお、「DAN DAN DANCE&SPORTS」は、毎年１回開催されております。

ミハエル・シャンドール氏

平成28年度大学入試センター試験終了

１月１６日（土）～１７日（日）に実施された大学入試センター試験が無事終了しました。今年の宮城県内の志願者数は去年より１５６人少ない９、７４２人で、宮城県の１２ヶ所１１大学を会場とし、そのうち仙台大学では７５０人が受験しました。

１６日に地理歴史・公民・国語・外国語、１７日に理科と数学それぞれの試験が行われましたが、心配されたリスニングの再試験、体調を崩す受験生、別室対応も一切起きず、今冬の最低気温を記録した１６日は、積雪や凍結による受験生の転倒、怪我などが心配されたものの、幸い特段の影響もありませんでした。

２月６日（土）～７日（日）に本学の一般入試試験も予定されており、受験生にとって希望のふくらむ暖かい春は間もなくです。

「講座仙台学2015」で田中智仁准教授が講演―仙台のイベント警備を考える

仙台のイベント警備についてわかりやすく講演する田中准教授
＝仙台市市民活動サポートセンター

本学体育学部現代武道学科の田中智仁准教授は、1月30日（土）、仙台市市民活動サポートセンター６階セミナーホール（仙台市青葉区）で開催された学都仙台コンソーシアム主催の「講座仙台学2015」において、『仙台のイベント警備を考える』と題した講演を行ないました。田中准教授は、約40名の参加者に対して、時折クイズを交えて警備業の基本情報を紹介した上で、仙台のイベント警備の特徴を東京のケースと比較しながら説明しました。

講演の中で、田中准教授は「仙台市は、都市圏を郊外に拡大させず、中心部に都市機能を集中させる効率的で持続可能な街づくりを目指す「コンパクト・シティ」を都市政策として公式に取り入れている」と紹介され、コンパクト・シティのイベントの「万全な警備体制」について持論を発表されました。

また、警備員による「広報」の種類は、「情報広報（来場者に対して各種情報を提供して、興奮・焦燥感等を解消する）・規制広報（来場者の行動・意図を察知し、機先を制して行動を是正することで事故を未然に防止する）・禁止広報（来場者が不穏な行動に出た際、これに対して警告し、行動を制止する）・感謝広報（来場者の協力に対する謝意の表明）の４種類があることを知って頂き、群集心理を踏まえて効率的に実施すれば、お客様に不快感を与えずに事故の発生を警戒・防止できる」と力説しました。

講演後、質疑応答の時間が設けられ、参加者からは「良い写真が撮れそうなスポット（場所）には、大抵警備員が配置されており、写真撮影の妨げになっているので何とかしてほしい」、「警備計画書や警備員の統制要領の重要性について教えてほしい」の質問が出るなど皆さん熱心に聴講されました。

講演を聴講されたワールド警備保障株式会社常駐警備部の中村仁課長は、「東京と仙台の群集の動きの違いを比較しながら、街づくりと警備を考えてコンパクト・シティのイベントの警備を行なうことが重要と話され、大変興味深かったです。改めて警備業について考える機会になりました」と話されました。

ウエイトリフティング部、渡部詩乃選手（体育学科１年）が「全日本学生新人選手権」制す

さらなる飛躍を胸に練習に励む渡部選手
＝仙台大学ウエイトリフティング練習場

平成27年10月25日（日）、埼玉県スポーツ総合センターで開催された「第60回全日本学生ウエイトリフティング新人選手権」で、大学から競技を始めた渡部詩乃選手（体育学科1年－山形･鶴岡北高校出身）が、１年目にして学生新人大会の頂点に立ちました。

渡部選手は、女子53kg級に出場し、スナッチ50kg・ジャーク64kg・トータル114kgで優勝を果たしました。

期待のルーキーに、試合で感じたことや今後の抱負などについてお話しを聞きました。

Q1.表彰台のてっぺんに上がった気持ちは？

優勝できるとは思っていなかったので、驚いています。表彰台のてっぺんは、最高に気持ちよかったです。何度でも最高の気持ちを味わえるよう、初心を忘れず、日々精進して頑張ります。

Q2.目標の選手は？

ロンドンオリンピック日本代表（ウエイトリフティング女子53kg級）の八木かなえ選手です。八木さんは、高校入学と同時に体操からウエイトリフティングに転向されました。私も大学入学後、陸上の円盤投げからウエイトリフティングに転向しましたので、親近感を持っています。八木さんと私では、アスリートとしてのレベルは違い過ぎますが、憧れであり、目標であり、ライバルでもあるという特別の存在です。

Q3.今後の課題や抱負は？

床から膝までのバーベルを引き上げる動作（ファースト動作）が遅いので、懸垂などで広背筋を鍛え、持ち上げるスピードと正しい姿勢を身に付けたいと思います。スクワットや腹筋・背筋・プレス・フォームの修正などの基本を徹底的に反復練習することが、真の実力を付けるために欠かせないと思っています。

自己ベストは、スナッチ53kg・ジャーク70kg・トータル123kgです。常に自己ベストの更新を意識しながら、自分で考えて練習することを目標にして日々練習に励みたいです。

来年度の全日本インカレでは、「５位以内」に入りたいです。

PROFILE

渡部　詩乃（わたなべ　しの）／全日本学生ウエイトリフティング新人選手権「優勝」

体育学科1年－山形・鶴岡北高校出身。
ウエイトリフティング部所属。
1996年（平成8年）11月3日生まれ。山形県鶴岡市出身。
152cm／52kg。血液型O型。
高校時代は、陸上の円盤投げの選手として東北大会出場。高校の恩師から脚力と瞬発力がウエイトリフティング向きと勧められ、仙台大学入学と同時に陸上からウエイトリフティングに転向。
第60回全日本学生ウエイトリフティング新人選手権「優勝」。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 118／ 2016 February
（月1回発行）

ハワイ大学バスケットボールコート

仙台大学 広報室

Monthly Report

仙台大学の施設を拠点としたスケルトン選手育成事業―ユースオリンピックスケルトン日本代表の郷内翔選手（岩沼中2年）らが宮城県副知事を表敬訪問

郷内選手の健闘を祈って、固い握手が交わされた＝宮城県庁
左から：進藤コーチ・郷内選手・鈴木副学長・阿部学長

２月１２日からノルウェーのリレハンメルで開催される「第２回ユースオリンピック冬季競技大会」のスケルトン競技に日本代表として出場する郷内翔選手（宮城･岩沼中学校２年）と本学の阿部芳吉学長・鈴木省三副学長（ユースオリンピックスケルトン日本代表監督）・進藤亮祐新助手（同スケルトンコーチ）らが２月３日（水）に宮城県庁を訪れ、三浦秀一宮城県副知事に出場報告を行ないました。

郷内選手は、公益財団法人東日本大震災復興支援財団からの支援を得て展開している「みやぎジュニアトップアスリートアカデミー」事業（将来、オリンピックや国際大会・国内トップレベルの大会で活躍するための資質をゴールデンエイジ（9～12歳）に身に付けるためのプログラム）の修了生で、現在は仙台大学の施設を拠点に活動を行なっています。同アカデミー事業の修了生で、ユースオリンピック出場は郷内選手が初めて。

副知事表敬訪問の代表挨拶で鈴木副学長は「郷内選手のユースオリンピック出場までの道のりは平坦ではなかった。２年間、スケルトン競技に挑戦した本人（郷内選手）の努力は素晴らしい。スケルトン競技を通して人間力を磨き、復興を支える力を有する先導的な人材として活躍することを期待している」と話されました。続いて、郷内選手は「ユースオリンピックに出場する夢が実現できて本当に嬉しいです。感謝の気持ちを忘れず、お世話になった皆様への恩返しになる思いを込めながら、スケルトンの滑走に全力を注いできます」と力強く決意表明を述べました。

三浦副知事からは、「ユースオリンピックを通して、海外で友人ができたりするなど、たくさんの素敵な思い出を持ち帰ってきて下さい。その先に本物の冬季オリンピックが見えてきます」と激励の言葉が述べられました。

【裏面：ユースオリンピック／男子スケルトン・郷内選手は１５位】

＜ 目 次 ＞

仙台大学の施設を拠点としたスケルトン選手育成事業―ユースオリンピックスケルトン日本代表の郷内翔選手(岩沼中2年)らが宮城県副知事を表敬訪問	1
アスレティックトレーナーの本場 米国・ハワイ大学でAT研修を実施	3
阿部学長が熊原投手（横浜DeNA）と硬式野球部を激励	6
「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに「第１１回健康福祉研究会」を開催／「健康福祉学科開設20周年を祝う会」も開催される	7
仙台大学主催「第2回学術講演会」を開催－体育学の過去・現在・未来	8
OB紹介・ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長　高野竜雄さん	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL　0224-55-1802
FAX　0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

ユースオリンピック／男子スケルトン・郷内選手は15位

レース直前の郷内選手（右）と進藤
＝ノルウェー・リレハンメル

2月19日に第2回冬季ユースオリンピックがノルウェー・リレハンメルで開催され、スケルトン競技で仙台大学を拠点にトレーニングを行っていた郷内翔選手（岩沼中２年）が出場、２０人中15位となりました。郷内選手は宮城県から仙台大学への委託事業である「宮城ジュニアトップアスリートアカデミー」の第１期修了生です。アカデミー修了後にスケルトン競技を選択した郷内選手を宮城県ボブスレー・リュージュ連盟が受け入れ、鈴木省三副学長を中心に新助手進藤と２年間、第１回ユースオリンピックの際の『伊達なスポーツプロジェクト』のノウハウを活かしつつ、仙台大学の施設を利用し育成してきました。

昨年１２月にオーストリアとノルウェーで行われた予選会に国内外から３６人が参加し、ランキング順に郷内選手は１８位で２０位までの出状枠を勝ち取り、今回のユースオリンピックに最年少選手として出場しました。

レース当日は、前日までの温暖な天気ではなく、外気温、氷温ともに低くレースに相応しい天候で、郷内選手の持ち味であるプッシュ（ソリを押す動作）で得た前半の加速をゴールまで失速させずに滑走する事ができるのか？　が勝負のポイントでした。

ユースオリンピックの年齢枠が14～17歳という中で郷内選手は唯一の14歳、周りの選手が16～17歳の中、３人抜いての１５位は大健闘だったと感じています。

レースを終えた郷内選手は「今の実力における最高のパフォーマンスができ、今回の競技会を終えてやっと世界への挑戦が始まった気持ちです。今後は、ジュニア選手としてナショナルチームに選出されるようトレーニングを積み重ね、トップを狙っていきます。ジュニア選手に選ばれるには仙台大の学生に勝たなければいけないので、日頃から大学生と切磋琢磨し活動していきます」と感想を述べました。

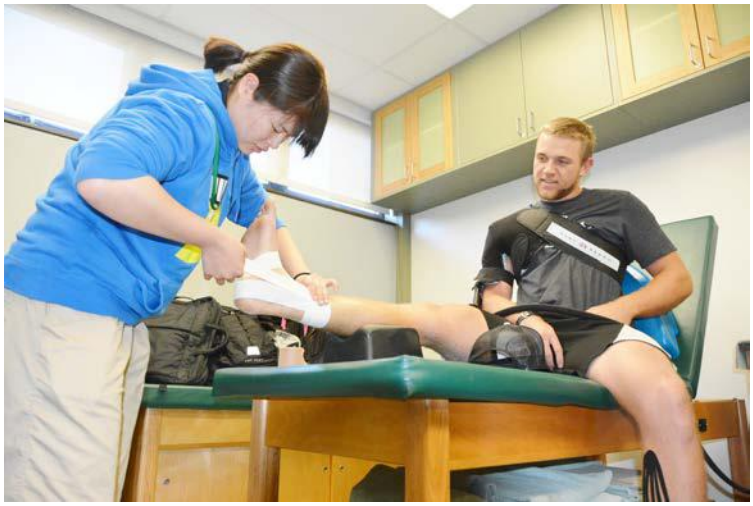
選手達はユースオリンピックで文化・教育プログラムにも参加するなど、競技以外での学びもありました。スケルトン競技のロールモデルアスリートはイギリスのトリノオリンピック銀メダリストShelley・Rudman氏で、選手達はRudman氏と一緒に空気抵抗について身近にあるものを使い、考えて実践するプログラムに参加しました。また、Rudman氏が現役時代、どのように活動してきたのかを実際に聞くことができ、非常に有意義な体験となりました。

次回、第3回冬季ユースオリンピックは2020年スイス・ローザンヌで行われます。これまで2回の経験を活かし、今後もスケルトン競技の中心に仙台大学が関わっていけるよう活動していきたいと考えておりますので、応援よろしくお願い致します。

最後にこの度、この様に現地で郷内選手へのサポートする機会を与えて頂きました朴澤理事長・学事顧問、阿部学長はじめ多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

＜報　告：新助手　進藤 亮祐＞

アスレティックトレーナーの本場米国･ハワイ大学でＡＴ研修を実施



ハワイ大学野球部の選手の足関節にテーピングを巻く前田さん
＝ハワイ大学ＡＴルーム

本学では、アメリカの学校現場で定着しているアスレティックトレーニング分野についての研究と教育の推進を目的として、ハワイ大学マノア校と交流を行ってきました。平成15年からは、希望する学生たちがアスレティックトレーニング研修に参加し、本場での実践を自分の目で確かめています。平成16年度にインターネットを利用したアスレティックトレーニングについての遠隔授業を開講し、多くの本学の学生が本場のアスレティックトレーニングの実際を学んできました。遠隔授業の受講者、研修に参加した学生の中には、本学卒業後にハワイ大学大学院に進学し、アメリカのNATA(National Athletic Trainers' Association)のアスレティックトレーナー資格を取得する者もいます。平成26年9月には、本学とハワイ大学マノア校教育学部間で、国際学術交流に関する基本合意書が締結され、今後は同校との連携によりさらなる発展が期待されます。

今年2月8日（月）から2月15日（月）にかけて、「平成27年度ハワイ大学ＡＴ研修ビギナーコース（通算22回目）」が実施されました。同研修は、日本学生支援機構の海外留学支援制度（短期派遣）に継続して採択されているプログラムでもあります。

今回のＡＴ研修には、米国のＮＡＴＡアスレティックトレーナー資格取得に興味関心のある本学の藤井千絢さん（体育学科2年－宮城･気仙沼西高校出身）･山本郁さん（同2年－宮城･涌谷高校出身）･稲澤裕喜さん（同2年－福島･安達高校出身）･杉山一博さん（同2年－宮城･明成高校出身）･小畑和輝さん（同2年－宮城･泉松陵高校出身）･今野舞子さん（同1年－山形･鶴岡北高校出身）･佐藤光貴さん（同1年－宮城･塩釜高校出身）･太田遥さん（健康福祉学科1年－青森･弘前中央高校出身）･前田美優さん（運動栄養学科1年－千葉･市立船橋高校出身）の体育学科トレーナーコースや、アスレティックトレーナー部に所属する学生９名が参加し、三谷高史講師（引率責任者）･白幡恭子助教･鈴木のぞみ新助手らの教職員が引率しました。

ＡＴ研修では、ハワイ大学のアスレティックトレーニング関連の「Athletic Training Clinical Experience」・「Olympic Weight」などの授業に出席。また、同大のアメリカンフットボール部や、野球部で勤務するアスレティックトレーナーの仕事を見学し、また実際に体験、指導いただく機会もありました。学生たちは、ハワイ大学の大柄な選手たちに実際テーピングを巻くなど戸惑いながらも、普段できない貴重な経験に目を輝かせていました。また、ハワイ大学以外にも、本学への遠隔授業やAT研修のプログラムコーディネーターを担当している金岡友樹氏が勤務するマッキンリー高校のアスレティックトレーニングルームや体育施設などを見学。金岡氏は、学生たちに向けて、ハワイのアスレティックトレーナー事情やスポーツ現場におけるアスレティックトレーナーの役割と心構えなどを語り、学生たちは希望と夢を膨らませていました。

ＡＴ研修の修了式では、お世話になったハワイ大学の教職員に対して、学生一人ひとりから英語でお礼の言葉が述べられ、意欲的に英会話に取り組む姿勢が見られました。同修了式終了後、前田さん（同）は「今から、米国のＮＡＴＡアスレティックトレーナー資格取得とハワイ大学大学院に進学することを真剣に考えていきたいです。そのためには、自分の英語力（ＴＯＥＦＬ）を強化する必要があると感じました。これからも、英語を継続して勉強していくつもりです」。三谷講師は「アスレティックトレーナーとしての専門的な知識や技術を獲得するのは大切なことですが、海外で「自分で何とかする力」は、遠隔授業だけでは身に付きません。現地研修（ハワイ）は、継続的に実施することが欠かせないと思いました」と話されました。

学生たちには、今回のAT研修を通して、英語圏での語学研修や留学を志向し、国際感覚と異文化の見聞を広げ、自己の成長に繋がることが期待されています。

お世話になったハワイ大学の方々と一緒に

平成27年度カリフォルニア州立大学ロングビーチ校日米スポーツ科学事情比較セミナー

2016年2月7日から2月23日（現地研修期間：2月8日から2月19日）にかけて、平成27年度カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）における短期研修「日米スポーツ科学事情比較セミナー」が実施されました。参加者は体育学科より、保科政翔（3年）、運動栄養学科より、尾崎洋美（4年）、大林礼佳（3年）、中鉢礼菜（3年）、岩泉莉奈（2年）、伊藤更沙（2年）の4名、健康福祉学科より、阿部伊武輝（3年）、赤崎昌穂（1年）、副島琴実（1年）の3名の参加で、計9名という構成でした。教員は前半に弓田恵里香講師、後半にマーティー特命副学長が入れ替わる形となり、全日程を菅野恵子が引率しました。

このプログラムは2009年8月から始まり、今年で8年目となります。昨年度より、当初の「スポーツ栄養とスポーツマネジメント」に特化した内容から一部変更し、コーチングの講義も含め「スポーツ科学」と、テーマの幅を広げています。そのため、参加学生の専門分野ではない講義もあったようですが、講義中は自分の競技や経験に置き換えて質問するなど、積極的に授業に参加していました。また、尾崎洋美さん（運動栄養学科4年）からは、日本で習った内容を挙げ、米国と日本を比較する質問をするなど、文化の違いについても着目している様子もありました。大林礼佳さん（運動栄養学科3年）は、学んだことに対しての感想を自ら発表するなど、主体性も見られ、充実した講義になったと思います。

講義のみならず、施設見学やスポーツ観戦もこのプログラムの魅力の一つです。CSULB校内にあるWalter Pyramidでは、バスケットボールとバレーボールを観戦しました。日中の準備から視察でき、同じ大学生が競技を支えていることや、会場設備に驚きを隠せない様子でした。

バスケットボールの試合では熱心に応援し、合間のイベントでは本学の学生が“アピール”で勝利しピザをもらい会場内のスクリーンに大きく映し出されていました。また、プロバスケットボールNBA観戦では、まず会場の広さに圧倒され、選手のパフォーマンスに感嘆し、日本のスポーツ観戦とは一味違う雰囲気を体感できたのではないかと思います。

プログラムの中には、学生や職員の方との交流の時間もあり、今年のグループはハッピに着替え“よさこい”を披露するなど、日本文化の一部を紹介していました。参加してくれた方々と一緒に踊れるように、身振り手振りも交え英語で説明しながら、最後には一緒に踊れるようになっていました。

また、本プログラムでホームステイをするようになって3年目となります。今回は、2～3人1組で4家庭にお世話になりました。家と学校間の送迎だけではなく、各家庭でBBQをしたり合同でテニスをしたり、または子供達と縄跳びをしたりと、日々色々な形でコミュニケーションを取っていたようです。最後の見送りでは涙を流しながらのお別れとなるくらい交流を深めており、各々感謝の気持ちを手紙にし、渡していました。

最後に行われたセレモニーでは、修了書を手渡され、各自英語でスピーチを行いました。なかなかうまく話せず、伝えられない様子も見受けられましたが、たくさんのことを学べたことや、感謝の気持ちを表していました。また、帰国後も英語を勉強したいと意気込む学生もいました。保科政翔さん（体育学科3年）は、CSULB関係者に「また来ます。」と言い、「すごく貴重な経験となりました。今回の経験を今後の大学生活や人生に活かしていきたいと思います。」との感想を述べ、いい刺激になったようです。

本年度も準備から、約2週間のプログラムを無事に終了できたことを関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、来年度もより質の高いプログラムにできるよう、ご協力頂ければ幸いです。

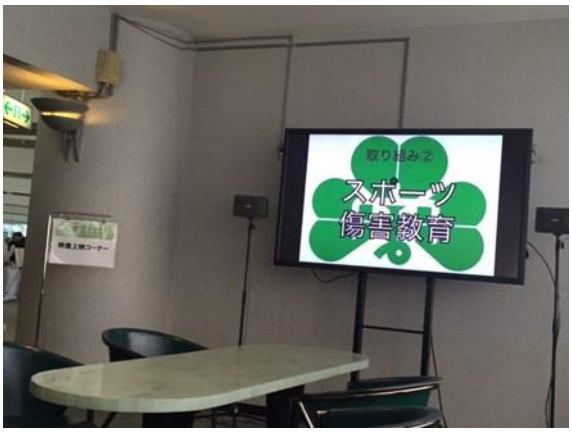
＜報 告：新助手　菅野 恵子＞

平成27年度第3回　新しい東北　交流会 in 仙台
～この先へ続く東北の新たな挑戦～に参加して

平成28年2月11日（木）、仙台サンプラザホールにて開催された平成27年度第3回「新しい東北　交流会in 仙台」に参加しました。この交流会は復興庁官民連携推進協議会が主催し、東日本大震災の被災県である岩手県、宮城県、福島県の企業・団体が震災から復興していく歩みの中で始めた「新しい挑戦」を紹介し合い、更なる復興のための情報交換を目的に開催されました。当日は約360団体から760名が来場したそうです。

オープニングは、復興庁の髙木毅復興大臣と村井嘉浩宮城県知事による挨拶があり、その後6団体の先導的なビジネスの顕彰がなされました。パネルディスカッション、パネル展示、ブース出展、座談会、取り組み発表会などが会場内各エリアで行われ、来場者は自由に歩き回り参加し、情報収集や懇談をしていました。私達は資料設置コーナーに新刷のパンフレットを配置し、映像上映コーナーにて活動紹介PVを流して頂きました。私達の参加目的は仙台大学が手掛けている全国的にも新しい分野である「高校へアスレティックトレーニングを展開する」取り組みを参加者に知ってもらうと同時に、もっと地域で認知を上げていくためにはどのように活動を広げたらいいのか、他企業・団体から得る情報のもと向上したいと考えていました。

交流会の出展者は復興の現場で新たな挑戦をする90以上の企業・団体で、多くは飲食産業、観光産業、建築産業でした。コミュニティ・町づくりなどを手掛けるNPOや協会もあり、それぞれブース出展やパネル展示を通して活動紹介をしていました。教育機関では東北大学大学院農学研究科が復興農学の研究や人材育成についてブース出展を行い、岩手大学が三陸復興推進機構を立ち上げて教育支援や生活支援などの6部門の取り組みを行っていることを紹介、また、多賀城高校が全国で2校目となる「災害科学科」の開設などを発表していました。数多くの企業・団体が出展をし、360団体から760名が来場したそうですが、残念ながら私達の資料を来場者に手にとって頂くことが少なかったように感じました。



今回はパネル展示やブース出展といったPR機会がもらえず資料配布と映像上映に限られ、活動紹介という意味では十分ではありませんでしたが、次回以降の参加で改めてPR機会を増やしていきたいと考えています。「新しい東北」は官民連携推進協議会のウェブサイトにても情報発信が可能ですので、活用していくことも考えています。（**http://www.newtohoku.org/**）情報収集という意味では、コミュニティづくりなどを手がける企業の取り組みを知り、中でも子ども達の運動離れを解消すべく始まったイベント企画に共鳴しました。そしてコミュニティづくりと明仙フィールドでの川平AT活動を絡めていくことができないか、例えば子ども達や高齢者とスポーツを通して交流をしていくなど、私達スタッフ間で話し合いを深める良い機会となりました。今後も川平活動のPRの場、地域の取り組みと繋がる場としてこの交流会に継続的に参加していきます。

＜報 告：新　助　手　白坂 広子
新　助　手　小野 勇太
法人事務局　品田 有佳＞

阿部学長が熊原投手（横浜DeNA）と硬式野球部を激励
―沖縄・広島の各キャンプ地訪問―

プロ〝初登板〟の後、沖縄・宜野湾球場内で激励に訪れた阿部学長らと記念撮影する熊原投手

仙台大学が初めて日本プロ野球界に送り出した熊原健人投手（横浜DeNA）と、3年連続全日本大学選手権出場を目指す硬式野球部を応援しようと、阿部芳吉学長が2月17日～19日、沖縄県宜野湾市と広島県呉市の各キャンプ地を訪れ、練習・試合を視察するとともに同投手や部員たちを激励しました。

キャンプ地訪問には、八巻芳信硬式野球部OB会長と高橋義夫硬式野球部長が同行しました。一行は仙台空港からの直行便で沖縄入り。那覇空港から仙台大学同窓会那覇支部・玉城良泰副支部長の案内で横浜DeNAのキャンプ地・宜野湾球場に向かいました。当日の横浜DeNAは韓国・KIAとの練習試合を予定し、熊原投手を〝初登板〟させるスケジュールでした。しかし、直行便の那覇到着が午後3時過ぎだったため、一行が球場に到着した時には試合終了間際。残念ながら熊原投手のプレーを見ることはできず、最初に目にしたのが初登板を終えて記者たちに囲まれる同投手のインタビュー風景でした。

熊原投手の〝初登板〟は、翌日のスポーツ紙に掲載された通り、〝ほろ苦かった〟ようです。同じ新人でドラフト1位入団の今永昇太投手（駒大出）に続く2番手として四回からマウンドに上がりましたが、2イニング投げて被安打４、3失点、2つのボークを取られる結果となりました。その試合後、阿部学長らは球場内で高田繁・球団GMから歓迎のあいさつを受け、熊原投手と約1時間懇談しました。この日の登板について同投手は「試合前のブルペンではすごく緊張したが、本番では比較的平常心だった」と話し、「（結果は）今の自分の実力。シーズン中でなくてよかった。（ボークについては審判に）早い段階で指摘してもらえてありがたい。いろいろ課題が浮かんできたので、それを次に生かしたい」と前向きに受け止めていました。

これに対して阿部学長は「横浜スタジアムへの応援ツアーを考えている。頑張って実績を上げ、シーズンオフには帰省して故郷の人びとを大いに喜ばせてほしい」と激励しました。阿部学長らは同夜、真玉橋克彦・同窓会沖縄支部長はじめ、硬式野球部OBを中心とした同支部の人たちと懇親を深め、翌日午前には宜野湾球場で熊原投手の守備練習などを視察して沖縄を後にしました。

キャンプ地訪問第2弾は、硬式野球部員が2月14日から半月間の日程で練習に汗を流す呉市です。同キャンプには森本吉謙監督と坪井俊樹、田上紳二郎両コーチのほか、入学予定の新人11人を含む51人が参加し、4月9日に始まる仙台6大学野球春季リーグでの3連覇を目指して調整に励んでいます。キャンプ視察は19日朝から夕方まで行われ、練習前のあいさつで阿部学長は全スタッフ、選手に熊原投手の近況を伝える一方、「今年も全日本大学選手権出場を果たし、皆さんがプレーする神宮球場と熊原投手がマウンドに立つ横浜スタジアムでのダブル観戦を実現してほしい」と励ましました。この日は、地元専門学校チームとの練習試合も行われ、阿部学長一行は新人たちのプレーに熱い視線を送りました。

仙台大学同窓会沖縄支部懇親会

＜報　告：硬式野球部　部長　高橋　義夫＞

「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに「第１１回健康福祉研究会」を開催／「健康福祉学科開設20周年を祝う会」も開催される

パネルディスカッションの様子＝仙台ガーデンパレス

２月２６日（金）、「健康福祉」をキーワードに介護・福祉・介護予防などの研究と研修のための「第１１回健康福祉研究会」（仙台大学体育学部健康福祉学科主催）が仙台ガーデンパレス（仙台市宮城野区）で開催されました。「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに本学関係者が高齢者における運動の重要性や本学健康福祉学科のこれまでの人材養成について議論し、医療・介護・福祉従事者や本学の卒業生・在学生ら約250名の参加者が熱心に耳を傾けました。

卒業生で聖カタリナ大学人間健康福祉学部教授の丸山裕司氏【写真】（平成12年健康福祉学科卒）は「高齢期における健康運動について」と題して特別講演を行ないました。同氏から「離島と都市部の高齢者を対象に１日の歩数や運動量を比較したところ、あまり差がなかった」ことが紹介されました。また、高齢者が自分自身で筋力維持に努め、要介護状態を防ぎ、健康寿命を延ばすＰＰＫ（ピンピンコロリ）の人生を目指す必要性などについてご講演されました。

パネルディスカッションのテーマは「健康福祉学科のこれまでの人材養成と明日」。介護福祉士養成の立場から本学の大山さく子健康福祉学科長は、「本学科の学生たちは、明るく元気で素直。介護実習先でもコミュニケーション能力があり、レクリエーションも上手と好評を得ている。今後も仙台大生らしさのある介護福祉士を養成していきたい」。教員養成の立場から本学の渡邊康男教授は、「児童生徒の思いや願いに寄り添う姿勢、専門性に裏付けられた臨機応変に対応できる実践力を身に付けた教師を養成したい」。

健康運動指導士養成の立場から笠原岳人准教授は「運動好きの子どもを育てること、働く世代の健康づくりを支援すること、高齢者の介護予防に取り組み子どもも大人も“笑顔”にできる健康運動指導士を養成したい」。本学独自の認定資格である健康づくり運動サポーター養成の立場から小池和幸教授は、「健康づくり運動サポーター（健サポ）の実践の場で、専門的な知識や技術を身に付け、小さな成功体験を積み重ねることにより得られた達成感が自己効力感を高める。学生たちには、健サポの活動を通して、主体的な職業選択や高い職業意識に繋げてほしい」とそれぞれがこれまでの学科における人材養成と今後について話をしました。

最後に、橋本実副学長がパネルディスカッションのまとめとして、「上工は未病を治す。下工は病を治すという言葉があるが、本学健康福祉学科は“未病を治す”人材をこれからも養成していく」と力強く述べられました。

「健康福祉研究会」終了後、引き続き「健康福祉学科開設２０周年を祝う会」が開催され、本学の朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長の他、総勢１００名を超える同窓生・旧教職員らが集い、盛大に祝う会が行なわれました。

コーディネーター
①橋本実副学長
パネリスト
②大山さく子教授（健康福祉学科長）
③渡邊康男教授
④笠原岳人准教授
⑤小池和幸教授

「健康福祉学科開設20周年を祝う会」の集合写真

大阪学院大学・(株)ボディプラスインターナショナル一行来訪

２月１日（月）大阪学院大学から総長補佐・白井元康氏、准教授・白井克典氏及び仙台市内に本社を構える（株）ボディプラスインターナショナルの代表取締役・デービット・ホルトン氏他、７名が来訪し、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、山谷幸司学長特別補佐・運動栄養学科長らと歓談の後、本学施設を熱心に見学され懇親を深めました。

大阪学院大学は１９４０年に創立された歴史ある総合大学で、大阪府吹田市を拠点に高等学校、大阪学院大学短期大学部、通信教育部、大学院があり、経営者の子弟など、多くの学生達が学んでいます。大阪学院大学は昨今、学生ゴルフ選手権で２年連続の全国制覇を果たし、スポーツの分野をさらに強化したいという構想があるそうで、このたび、北海道・東北地区唯一の体育大学である本学への訪問となりました。

最初に朴澤理事長・学事顧問は「本学は体育系の単科大学として、スポーツ指導者を育成するという大きな目的がありますが、それ以外にもスポーツをサポートする職域に学生達が就職することができるよう、さまざまな領域で勉学できる仕組みを構築しています。

例えば怪我の予防、負傷した選手の一早い復帰を可能とするアスレティックトレーナー資格者（日本・米国）による指導、栄養面から競技者を支える管理栄養士の育成など、スポーツを取り巻く幅広い分野への道筋を展開しています」と挨拶し、阿部学長は「本学では東日本大震災による被災地への継続的なボランティア活動など、社会貢献も学ぶことができます」と話されました。白井元康総長補佐は「ゴルフについてはたまたま２年連続で日本一になることができましたが、ごく限られた優秀な選手以外、その他大勢のゴルフ部の学生達は学生時代、例えどんなにゴルフに打ち込んだとしても、スポーツとは全く違う分野に就職せざるを得ない現状があり、仙台大学のようにスポーツをキーワードに、さまざまな職種へ着く可能性が開けるというのは非常に羨ましい環境です」と述べられました。

その後、受け渡しが終了したばかりのＬＣ棟（ラーニングコモンズ）をはじめ、低酸素室、第３体育館のトレーニング施設、ＡＴルーム、学食での栄養分析など本学施設を隅々まで見学し、それぞれの担当者と活発な質疑応答が続けられました。

仙台大学主催「第2回学術講演会」を開催－体育学の未来を考える

左から宮西･小浜･阿江･岡出･小松の各教授＝東京エレクトロンホール宮城

２月２８日（日）、東京エレクトロンホール宮城（仙台市青葉区）６階会議室で、仙台大学学術会（小浜明代表幹事）による「第２回学術講演会」が開催されました。テーマは「体育学の過去・現在・未来」。バイオメカニクスが専門の阿江通良教授（筑波大学）と体育科教育学が専門の岡出美則教授（筑波大学）をお招きし、哲学が専門の本学の小松恵一教授を交えて、それぞれの立場から体育学の過去・現在・未来について討論されました。同講演会には、教育関係者ら約２５名がご参加下さいました。司会･コーディネーターは、本学の小浜明･宮西智久の各教授が務めました。

阿江教授は「体育とは、スポーツを含む身体運動を手段もしくは目的とする教育・学習活動である。狭義では学校教育課程の一教科、広義では就学期以外のライフステージを含めた教育・学習ととらえられている。体育を少し広く見ると、「生活を体育的にデザインする」という発想も出てくるであろうし、われわれの体育・スポーツとの付き合い方も変わるのではないか」と指摘。岡出教授は「体育の授業がどのような学習成果を誰に対して、どの程度保証してきたのかに関する実証的なエビデンスの蓄積は乏しかったが、1980年台以降に体育科教育学の研究成果で、授業の成果と教師行動、学習指導計画の質の改善に向けたデータの蓄積やプログラム開発も積極的に進められるようになった」と紹介。小松教授は「スポーツ科学、体育学も一種の応用科学であるとすれば、そこで問われるべきは、莫大な知の蓄積とスポーツの現場との関係である。学校教育における体育、さらには日本特有と言うべき運動部活動と蓄積された知が、どのような媒介関係にあるか、あるいは両者の架橋如何というべき問いである」と強く訴えました。

演者と参加者による質疑応答も実施され、体育学の未来について考える充実した講演会になりました。

OB紹介・ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長　高野竜雄さん

ホテルベルエア仙台の玄関前で笑顔を見せる高野取締役統括部長

現在、ＪＲ仙台駅から徒歩１２分に立地する「ホテルベルエア仙台」で取締役統括部長を務める高野竜雄さん（平成9年体育学科卒）は本学の卒業生。

「ホテルベルエア仙台」に伺い、ホテルの第一線で活躍中のOB高野さんから、同ホテルに就職したきっかけや仕事上で心がけていること、今後の抱負などについてお話しを聞きました。

「負けたくない」という気持ちが原動力

Q1.就職したきっかけは―

大学4年時に、学生結婚しました。必死に就職先を探していた時、当時、就職課の職員だった中鉢芳尚さん（現創職担当課長）に相談したところ、本学の高野昭（たかの　あきら）先生（故人）をご紹介下さいました。高野先生は「ホテルベルエア仙台」のオーナー経営者でもありました。高野先生から「体育会系はホテルマンに向いている」と言われ、「とりあえずやってみよう」という気持ちで、ホテルの世界に飛び込みました。

Q2.ホテルの仕事は―

ホテルマンの仕事は、フロントからベル・ドア・ウエイター・営業・企画と多種多様。ベルエア仙台は、平成8年4月にオープン。私は、ホテルオープン2年目に入社。ホテルは、できたばかりで人気も知名度も低く、お客様が来ない状況にもかかわらず、学生の延長線上の気楽で未熟な考えのまま１年が過ぎました。しかし、私はサービスの「サ」の字も知らなかったはずなのに、一通りの仕事を覚えただけで“出来た感”があり、勘違いしていました。当時の上司から「お前、なぁなぁで仕事してんじゃないよ」と怒られて、目が覚めました。それからは、業務と真剣に向き合うようになり、売り上げを伸ばすためにあらゆる側面から物事を考え、貪欲に働くようになりました。

Q3.仕事上で心がけていることは―

自分が先頭に立って実行することを心がけています。また、一緒に働いているスタッフに気を遣えなければ、お客様により良いサービスを提供することはできません。さらに、現場では、要領の良さ、段取りの良さ、機転が利くことが求められます。何事も、基本がしっかりできなければ、応用（機転）はできません。お客様の喜ぶ顔を想像しながら、日々仕事に取り組んでいます。

Q4.今後の抱負―

まずは、仙台でナンバーワンのホテルになることです。仙台には様々なホテルが建ち、競争は激化していますが、「負けたくない」という気持ちが私の原動力です。当ホテルにしかできないオリジナルのスタイルを追求し、人とのつながりを大切にしながら、自分自身も成長していきたいと思います。

Q5.後輩達へのメッセージ―

後輩たちの活躍を新聞やテレビなどで見る機会が増え、嬉しく思うと同時に大変誇らしく思っています。人生は、人との出会いや巡り合いが大切だと思います。また、自分の考え次第で可能性は拡がるし、逆にゼロにもなります。社会は、物事を前向きに捉える人、素直な人、果敢に挑戦する人を求めています。後悔のない、幸せな人生を歩んでほしいと心から祈念しています。

PROFILE

高野　竜雄（こうの　たつお）／ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長

昭和49年10月28日生。Ｂ型。静岡県下田市出身。
仙台大学体育学部体育学科卒。大学時代は、準硬式野球部所属。４年時春にベストナイン（外野手）に輝く。
趣味は「スポーツ観戦」。好きな食べ物は「コロッケ」。
座右の銘は「自分の意志で未来を創る」。
【職歴】平成9年4月ホテルベルエア仙台宿泊部に配属。
その後、宿泊部主任・宿泊部課長・支配人を経て現在に至る。

SPORTS FOR ALL
～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

SENDAI UNIV.
Vol. 119／ 2016 March
（月1回発行）

仙台大学 広報室

Monthly Report

元オリンピック選手を講師に招き「新体操講習会」を実施―仙台大学と柴田町との連携事業「トップアスリート育成事業」

秋山エリカ氏を囲んで集合写真＝仙台大学新体操場

本学は柴田町からの委託を受け、柴田町の地方創生のプランの一つとして「トップアスリート育成事業」を進めております。同事業では、①総合型スポーツクラブの支援・②小中学生の体力測定と運動能力向上・③放課後の学習、部活動指導・④トップアスリートによる指導・⑤スポーツイベントの開催を推進しております。

３月８日（火）、「トップアスリート育成事業」の一環として、本学第四体育館新体操場で、新体操の個人でロサンゼルスとソウルのオリンピック２大会に出場された秋山エリカ氏（現東京女子体育大学教授）を講師に招いて、仙台大学ジュニア新体操教室らの約５０名の子ども達を対象に、新体操の基本動作を指導する講習会が実施されました。

秋山氏は、子ども達と一緒に、音楽に合わせてジャンプ・バランス・ターン・柔軟などの基本動作を中心に、ボールを使用して、芸術性の高いスポーツである新体操の魅力を伝えていました。

同講習会終了後、秋山氏は「今日は子ども達と一緒にレッスンができて楽しかったです。柴田町・仙台大学から新体操のオリンピック選手が輩出されることを心から楽しみにしています。また機会があれば、ぜひ講習会を開催させて頂きたいです」。講習会に参加した白石第二小学校３年の森小夏さんは、「ボールの腕転がしの基本動作や、柔軟運動を教えてもらえて嬉しかったです。将来は、秋山先生のような新体操のオリンピック選手になりたいです」と話してくれました。

＜ 目 次 ＞

元オリンピック選手を講師に招き「新体操講習会」を実施―仙台大学と柴田町との連携事業「トップアスリート育成事業」	1
仙台大学「平成27年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」を開催	2
529名が思い出の学び舎巣立つ－仙台大学卒業式・大学院修了式	3
仙台大学スポーツ情報サポート研究会が「奨励賞」を受賞	4
4つの海外研修プログラム報告／デンマーク・フィンランド・タイ・台湾	5
現時点で有力なリオ＆リオ・パラ代表候補選手等の紹介－仙台大学関係者	7

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。
Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室
TEL 0224-55-1802
FAX 0224-57-2769
Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り
"A campus for Sports Education through English"
―LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!―
2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017
SENDAI UNIVERSITY Since 1967
SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に～

仙台大学「平成27年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」を開催

角田市教育委員会の笹森泰弘教育専門監（中央）から感謝状を受け取った二川目さん（左）と大庭愛理さん（健康福祉学科3年ー宮城・村田高校出身）（右）＝仙台大学

3月8日（火）、本学第五体育館大教室で「平成27年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式」が開催されました。小・中学校での学習支援や運動学習支援、特別支援学級授業支援、親子レクリエーション支援などを行なった本学学生全員の名前が読み上げられ、仙台市・柴田町・岩沼市・名取市・大河原町・角田市・大崎市の各教育委員会の担当者から、代表の学生一人一ひとりに感謝状が手渡されました。

感謝状贈呈式で岩沼市教育委員会学校教育課の奥野光正課長は、「子ども達にとって学生達は憧れの存在。子ども達は、憧れの背中を追いかけて成長していきます。学生の皆さんには、学校支援ボランティアの経験を、今後の人生の中で生かしてほしい」。名取市教育委員会学校教育課の荒明聖指導主事は、「鉄棒やマット運動など子ども達の苦手分野に一緒に取り組んでくれ、仙台大生にはとても感謝しています」。仙台市教育委員会教育指導課の猪股亮文主幹は、「仙台大生は積極的にコミュニケーションを図り、子ども達からも好評でした。子ども達との関わりを通して、有意義に成長してほしい」と学校支援ボランティアの学生たちに激励と感謝の言葉を述べられました。

本学の阿部芳吉学長は、「震災から５年。学生たちの主体性が世の中を変えていく力になる。18歳から選挙権が与えられるようになり、学生たちの意見が求められるようになった。学校支援ボランティア活動をこれまで以上に活発に行なっていきたい。学生達へのご指導をぜひお願い申し上げます」と御礼の挨拶を述べられました。

角田市教育委員会から感謝状を贈呈された二川目菜緒（ふたかわめ・なお）さん（健康福祉学科4年ー宮城・塩釜高校出身）は、「利用者さんの笑顔がたくさん見たいと思い、４月から介護施設で働くことになりました。学校支援ボランティアで学んだ“人のために役立ちたい”という強い気持ちで、介護の現場でも体育大生らしく笑顔を大切にし、明るく元気な態度で頑張りたいと思います」と話してくれました。

なお、今年度は、仙台市91名・柴田町19名・岩沼市35名・名取市51名・大河原町6名・角田市10名・大崎市2名の計214名の学生が感謝状授与者となっております。

男子サッカー部・DF榎本滉大選手（体育学科3年）―今季もベガルタ仙台の特別指定選手に承認

DF榎本滉大選手

3月4日（金）、本学男子サッカー部のDF榎本滉大（えのもと・こうだい）選手（体育学科3年ー群馬・共愛学園高校出身）が昨年に引き続き、ベガルタ仙台の特別指定選手に承認されました。特別指定選手とは、大学に所属しながら、Ｊリーグのクラブにも登録され、公式戦に出場できる選手。本学男子サッカー部からは、これまでも、OB細川淳矢選手（現Ｊ２水戸／平成19年体育学科卒ー埼玉・武南高校出身）・OB奥埜博亮選手（現Ｊ１仙台／平成24年体育学科卒ー宮城・明成高校出身）・OB蜂須賀孝治選手（現Ｊ１仙台／平成25年体育学科卒ー群馬・桐生第一高校出身）らが本学在学中に特別指定を受け、卒業後はＪリーグ入りを果たしました。

＜榎本滉大選手の経歴＞

小学校２年でサッカーを始め、高校時代まで無名の選手。仙台大学サッカー部では、３年時からレギュラーに定着。2015年の北海道・東北選抜のメンバーとして、デンソーカップサッカーに出場し、ベストイレブンに選出される。2015年・2016年ベガルタ仙台特別指定選手。
身長183cm／体重73kg。

529名が思い出の学び舎巣立つ－仙台大学卒業式･大学院修了式

阿部学長から「卒業証書･学位記」を受け取る体育学科総代の神田さん
＝仙台大学第五体育館

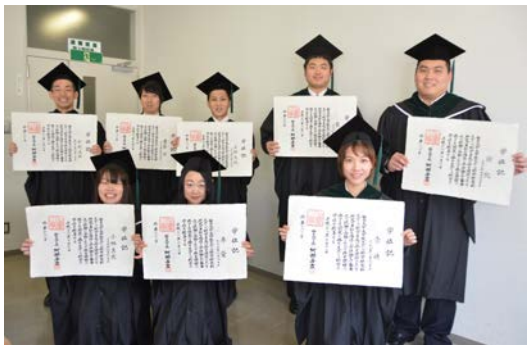
3月12日（土）、本学第五体育館で「平成27年度仙台大学卒業式･大学院修了式」（第46回体育学部「卒業証書･学位記」授与式並びに第17回大学院「学位記」授与式）が挙行されました。体育学部516名（体育学科280名･健康福祉学科99名･運動栄養学科71名･スポーツ情報マスメディア学科35名･現代武道学科31名）及び台湾の台東大学との国際交流提携に基づく4回目のダブルディグリー制1名、並びに大学院スポーツ科学研究科12名のあわせて529名が所定の課程を修了し、「卒業証書･学位記」が授与され、思い出の学び舎を巣立ちました。

開式に先立ち、発生から5年を迎えた「東日本大震災」で津波の犠牲となった、本学に在籍していた学生3名に対し、会場にいる全員で黙とうを捧げました。

また、スポーツ競技や文化活動等において、特に顕著な功績を挙げた学生を表彰する「平成27年度学生表彰式」も併せて行なわれ、「理事長特別賞」を受賞した陸上競技部の加藤由希子さん（2014アジアパラ競技大会女子砲丸投げ「優勝」／健康福祉学科4年－宮城･気仙沼女子高校出身）他3名に、朴澤泰治理事長から賞状及び記念品が授与されました。「学長賞」を受賞したボブスレー･リュージュ･スケルトン部の黒岩俊喜さん（第22回オリンピック冬季競技大会ボブスレー男子4人乗り「第26位」／運動栄養学科4年－神奈川･橘高校出身）他10名には、阿部芳吉学長から賞状が授与されました。「日本介護福祉士養成施設協会会長賞」は山田瑞穂さん（健康福祉学科4年－宮城･小牛田農林高校出身）が、「全国栄養士養成施設協会会長賞」は遠藤真莉香さん（運動栄養学科4年－福島･須賀川桐陽高校出身）がそれぞれ受賞しました。

宮城県の教員採用試験に合格し、4月から県内の小学校で勤務することになっている体育学科総代の神田桃花さん【写真】（体育学科4年－宮城･富谷高校出身）は「挑戦と出会いの４年間でした。特に、フィンランドの短期留学と学校支援ボランティアの経験を通して、視野が広がり、色々な観点で物事を見るようになりました。4月からは、教師という責任の大きさを考えると不安もありますが、子ども達から学ぶ姿勢を忘れず、目の前にいる子ども達のために一生懸命頑張りたいです」と力強く決意の言葉を話しました。

卒業生のますますのご活躍とご健勝を祈念申し上げます。



学位記を手にする大学院の修了生たち

卒業式を終え、笑顔を見せる学部の卒業生たち

ＢＬＳ部の後輩たちに胴上げで祝福される黒岩さん

仙台大学スポーツ情報サポート研究会が「奨励賞」を受賞

「奨励賞」を受賞したスポーツ情報サポート研究会所属学生たち
＝仙台大学映像スタジオ

平成28年2月16日（土）、せんだいメディアテーク７階スタジオシアター（仙台市青葉区）で「平成27年度仙台市自作視聴覚教材審査会」（主催：仙台市教育委員会）が開催され、仙台大学スポーツ情報サポート研究会の出品した作品「東日本大震災と体育」（ＤＶＤビデオ約２０分）が社会教育部門において「奨励賞」を受賞しました。

同自作視聴覚教材審査会の開催趣旨は、「学校教育及び社会体育ともに学習内容が多様化し、学習内容に対応するきめ細かい自作教材の制作と確保が極めて重要になっている。また、郷土の自然、歴史、文化等に関する視聴覚教材の充実が強く求められている。そこで、視聴覚教材自作活動の促進と内容の充実、制作技術の向上を図るため、同審査会を開催する」というものです。

審査員による仙台大学スポーツ情報サポート研究会の出品した作品への講評では、「テーマのインパクトが強い」「体育の中に心と体のバランスの視点があったので良かった」「丁寧にインタビューを重ね、体育の役目を現場の声から収録することに成功していた」「被写体の撮影に安定感があった」など好意的に受け止める意見が多く寄せられました。

「激励賞」受賞作品の「東日本大震災と体育」ＤＶＤビデオの制作に、主体的に取り組んだスポーツ情報サポート研究会の豊川広茉（とよかわ・こうま）さん【写真前列中央】（スポーツ情報マスメディア学科２年－宮城･泉松陵高校出身）は「ビデオカメラの撮影とデータの編集を担当しました。企画・演出・撮影・編集などの一連の作業を学び、映像制作のやりがいと大変さを感じました。取材を通して、たくさんの人たちに出会えたことは、本当に勉強になりました。将来はメディア関係の仕事に就き、物事の本質部分をしっかりと伝えていきたいです」と話してくれました。

健康づくり運動サポーター　認定証書授与式を開催

平成28年3月11日（金）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ※）の認定証書授与式を開催しました。健サポは本学独自の認定資格であり、地域の健康づくりに貢献できる人材の育成を目的として、平成19年度に文部科学省の現代GPに採択され、養成がスタートしました。

これまで延べ441名が本資格を取得しています。今回は平成27年度後期の資格認定評価会で認定された初級11名、中級1名、上級2名の計14名に対して、認定証書が授与されました。

初級を取得した大場萌子さん（運動栄養学科3年）は「現場実習を通して、指導者として安全な運動教室実施のためのサポートの方法や、人と接する際のコミュニケーションの仕方を学んだ。これから就職活動が始まるので、健サポで対人スキルを存分に発揮していきたい」、上級を取得した佐藤達也さん（体育学科4年）は「上級実習を通して、地域の方と協力して一つのイベントを成功させる達成感を味わうことができた。自分が上級まで取得できるとは思っていなかったが、挑戦して本当に良かったと思う。社会に出てもこの経験を活かしていきたい。」とそれぞれコメントしました。

学生たちは現場での実習を通して、私たちの想像を超える学びを得ることができていると感じています。今後も多くの健サポ資格者を輩出し、学生たちが実践力を身に付けて社会で即戦力として活躍できるよう尽力していきたいです。

＜報 告：新助手　齋藤まり＞

4つの海外研修プログラム報告／デンマーク・フィンランド・タイ・台湾

2016年2月23日から3月7日にかけ、デンマーク国リレベルト大学における健康教育プログラムが実施されました。今回のプログラムは健康福祉学科より、小野寺理奈(2年)、金千晶(2年)、増井大悟(1年)の3名の学生が参加しました。また、荒井龍弥国際交流センター長(2月23日から2月27日)、遠山知寿事業戦略室職員(2月23日から2月27日)、松浦里紗新助手(全日程)が引率しました。

本研修は、世界一幸福な国として知られるデンマークでの「福祉・医療・教育」等の視察、デンマーク国民との交流体験などを通して、健康福祉の考え方や国際理解を深めることを目的としています。

研修内容として、リレベルト大学教員による講義や校内・授業の見学、ノアフュンス国民大学教員による「デンマークの民主主義と社会福祉について」等の講義やワークショップなどがありました。また、国民学校や家庭医、知的・身体障害者施設などの施設見学や高齢者施設において、入居者との交流も体験しました。

バーノップ国民大学では、3名の学生が仙台大学の紹介と日本の文化についてプレゼンテーションを行いました。

プレゼンテーションの様子
増井さん(左)小野寺さん(右)

箸の使い方を説明
金さん

金千晶さん(健康福祉学科2年)は、「現地の施設の様子を見学することができ日本との違いを知ることができました。また、現地の方々との交流がとても楽しかったです。これからは英語の勉強にも励みたいです。」増井大悟さん(健康福祉学科1年)は、「初めての海外でしたが、生活などの文化を知ることができました。また、将来のヒントをみつけることができました。」等、学生は様々な刺激を受け、今後の大学生活に向けて意欲的に話をしていました。

本研修は、本学客員研究員の高橋まゆみ先生をはじめ、現地の各関係校の方々にも大変ご協力いただきました。また、このような機会を与えてくださいました朴澤理事長、阿部学長、はじめ多くの関係者の方々に深く御礼申し上げます。

＜報 告：新助手　松浦　里紗＞

この他、2016年2月～3月にかけて、以下の派遣プログラムも実施されました。

1.フィンランド「スポーツ・健康科学分野における短期留学プログラム」

留学先：カヤーニ応用科学大学
期間：2月8日～3月8日
参加学生：体育学科　永田拓真（1年）、運動栄養学科　堀内くるみ（2年）

2.タイ「スポーツ・異文化交流プログラム」

留学先：シーナカリンウィロート大学
期間：2月8日～19日
参加学生：体育学科　今野杏夏、納寛大、島橋元弥、庄子秀人（1年）、運動栄養学科　小川純（2年）、熊谷昴司朗（1年）、現代武道学科　佐藤陽平（3年）

3.台湾「国際交流協定校短期交換留学プログラム」

留学先：台東大学
期間：2月24日～3月24日
参加学生：健康福祉学科　田村暁（1年）

これらは、協定校の正課授業に仙台大学の学生が参加することを基本として実施されていることが他の海外研修プログラムとは大きく異なる特徴です。そのため、学生が主体的に行動し、自ら国際交流の輪を広げています。この詳しい内容は、４月の海外留学・研修報告会で派遣学生たちから直接報告されます。どなたでも出席できますので、学生たちの貴重な経験、学びの成果を是非お聞きください。

東日本大震災から5年～祈りを込めて～

３月１１日（金）、東日本大震災から５年、あの日と同じ金曜日を迎えた午後２時４６分、柴田町の防災無線のサイレンが鳴り響く中、慰霊碑前に集まった学生、教職員ら約３００名が犠牲となった本学の学生３名に黙とうを捧げ、献花台でお焼香をしました。

阿部学長は、津波で流されつつある祖母がその自分の姿を孫に見せまいとして、こちらを振り向くな、お前が助かって万歳、万歳と言いながら濁流に吸い込まれていったという実話を紹介し、生きることの厳しさと尊さを説かれました。本学では女川をはじめ被災地への継続したボランティア活動が行われ、震災を風化させないための地道な努力と魂が、今後もしっかりと学生達に引き継がれて参ります。

仙台大学関係者

現時点で有力なリオ＆リオ・パラ代表候補選手等の紹介

ボート

大元　英照　（おおもと・ひでき）

アイリスオーヤマ株式会社／平成19年仙台大学卒－宮城県塩釜高校出
生年月日：1984年8月12日（31歳）　出身地：宮城県塩釜市

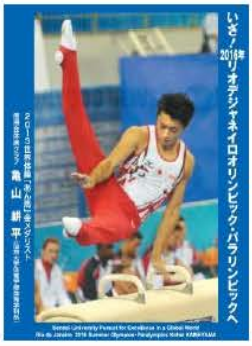
・2006年/2010年/2014年 アジア大会ボート男子軽量級ダブルスカル 優勝※三連覇
・2014年世界選手権ボート男子軽量級ダブルスカル　21位

体　操

亀山　耕平　（かめやま・こうへい）

医療法人徳州会／平成23年仙台大学卒
生年月日：1988年12月28日（27歳）　出身地：宮城県仙台市

・2013世界体操競技選手権・あん馬 で「金メダル」獲得
・2014世界体操競技選手権団体で「銀メダル」獲得



陸上競技（パラ）

加藤　由希子　（かとう・ゆきこ）

SMBC日興証券株式会社／平成28年仙台大学卒－宮城県気仙沼女子高校出
生年月日：1993年8月2日（22歳）　出身地：宮城県気仙沼市

・2013IPC陸上競技選手権大会　女子やり投げで「銅メダル」獲得
・2014仁川アジアパラ競技大会陸上競技 女子砲丸投げで「金メダル」※世界新記録樹立
（同大会の円盤投げでも大会新で「金メダル」獲得）

女子柔道（監督）

南條　充寿　（なんじょう・みつとし）

仙台大学准教授／全日本柔道女子監督
生年月日：1972年4月30日（43歳）　出身地：愛媛県松山市

・2013年3月全日本柔道女子監督に就任

【コーチ】　**田中礼人**（財団法人日本卓球協会／ロンドンオリンピック卓球男子フィジカルコーチ
平成19年仙台大学卒）

【役　員】　**脇本昌樹**（財団法人日本オリンピック委員会／
平成14年仙台大学卒－平成16年仙台大学大学院修了）